

岐 阜 城 跡 4

— 織田信長居館伝承地の確認調査 —

2 0 1 6

岐阜市教育委員会

(公財)岐阜市教育文化振興事業団



池泉造構SR2(B20レンチ)





池泉遺構SR3(C8レンチ)



例 言

- 本書は国史跡岐阜城跡及び岐阜城千疋敷遺跡に所在する埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。
- 調査は遺跡の内容確認を目的としたもので、岐阜市教育委員会が実施した。そのうち発掘調査に関する業務の一部を（公財）岐阜市教育文化振興事業団に委託して実施した。
- 調査期間及び調査組織は以下のとおりである。

調査期間

現場調査 平成24年6月4日～平成25年3月14日

平成26年7月18日～平成27年1月30日

整理・報告作業 平成27年4月1日～平成28年3月24日

指導組織

史跡岐阜城跡整備委員会（平成25年3月28日設置）

中井 均（日本城郭史） 滋賀県立大学 教授

小和田哲男（日本中世史） 静岡大学 名誉教授

丸山 宏（庭園文化史） 名城大学 教授

坂井秀弥（日本考古学） 奈良大学 教授

龍 和善（日本建築史） 名古屋工業大学大学院 教授

史跡岐阜城跡整備専門委員会（平成25年3月28日設置）

仁木 宏（日本中世史） 大阪市立大学大学院 教授

高木 洋（日本考古学） 前岐阜市歴史博物館館長

中井 均（日本城郭史） 滋賀県立大学 教授

山村亜希（歴史地理学） 爱知県立大学 准教授

仲 隆裕（日本庭園史） 京都造形芸術大学 教授

武田 純（造園） 岐阜県立国際園芸アカデミー 客員教授

調査組織

岐阜市教育委員会

教育長 早川三根夫

事務局長 島塚英之（平成24年4月1日～）

若山和明（平成26年4月1日～）

社会教育課長 内堀信雄

同 信長学・市史編さん係長 高橋方紀

同 主査 井川祥子

（公財）岐阜市教育文化振興事業団

理事長 大見富美雄

埋蔵文化財調査事務所長 後藤敏朗（～平成25年3月31日）

青山武彦（～平成27年3月31日）

森田幸夫（平成27年4月1日～）

同 職員 恩田裕之・永井三郎・高見哲士、岩田直樹、下村嘉輝

- 調査参加者は下記の通りである。

調査補助員 青木小夜、川橋清子、高木優子、横井聰子

作業員 安藤久子、伊藤キヨ、伊藤憲二、岩城三枝、上田たかえ、臼井喜七、江崎隆己、

加藤久淳、加藤平和、河野靖夫、小澤和夫、後藤勝利、後藤公志、鷺見米子、高崎和夫
田中真美、辻 春美、上川 裕、林三千雄、平井典子、廣瀬孝一、堀田文夫、宮崎良雄
毛利 徹、安田浩美、柳原正木、山田秀雅、領家正己、渡辺貞子

5. 発掘調査の進行は、内堀・高橋・井川（社会教育課）の指導の下、恩田・永井・高見・岩田・下村（埋蔵文化財調査事務所）を中心に実施した。

6. 遺構図版作成、遺物整理、遺物図版作成、写真図版作成は恩田が行った。

7. 本書の執筆者は下記のとおりである。第5章の自然科学分析は冒頭に記した。全体の編集は恩田が行った。

『岐阜城跡3』から再掲（第1章）

高橋方紀（第2章第1節）

恩田裕之（第2章第2・3節、第3・4章）

8. 現地での測量作業は（株）イビソクに委託した。

9. 自然科学分析は（株）パレオ・ラボに委託した。

10. 遺物の写真撮影はアートフォト右文に委託した。

11. 出土遺物について下記の方に御教示いただいた。

山茶碗・瀬戸美濃窯陶器 藤澤良祐（愛知学院大学教授）

輸入陶磁器 尾野善裕（奈良文化財研究所）

12. 現地調査及び整理作業の過程で下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する次第である。

文化庁：市原富士夫、青木達司

岐阜県教育委員会：松野晶信

有識者：高屋麻里子

13. 調査記録及び出土遺物は岐阜市教育委員会が保管している。

凡　　例

遺構

1. 図中の方位は真北を示し、座標は世界測地系に準拠した。

2. 遺構図の縮尺は、1/50を基本とし、一部は1/60とした。

3. 遺構の略号は下記の通り用いた。

S K：土坑 S V：石垣・石積み・石組み S V X：石列 S R：池泉造構

S X：石敷造構・集石造構・石組状造構・瓦集積・景石の基礎？・平坦面

遺物

1. 遺物実測図の縮尺は、1/3を基本とし、銅製品の一部を1/2、石製品の一部を1/4とした。また瓦は1/4、銅錢は1/2とした。

2. 遺物実測図中の一点鎖線は施釉範囲を示す。

3. 土師器皿のトーンはタール痕を示す。また、ナデ調整は実線で示した。

4. 遺物観察表の口径および底径については、括弧の値は復元値である。土師器皿における口径と器高の実数は、最大値と最少値の平均値である。

5. 遺物集計表の集計値は接合後の破片点数である。

目 次

第1章 岐阜城跡の地理的・歴史的環境	
第1節 立地と環境	1
第2節 岐阜城の歴史	4
第2章 発掘調査の経過	
第1節 調査の経緯	7
第2節 調査の方針	7
第3節 調査の経過	8
第3章 遺構	
第1節 調査地区（平坦地）と遺構の概観	12
第2節 基本層位	14
第3節 検出遺構	18
1. B20トレンチ	18
2. C8トレンチ	22
3. C9トレンチ	25
4. C10トレンチ	35
5. C11トレンチ	35
6. F3トレンチ	43
7. F4トレンチ	43
第4章 遺物	
第1節 遺物の概要	46
第2節 出土遺物	47
第5章 自然科学分析	
第1節 池泉遺構SR2・SR3の珪藻化石群集	61
第2節 池泉遺構SR2・SR3の花粉分析	69
第3節 池泉遺構SR3出土の炭化材樹種同定	73
第4節 池泉遺構SR2・SR3出土の岩石同定	75
第5節 C地区出土瓦の蛍光X線分析	77
第6節 C地区出土瓦の塗分析	83
写真図版	85

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	トレンチ位置図	9・10
第3図	山麓居館跡地形復元図	13
第4図	基本層位柱状図	14
第5図	土層模式図（B地区）	16
第6図	土層模式図（C地区）	17
第7図	池泉遺構SR2平面図	19
第8図	池泉遺構SR2断面図	20
第9図	池泉遺構SR2土層図	21
第10図	B20トレンチ土層図	23・24
第11図	C8トレンチ平面図	26
第12図	C8トレンチ土層・断面図	27
第13図	C9トレンチ平面図	28
第14図	C9-1トレンチ土層図	29
第15図	C9-2・3トレンチ土層図	30
第16図	C9-4トレンチ土層図	31
第17図	C9-5～7トレンチ土層図	32
第18図	C地区土層解釈図	33・34
第19図	C10トレンチ平面図	36
第20図	C10トレンチ土層図	37
第21図	C11トレンチ平面図	38
第22図	C11トレンチ立面図	39
第23図	C11トレンチ土層・断面図	40
第24図	A・C地区遺構配置図	42
第25図	F3トレンチ平面・土層図	44
第26図	F4トレンチ平面・土層図	45
第27～32図	遺物実測図（1）～（6）	50～55
第33図	分析土壤サンプル採取位置図	63
第34図	珪藻化石分布図	67
第35図	花粉分布図	71
第36図	日本の中生代変成岩類の分布	76
第37図	飾り瓦金検出箇所の蛍光X線スペクトル図	78
第38図	赤外分光スペクトル図	84

別添図目次

- 別添図 1 山麓居館跡地形測量図
- 別添図 2 B地区全体図
- 別添図 3 B III区平面図
- 別添図 4 C地区全体図
- 別添図 5 F地区全体図

表目次

第1表 工程表	11
第2表 平坦地一覧	12
第3～6表 遺物観察表（1）～（4）	56～59
第7表 遺物集計表	60
第8表 珪藻分析試料一覧	61
第9～11表 珪藻化石産出表（1）～（3）	64～66
第12表 花粉分析試料一覧	69
第13表 産出花粉孢子一覧表	71
第14表 炭化材の樹種同定結果一覧	73
第15表 岩石同定結果一覧	75
第16表 元素マッピング分析試料一覧	77
第17表 半定量分析結果	78
第18表 赤外分光分析試料一覧	83
第19表 生漆の赤外吸収位置とその強度	83

写真図版目次

卷頭図版 1 池泉遺構 S R 2

卷頭図版 2 池泉遺構 S R 3

写真図版 1	珪藻化石の顕微鏡写真	68
写真図版 2	産出した花粉化石	72
写真図版 3	炭化材の走査型顕微鏡写真	74
写真図版 4	岩石の顕微鏡写真	76
写真図版 5	元素マッピング分析結果（1）	79
写真図版 6	元素マッピング分析結果（2）	80
写真図版 7	元素マッピング分析結果（3）	81
写真図版 8	元素マッピング分析結果（4）	82
写真図版 9	付着物の写真	84
写真図版10	池泉遺構 S R 2 (B20)	85
写真図版11	池泉遺構 S R 2 (B20)	86
写真図版12	石組 S V51・瓦集積 S X56・階段 S X30 (B20)	87
写真図版13	階段 S X30・石敷 S X55 (B20)	88
写真図版14	池泉遺構 S R 3 (C 8)	89
写真図版15	池泉遺構 S R 3 (C 8)	90
写真図版16	池泉遺構 S R 3 (C 8)	91
写真図版17	C 9 トレンチ土層	92
写真図版18	C 9 トレンチ土層	93
写真図版19	石積 S V47 (C10)	94
写真図版20	石垣 1 次 S V 5・石組 S V50・石組 S V49 (C11)	95
写真図版21	石組 S V50・集石遺構 S X53・石組状遺構 S X52 (C11)・F 3・4 トレンチ	96
写真図版22～27	出土遺物写真	97～102

第1章 岐阜城跡の地理的・歴史的環境

第1節 立地と環境（第1図）

岐阜市は岐阜県の中南部に位置する中核都市で、岐阜県の県庁所在地である。地勢は北側の美濃山地と南側の濃尾平野に大きく分けられ、その境界部分、長良川が形成した岐阜扇状地の左岸扇頂部付近にある金華山（標高 329m）に岐阜城は築かれている。

金華山周辺における旧石器時代～縄文時代の遺跡は、東方の日野・寺田遺跡（218・219）が挙げられる。瀬戸内技法のナイフ形石器の接合資料や縄文時代草創期の土器、尖頭器が確認されている。その他、縄文時代の遺物が確認されている周辺の遺跡としては鶯谷遺跡（182）、美殿町遺跡（188）、琴塚遺跡（282）等がある。

弥生時代では前期の遺物が長良川北岸の鷺山岬遺跡（124）で散見されるが、明確な構造が確認され、遺跡が増大するのは中期以降のことである。日野・寺田遺跡では周辺から木製鉗が発見されている他、掘立柱建物群が検出されている。金華山南方の梅林小学校遺跡（196）、華陽小学校遺跡（260）、荒田川流域の江東遺跡（251）等で遺物が確認されているが、いずれも本格的な調査は行われておらず、その実態はよくわかつていない。瑞龍寺山の南斜面では、享保年間に銅鐸が出土したと伝えられており、現在は上加納銅鐸として東京国立博物館の所蔵となっている。また金華山南方の瑞龍寺山頂遺跡（185）は弥生時代の墳墓であり、棺型に割り抜かれた岩盤が現存する。ここでは舶載の「長宜子孫」銘内花文鏡が弥生時代後期の遺物とともに出土している。

続く古墳時代には、金華山と周辺の山々に古墳が造られるようになる。瑞龍寺山周辺では上加納山古墳群（181）、権現山古墳群（180）、金華山東方では日野第1・2古墳群（200・201）等が築かれている。金華山でも千疊敷遺跡2次調査で横穴式石室（千疊敷古墳）が確認されており、周辺に古墳が点在していたと考えられる。この時期の集落跡は長良川南岸では明確に確認されていないが、北岸の鷺山周辺の遺跡や城之内遺跡（123）では弥生時代終末期から古墳時代にかけての住居跡等が多く検出されている。

7世紀後半になると、岐阜市域にもいくつかの古代寺院が建立される。厚見寺跡（193）は現在の瑞龍寺周辺にあったとされる古代寺院で、境内には長さ2.7mを測る大型の塔心礎（県史跡）が残されているほか、周辺から「厚見寺」「厚見中林寺」の文字を押した瓦も見つかっている。このほか、大宝庵寺（244）、健屋庵寺（173）、長良庵寺（城之内遺跡）の存在が知られている。古代には鷺山周辺に東山道ルートがあったと推定されているが、特に鷺山岬遺跡では灰釉陶器や二彩陶器、銅製の巡方が出土していることから、周辺に方県郡の郡役所の存在が推定されている。金華山東方では平安時代後期の灰釉陶器を生産した日野窯跡群があるほか、千疊敷遺跡においても2・3次調査で土坑とそれに伴う土師器等が確認されている。

中世では金華山北東山腹の日野不動洞遺跡（278）において、14世紀末から15世紀前葉を中心に7基の中世墓が確認されており、藏骨器として使用された古瀬戸四耳壺、瓶子が出土している。千疊敷遺跡でも鋳造関連の遺構や梵鐘の鋳型、「大寺」と書かれた墨書き土器などが出土しており、中世段階の金華山西麓には伊奈波神社に隣接する寺院施設があったと推定されている。長良川北岸では鷺山岬遺跡で大規模な堀が確認されているが、この場所は戦国時代の鷺手手城館が築かれた位置とも重なつており、古代から引き続いて重要な地域であったとみられる。

15世紀後半以降になると守護所の存在が顕在化していく。革手・加納（15世紀後半～16世紀初頭）、福光（16世紀初頭～前葉）、枝広（16世紀前葉）そして山県市の大桑（16世紀第2四半期頃）

と軒々と場所を変えることが特徴である。革手・加納は史跡加納城跡（262）、下川手遺跡（263）、水主町遺跡（255）、東川手遺跡（265）が相当する。近世加納城の本丸の位置には、15世紀後半の守護代・斎藤氏の居城である中世加納城が立地していたと推定されており、この段階の土星を確認している。福光は鷺山市場遺跡（100）、鷺山仙道遺跡（122）、下土居北門遺跡（98）、正明寺城之前遺跡（95）、鷺山蟬遺跡が相当する。守護城下の地割を示す土地区画の溝が各所で確認されており、総合すると一辯 120mを一区画として碁盤目状に広がっていたと考えられている。鷺山蟬遺跡では同様の区画に沿った堀と土星に囲まれた城館が確認されており、これが「蟬土手城館」と呼ばれる居館跡であったとみられている。枝広は城之内遺跡が相当する。城之内遺跡では城館の堀が検出されており、その規模は一辯 180m以上と推定される。埋土からは中国銭や中国製磁器等が納められた竹行李が2つ出土した。堀には砂が厚く堆積しており、洪水により廃絶したこと示唆している。

当報告書の調査対象地である金華山西麓の岐阜公園一帯は千畳敷・千畳敷下と呼ばれ、斎藤道三、織田信長等歴代城主の居館が在った場所であると伝えられている。また、史跡岐阜城跡周辺部山城の岐阜城周辺皆群（281）には、砦跡と推定される平地地や石垣等の遺構が分布している。金華山西側の岐阜城下町遺跡（175）は中世から戦国にかけては稻葉山城・岐阜城の城下町として栄え、幕府直轄領を経て尾張藩領となった近世以後は商工業の町として発展する。城下町は、総構が周囲に巡らされ、その北側に接する長良川周辺には、水運の基点として川添と尾張藩の川役所があつた、中河原遺跡（280）がある。

関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城が廢城になった後は、南部に加納城（262）とその城下町が造られ、中山道の宿場町としても栄えた。現在の岐阜市域はこの加納城下町と岐阜城下町の、2つの町が核となつて出来上がっている。

【参考文献】

岐阜市 1980『岐阜市史』通史編原始・古代・中世

岐阜市教育委員会 1987『寺田・日野I』

(財)岐阜市教育文化振興事業団 2002『鷺山仙道遺跡』

岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2003『史跡加納城跡』

岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2003『平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美 2006『守護所と戦国城下町』高志書院

岐阜市鷺山第二土地区画整理組合・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2007『鷺山蟬・鷺山仙道遺跡』

岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2009『岐阜城跡』



第1図 周辺の遺跡

第2節 岐阜城の歴史

永禄 10 年まで

岐阜城跡の範囲は、金華山の山域とほぼ同一であり、古くは稲葉山と呼ばれていた。この山の南に続き、美濃平野に面する瑞龍寺山には、弥生時代後期の墳墓、瑞龍寺山頂遺跡がある。

また古墳時代には、山尾根筋や山麓部に多数の古墳が築かれる。山麓居館跡の発掘調査でも、第2次調査において石室が発見された千畳敷古墳がある他、登山道沿いにおいても近年の分布調査によつて新たな古墳が発見されている。古代では、山麓部の第2次調査において、灰釉陶器・ロクロ土師器を廃棄したと思われる土坑や地鎮遺構が検出されている。

続いて中世に入ると、第3次調査において発見された「大寺」墨書小皿や梵鐘鋳型、石積み、五輪塔、古瀬戸といった遺物・遺構などから、西側山麓部では寺院らしき宗教的施設の存在が推定される。その他、金華山の北東山腹に、多数の古瀬戸四耳壺・瓶子が出土した中世墓群、日野不動洞遺跡がある。以上により、この山城は古くからこの地域の人々にとって重要な場所であった。

また、稲葉山の麓にある丸山は、伊奈波神社の旧社地であったとされている。一条兼良の紀行文『藤河の記』には、舟で因幡山の麓を過ぎ、この山は因幡社の縁起にある山である、と記している。この「因幡山」は、立地的に現在の伊奈波神社の付近ではなく、丸山ないしは金華山を指していると考えられ、伝承を裏付けるものと言える。前述の3次調査で検出された宗教遺構も、ここにあった旧伊奈波神社に関連した宗教施設である可能性がある。いずれにしても、古代・中世の人々にとって、この山は大きな信仰的な意味を持っていたことが分かる。

城郭利用については、建仁年間に二階堂山城守行政が初めて城を築いたとする伝承があるが（『美濃明細記』など）、確実に利用されていたと分かるのは永禄5年（1525）である。このとき長井氏が主家の土岐頼武・斎藤利隆を追放した事件で、南麓の瑞龍寺が戦地となっているが、『朝倉家伝記』によれば、朝倉勢が守護方について、「稻場山ノ城」を攻撃している。

後の天文8年（1539）ごろ、斎藤道三によって伊奈波神社が丸山から現在の地へ移されたと伝えられ、この時までには稲葉山に築城が行われたと考えられる。道三は、同21年ごろ守護・土岐頼芸を追放するなど、本格的に美濃を実効支配した。

天文23年（1554）、道三は息子の義龍に家督を譲るが、その2年後には義龍に討たれてしまう。義龍は国内の安定・整備に努めたが、尾張の織田信長との緊張が高まる中、同4年（1561）に病で急逝する。跡を義龍の子・龍興が継いだが、同7年（1564）、稲葉山城が竹中半兵衛重虎（重治）と安藤伊賀守就に一時奪取された。

織田信長の入城 ～関ヶ原合戦まで

永禄10年（1567）、信長は稲葉山城を落し、龍興を追放して、小牧山から居城を移した。同年の9月から12月にかけて、信長は多くの禁制・安堵状を出して、戦乱で逃亡した百姓・町人の還住と新領地の治安回復に努めている。また、この頃から「天下布武」印を使用するようになり、町の名を井口から岐阜へ改めた。翌年の伊勢出兵に始まる对外戦や、足利義昭を西庄の立政寺に迎えて幕府再興の計画に着手するなど、軍事・政治的戦略が大きく展開していく。義昭の征夷大將軍への補任と二条の御所造営、伊勢長島攻め、延暦寺焼き討ち、義昭追放、朝倉・浅井氏の滅亡、本願寺攻撃、長篠合戦などは、岐阜在城時代の出来事である。

天正3年（1575）信長は家督を嫡子の忠信に譲って岐阜城主とし、翌4年（1576）に近江の安土城へ移った。天正10年（1582）信長・忠信父子が本能寺の変で死亡した後は、岐阜城主は秀吉による人事のもとに置かれることになるが、城主は転々と変わっている。

最後の城主・織田秀信は慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の際に西軍に属した。そのため岐阜城は、合戦の前哨戦で東軍の標的となり、8月に落城した。

関ヶ原合戦以後、近世の岐阜城跡

関ヶ原合戦に勝利した家康は、岐阜城を廃し、西国の守りとして、南方の平地に加納城を築いた。岐阜城の櫓・館の礎石・石垣などはこの時とり壊され、加納城建設のために使用されたといわれる。城を失った岐阜の町は、加納藩領ではなく、徳川蔵入地（直轄領）となった。慶長6年（1601）に大久保石見守長安が美濃国奉行となり、旧城の地を離れた南西・鶴屋町・米屋町辺りに陣屋を置いた。元和元年（1615）木曾山及び木曾川・飛騨川流域の要地が尾張藩へ引き渡され、同5年（1619）に岐阜町は美濃国内 142箇村とともに同藩へ加増された。

金華山は尾張藩主の「御山」として一般的な立ち入りが禁止され、奉行所に山廻り同心が置かれて普段の見回りに当たった。歴代藩主の岐阜御成の際には、駒飼見物とともに登山・鹿狩りなどが催された。『増補・岐阜志略』には、千疋敷を見た後、百曲から登山した安永6年（1777）、七曲口から登り百曲口へ下った後、千疋敷へ入った天保14年（1843）などの藩主視察の記録がある。江戸後期の様子を描いたと思われる『岐阜御山附近図』には、山と平地の間に柵がめぐらされ、所々に冠木門が描かれる。また伊奈波神社蔵の『稻葉山城趾之図』には、山頂の矩形階段状の石垣・尾根筋の施設を囲む石垣・山麓居館部分と思われる長方形の区画などが見える。現在残る地形と一致するところが多く、当時の、遺跡としての岐阜城跡の状況をよく表していると思われる。

しかし、江戸時代を通じて、山と山麓の城主居館があった部分、及びその前面の平地には、大規模な施設は建設されなかつたと考えられる。

近現代の公園整備

明治に入り、金華山は官林となり、一転して土地利用が進むようになった。明治10年（1877）富茂登村に、岐阜中教院が開院した。岐阜公園内の北寄りで行われた第3次調査で「中教院」と記された染付杯が出土している。ここは板垣退助遭難の地として有名である。

山麓は近代都市公園として整備された。明治15年（1882）に公園設置の請願・認可がなされ、21年（1888）に開園式が行われ、26年（1893）に市に移管された。37年（1904）に名和昆虫研究所が京町から移転し、40年（1907）に記念昆虫館が竣工している。また、金華山の山頂には、43年（1910）に三層木造トタン葺きの模擬天守が建つた。

大正期には再度岐阜公園の整備が行われ、大正3年（1914）に再度、開園式が行われた。翌年に公園の西北長良川を渡る長良橋が鉄製橋に架け替えられたが、この廃材で大正6年（1917）三重塔が山腹に建立された。翌7年（1918）には中教院が公園から移転し、10年（1921）にかけて跡地に相撲場・運動場・庭園が造設され、板垣退助像が建立された。大正8年（1919）には名和昆虫博物館が開館している。

第二次世界大戦後は、公園開発が再び盛んになる。昭和30年（1955）に金華山ロープウェー建設されている。また明治期に建てられた模擬天守は、昭和18年（1943）失火により焼失してしまうが、戦後の天守復興気運の中、昭和31年（1956）に現在のコンクリート造の天守が再建されている。昭和38年（1963）には金華山ドライブウェーが建設されている。その他、昭和中期には県立図書館・水族館・児童科学館などの施設建設が相次いだが、これらは昭和末から平成にかけて、老朽化・機能移転により解体されている。今まで続く文化施設としては、昭和60年（1985）に岐阜市歴史博物館が、平成3年（1991）に加藤栄三・東一記念美術館が開館し、現在へと至っている。しかし、これら開発のため、山麓居館や山上部の城があつたと推定される場所は、その多くが公園・施設整備がなされ、地下の遺構は大きく影響を受けたと考えられる。

近年の発掘調査と岐阜城跡の重層的価値

昭和59年（1984）織田信長居館伝承地の西側山麓部において、第1次発掘調査が始まった。調査によって、信長は斎藤氏時代に造成された地形をベースとして利用しつつ、再造成と施設の建設を行ったことが推測された。調査に続く史跡整備事業では、検出された居館入口の通路を復元した。その後、公園整備に伴う2次・3次調査では、信長・斎藤氏段階の遺構、それ以前の宗教施設や古墳等が検出され、この場所が城郭として利用される前は、宗教施設として利用されていたことが確認できた。

平成19年度より、内容確認のための第4次調査が行われており、山麓居館に関する多数の石垣や庭園遺構、建物の礎石等が検出された。遺物としては、陶磁器の他、戦国期の瓦や焼けた壁土等が出土している。このような調査の進展により、調査成果に基づく遺構の状況と、ルイス・フロイスや山科言継などの訪問記録との対比がより出来るようになった。また、発掘調査と同時に、山林部の分布調査を実施したところ、山中の苔跡と思しき多数の遺構が確認された。その多くは「福葉城跡之図」に描かれている苔跡と対応するもので、文献調査の成果と合わせ、山全体が城域であることが判明した。これらの成果を受け、岐阜城跡は平成22年に国史跡に指定されている。

岐阜城跡は、岩盤地形・植生・動物等、豊富な自然を有している。景勝地として古くより多数の歌に詠まれ、山上眺望など景観的な価値が高い。また、前述のように古くからの信仰価値の高い山でもある。その他、山麓部の岐阜公園は近代以降の公園整備の課程を色濃く残したもので、公園としての価値も高い。このように岐阜城跡は城郭の価値の他にも、多様な価値が混在した史跡であることが分かる。

【参考文献】

- 黒川真道編 1915『美濃国諸旧記 全 濃陽諸土記全』国史研究会
平塚正雄編 1937『濃州御行記 濃陽志略』一信社出版部
平塚正雄編 1932『美濃明細記 美濃雜事記』一信社出版部
平塚正雄編 1931『新選美濃志』一信社出版部
矢崎正治編 1934『毛濃栗見聞集 岐阜志略』大衆書房
松田毅一・川崎桃太訳 1978『日本史』中央公論社
松田毅一監証・東光博英訳 1998『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第III期第3巻 同朋舎出版
松田毅一監証 1987『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第2巻 同朋舎出版
松田毅一監証 1988『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第3巻 同朋舎出版
岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2009『岐阜城跡』
岐阜市・岐阜市教育委員会 2012『史跡岐阜城跡 保存管理計画書』

第2章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

岐阜市では、平成18年度に岐阜市総合計画、金華山・長良川まごと博物館構想の下、岐阜城と岐阜城下町を含む地域である金華地区を対象として、『岐阜町発祥の地・まちなか歩き構想』を策定した。これは、岐阜の地に溶け込む魅力を振り起し、心の豊かさを感じられるまちづくりの実現を目的としたものである。同時に策定された岐阜公園基本計画では、「信長の時代を語る岐阜公園」をテーマに公園整備を行う方針が示された。その中で岐阜城千畳敷遺跡（岐阜城跡山麓居館跡）については、発掘調査による内容確認の実施と、その効果の活用の検討を行なうこととされている。合わせて調査の現状や成果を市民等に広く公開し、観光資源として活用することが方針に盛り込まれた。

上記の計画を受け、岐阜市教育委員会では、平成19年度からは館の全体像を明らかにするために4次調査を開始した。当初は遺跡の内容確認のためのトレーニング調査であったが、平成25年度からは史跡整備事業を推進するため調査を行っている。

調査主体は岐阜市教育委員会社会教育課であり、業務の一環を（公財）岐阜市教育文化振興事業団に委託して実施している。

4次調査期間中の平成22年1月に岐阜市教育委員会から文部科学大臣に史跡指定の意見具申が行われ、11月19日に国文化審議会の答申を受けた。平成23年2月7日付け文部科学省告示11号により、岐阜城千畳敷遺跡を含む金華山一帯（約209ヘクタール）が国史跡に指定された。

平成23年度には史跡岐阜城跡の保存管理方針や現行変更等の基準を示した『史跡岐阜城跡保存管理計画』、平成24年度に今後の史跡整備の基本的な方針及びその手法の概略、事業計画等をまとめた『史跡岐阜城跡整備基本構想』、平成25年度にサイン計画の基本的な方針等を定めた『史跡岐阜城跡サイン計画』、平成26年度には具体的な整備、公開、活用、体制に関する計画、今後の事業計画を示した『史跡岐阜城跡整備基本計画』を策定した。

平成19・20年度の調査成果は『岐阜城跡』、平成21～23年度の調査成果は『岐阜城跡2』、平成25年度の調査成果は『岐阜城跡3』として報告されている。本報告書では平成24・26年度の調査成果を報告する。

第2節 調査の方法

調査を行うにあたり、「史跡岐阜城跡整備委員会」および「史跡岐阜城跡調査専門委員会」を発足させ、検出された遺構の評価やその解釈、発掘調査の方針等について専門的見地から指導を受けながら実施している。両委員会は年3回程度開催し、さらに検出された遺構に応じて委員や有識者に個別に指導を求めた。また、文化庁文化財部記念物課、岐阜県教育委員会社会教育文化課にも方針についての指導を受けた。

掘削作業は人力により行った。基本的に戦国期上層面の1面のみの調査にとどめたが、一部サブトレーニングを設定して下層遺構の確認を行っている。遺構埋土や遺構上面を覆う焼土層等については、保存の観点から半裁もしくは部分的な掘削にとどめている。埋戻しの際には遺構面上に不織布を敷いた上、埋め戻し、遺構の保護をはかっている。

図面は基本的に1／20縮尺で作図した。一部の平面実測図及び土層断面図を手作業により行っているが、平面図、立面図、断面図とも写真測量等による作図を委託して実施した。

写真是中判カメラ（6×7）の白黒・ネガカラー、一眼デジタルカメラ、35mmネガカラー一眼カメ

ラにより撮影している。その他、調査進捗状況の映像記録として、月1回程度のベースでハイビジョンカメラによる撮影を行った。

測量に際しては、座席は世界測地系の平面直角座標系（第VII系）、水準は東京湾平均海面（T.P.+値）を基準としている。土層の色調については『新版標準土色帳』を用いた。

また調査方針に基づき、発掘調査の過程や成果を広く市民に公開するため、現場周辺にのぼりや木製フェンスを設置し、見学しやすい雰囲気作りを行うとともに、現地事務所の一部を発掘調査案内所としてパネル展示や映像による紹介等を行った。

第3節 調査の経過

平成24年度の調査は、F地区から着手した。6月4日、機材の搬入をし、フェンスを設置、調査区の設定を行った。6月5・6日に重機掘削を行い、終了次第人力による掘削を開始した。7月4日、発掘調査専門委員会（平成25年度「整備専門委員会」に名称変更）が開催され、委員の現場視察があつた。7月10日、F4トレチの写真撮影を行い、7月17日より埋め戻しを行つた。

7月19日、C地区の調査区を設定した。7月24日にフェンスを設置し、25日から人力掘削を開始した。C8・C9トレチとも、前年度まで像や碑が置かれていた場所で、最初はそれらによる搅乱の掘削から行った。C9トレチはC地区へ至る道路の確認を目的としていたが、埋没深度が大きく、以降年度末まで拡張を繰り返して、調査を継続した。記録をとった後、平成25年3月5日より埋め戻しを開始し、3月13日に終了した。

C8トレチは当初III層上面を検出し、礫の崩落状況を確認した。9月4日、礫は巨大な土坑状の遺構に堆積していると見られ、池である可能性が浮上してきた。9月5日には礫石を検出し、礫層を掘り下げる方針を固めた。9月28日、池底には小円礫が残存する自然堆積層が堆積していることが判明する。10月中旬に自然堆積層上面の検出が終了し、11月2日、写真撮影を行つた。11月8日、発掘調査専門委員会があり、委員の現場視察が行われた。11月12日、遺構の測量作業を行い、翌日から土層図等の実測を行つた。11月24日には、C8区の現地説明会を実施し、500名ほどの見学者があつた。埋め戻し作業は平成25年3月13日より行つた。遺構面上に不織布を敷き、その上に土のうを並べ、重機を使用して現地表の高さまで排土で埋め戻した。翌3月14日には埋め戻しが終了した。

B20トレチは11月27日より取りかかつた。現代の造成土が多量に堆積しており、この掘削に多くの時間が割かれた。12月20日頃に現代の造成土を完掘し、II層にあたる自然堆積層の掘り下げに移行した。平成25年1月16日、砂に極小の円礫が混じる池底の一部を確認した。以降、池底の検出と東斜面の確認を行い、2月25日に全景の写真撮影を行つた。2月26~28日には測量作業を行つた。委員会での指導を受け、緻密な等高線を作成するため、池底のみレーザー計測を実施している。3月1日より埋め戻し作業に取りかかつた。遺構面上に不織布を敷き、その上に土のうを並べ、シートで覆つた。3月19日に埋め戻しが終了し、機材の搬出を行い、3月22日、現場での全ての作業が終了した。

平成26年度の調査はC10トレチから着手した。平成26年7月18日、フェンスの設置を行い、調査を開始した。8月1日整備専門委員会が開催され、現場の視察があつた。8月30日、南半の掘削が概ね終了し、北半の掘削に取りかかつた。9月28日、全景写真の撮影を行い、10月1日より実測作業に入った。11月7日、C11トレチの設定をし、人力での掘削作業を開始した。12月8日、整備委員会が開催され、現場の視察が行われた。平成27年1月8日、全景の写真撮影を行い、1月17日一般向けの現地説明会を実施した。1月20日から測量・実測作業を行い、1月23日より埋め戻し作業を開始した。両トレチは翌年度からの調査範囲内であることから、遺構面上に不織布を敷き、土のうで埋め戻しを行い、シートを敷設した。1月30日、機材を搬出し、現場での作業は終了した。



第2図 トレンチ位置図

地区	トレンチ番号	面積	年度			19			20			21			22			23			24			25			26				
			月	日	年	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
A地区	1	30																													
	2	4																													
	3	23																													
	4	16																													
	5	24																													
	6	12																													
	7	33																													
	8	11																													
	9	12																													
	10	33																													
	11	12																													
	12	8																													
	13	6																													
	14	1500																													
B地区	B I	2	12																												
		7	34																												
		13	30																												
		14	29																												
		17	12																												
		18	8																												
		19	180																												
		1	38																												
		3	20																												
	B II	4	12																												
		5	30																												
		6	35																												
		7	14																												
		15	22																												
		16	12																												
		8	20																												
		9	20																												
		10	72																												
	B III	11	12																												
		12	22																												
		13	24																												
		14	24																												
		15	12																												
		16	88																												
		17	30																												
		18	58																												
		19	74																												
	C地区	20	36																												
		21	22																												
		22	35																												
		23	24																												
		24	24																												
		25	10																												
		26	10																												
		27	16																												
		28	26																												
	D地区	29	16																												
		30	14																												
		31	39																												
		32	8																												
		33	19																												
		34	12																												
		35	6																												
		36	32																												
		37	11																												
F地区	1	8																													
	2	12																													
	3	13																													
	4	11																													

第1表 工程表

第3章 遺構

第1節 調査地区（平坦地）と遺構の概観（第5・6図）

山麓居館跡（岐阜城千戸敷遺跡）では永祿10年から慶長5年までに構築された平坦地の様相が、これまでの発掘調査によって明らかになりつつある。『岐阜城跡』においてその復元図が提示され、新たなる成果により『岐阜城跡2』・『岐阜城跡3』で修正を行った。これに基づき、本報告に掲載する地区的立地を確認しておきたい。各平坦地の概要は下表のとおりである。

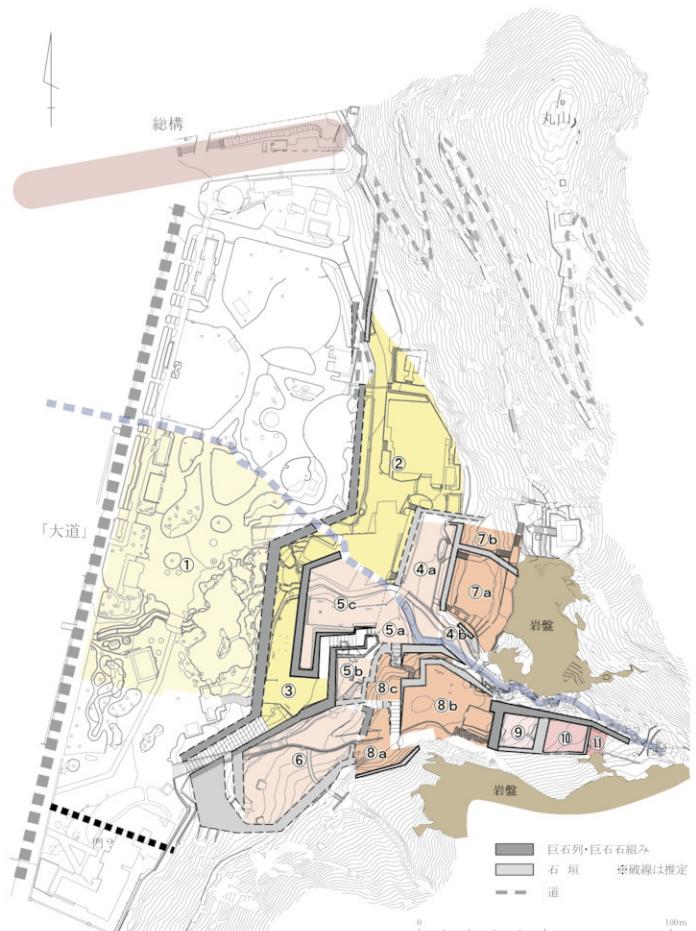
B20トレーニングを設定したB III区は平坦地①（標高約47.0m）とその東側の斜面に該当する。B III区は山麓居館跡の最高所で、平坦地の推定の大きさは、南北、東西ともに約11mと小さく、平面形は台形状を呈する。そのうち東半分を池泉遺構S R 2が占める。西半分は後世の搅乱や削平が著しく、B III区全体で見てもS R 2の底と西岸周辺のみ当時の面が残存すると考えられる。B地区は、最下段のB I区からB III区へと高くなる。B I区の標高は約39.5m、B II区は約45.0mを測り、B I区とB II区の高低差が5.5mあるのに対して、B II区とB III区は2.0m程度しかない。B II区、B III区ともに建物の痕跡を確認していること、境界を成す石垣に階段等の虎口施設が設けられていないこと、B III地区は平坦部分が極めて狭小であることから推測して、両地区に跨って一体化した建物が構築されていた可能性が高い。

C地区は平坦地⑧にあたり、居館の中心的な建物があったと推定しているところである。その入り口部分には、高さが異なる平坦地⑧a・⑧cが配置され、複雑な構造を呈する。本書の調査においてもC 9トレーニング、C 10トレーニングを設定したが、III層の堆積が厚く、構造を明らかにすることはできなかつた。C 8トレーニングは平坦地⑧bの最奥、平坦地⑨との境界を成す巨石列の直前にて池泉遺構S R 3を検出した。C 11トレーニングは平坦地⑧bの北側斜面にあたり、A地区で検出した虎口状遺構と対になる可能性がある遺構を確認した。

F地区は山麓居館跡の最下段に当たる。標高は約18.2～19.0m、最高所とは約30mの高低差がある。F地区は公園整備の際の搅乱が著しく、上部が削平されていることが多いが、現公園に設けられた築山状の植え込み内に設定したF 4トレーニングでは、良好な残存状況が見られた。

平坦地番号	段	調査区	細分	標高(m)	推定面積(m ²)	主な出土遺構・遺物
①	第1段	F地区		18.2～19.0	6,000	井戸
②	第2段北	2次調査区周辺		24.0～25.0	2,400	州浜状遺構・甌
③	第2段南	1次調査区		22.5～23.5	850	巨石列・土壘
④	第3段北	E地区	a	27.5～28.5	600	礎石・柱状遺構
			b	29.1～29.4	100	
			c	25.5	600	集石遺構
⑤	第3段南	1次調査区	a	27.0	200	礎石
			b	27.5	200	
			c	25.5	600	
⑥	第3.5段	D地区		29.1～29.4	1,200	
⑦	第4段北	A地区	a	31.0～31.5	750	池泉遺構・礎石
			b	32.0～33.0	180	周辺で多量の遺物出土 （→建物？）
⑧	第4段南	C地区	a	33.3～33.5	800	礎石・金箔貼り瓦
			b	33.5～34.0	200	池泉遺構・礎石
			c	30.3	200	礎石
⑨	第5段	B I地区		39.2～39.5	200	半地下式建物
⑩	第6段	B II地区		44.5～45.0	230	水路・礎石
⑪	第7段	B III地区		47.0	120	池泉遺構

第2表 平坦地一覧表



第3図 山籠居館跡地形復元図

第2節 基本層位

1. 基本層序

本報告書では、平成19～23・25年度の成果をまとめた報告書『岐阜城跡』・『岐阜城跡2』・『岐阜城跡3』に掲載した基本層位に準じて報告する。

岐阜城千疊敷遺跡では、現代までの長きにわたり、櫻谷の谷川によって形成された扇状地を削平、盛土をして、人工的な段々の平坦地が造り出されている。過去の調査においても複数の整地層を確認しているが、戦国期（上層・下層）と近現代のものに大別できる。両者の間の自然堆積層や戦国期上層廃絶前後の時期、さらに戦国期を上層（上面が第1遺構面）と下層（上面が第2遺構面）に細分して、以下のとおりの基本層位とした。

I層（近現代堆積層・公園造成土・表土）

近代以降と確定できる土層。成因は岐阜公園整備に伴う整地層や、山からの崖錐堆積物などによる自然堆積層である。

II層（自然堆積層）

主に山からの崖錐堆積物により形成された自然堆積層、主な堆積時期は近世から近代と考えられる。

III層（廃絶前後の堆積層）

戦国期上層遺構廃絶直後の堆積や、その後の片づけや整地によるとみられる層。遺構築後、廃絶までの自然堆積層もこれに含んでいる。

なお、平成27年度のC地区における発掘調査で、これまでIII層と認識していた層の一部が、上層段階における改修に伴う整地層（IV層）と判明した。よって『岐阜城跡2』掲載の土層解釈について修正があったが、詳細は後述する。

IV層（戦国期上層整地層）

第2遺構面廃絶後に形成された整地層で、第1遺構面の基盤となる層である。A・B・C・E地区では上面に一部火災の跡がみられる。遺構面の存続期間は最長、永禄10年（1567）から慶長5年（1600）頃と推定している。

V層（戦国期下層整地層）

第2遺構面の基盤となる層である。IV層直下が地山である箇所もあり、一部ではV層が見られない。D地区では上面に被熱痕が見られる。A地区では遺構面上面の被熱は確認できないが、IV層中に大量の焼土・炭化物が含まれることから、廃絶時に被熱している可能性は高い。廃絶時期は永禄10年頃と推定している。

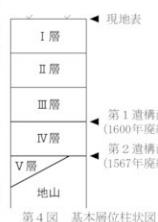
地山

A地区平坦地北半や南端で確認できる砂礫層。北半は崖錐堆積物、南端は谷川による扇状地堆積物と考えられる。今までの調査では遺物が含まれておらず、地山と考えている。

以上は、遺跡全体を通しての基本層位であるが、以下に各地区的様相を記述する。

2. B地区

B地区は3段の平坦地に細分でき、下からB I～III区（第3図⑨～⑪）に分けている。いずれの区においてもI～IV層を検出しているが、V層はB II区の断面トレンチのみの確認である。III層の詳細は、遺構廃絶時の炭・焼土層、石垣崩落層、遺構廃絶までの自然堆積層の3層があるが、B I区とB



第4図 基本層位柱状図

II区では全ての層が検出でき、B III区では、遺構廃絶時の炭・焼土層のみが見られない。

3. C 地区

C地区は大規模な改修が行われているが、改修前は3つの平坦地に細分されると考えられる（第3図⑧a～⑧c）。⑧aと⑧bのレベルに差なく、⑧cから上の通路によって画される。⑧cは平坦地⑤と⑧bの中間的な高さに広がる平坦地と推定している。改修後は概ね一つの平坦地となる。

I 層：現代盛土・表土・公園造成土

II 層：自然堆積層

III 層：遺構廃絶後の整地層・廃絶時の堆積層（炭・焼土・崩落礫）

IV 1層：戦国上層整地層（改修第2工程）

IV 2層：戦国上層整地層（改修第1工程）

IV 3層：戦国上層整地層（当初）

V 層：戦国下層整地層

C 8 トレンチでは、公園造成土及び搅乱による I 層が堆積する下に、層厚約80cmの廃絶時の堆積III層がある。巨石列の石材と考えられる巨石や崩落した裏込めと考えられる礫層から成り、その中にはB地区から流入したと考えられる大量の壁土が含まれる。III層は池泉造構 S R 3 全体を埋めるように堆積しており、特に東側が厚い。その下は S R 3 の底を形成するIV層であるが、断削等を実施していないため、改修や戦国下層整地層の有無は不明である。

C 9 トレンチは『岐阜城跡2』に掲載されているC 6 トレンチの基本層位に準ずると当初は考えていたが、平成27年度の調査によって、新たな解釈が必要となった。『岐阜城跡2』では、III層を上からIII-1(上)、III-1(下)、III-3、III-4の4層に分けているが、III-1(下)以下の3層は全てIV層の一部であることが分かった。つまり戦国期上層段階で改修を行っている可能性が極めて高い。よってIV層の最初の整地層をIV 3層、改修整地層をIV 2層、IV 1層とする。IV 2層は1次 SV 6 の下部を埋め、上面が硬く締まる。また、SV 6 を取り壊した石材や裏込め礫が直上に堆積することから、改修の第1工程の整地層と考えている。IV 3層は1次 SV 6 の前面及びC 6 トレンチ内のものでの確認である。C 6 トレンチで検出したIV 3層は上面が被熱し赤化しており、大量の炭と共に遺物が多く出土している。さらに下には、第2遺構面の基盤層となるV層と、それに伴う南北方向の石積み遺構 S V 23が検出された。V層上面は非常に硬く締まる。

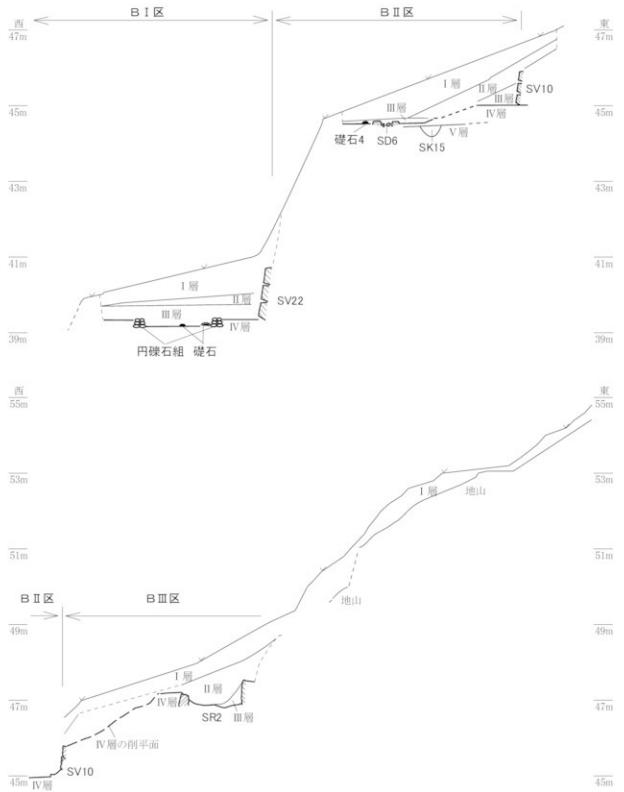
C 10 トレンチは『岐阜城跡』に掲載されるD 7 トレンチの層序に準ずる。表土などのI層、近世以降と考えられる自然堆積層のII層、石垣あるいは巨石列の石材及び裏込め礫の崩落による礫層であるIII層、戦国上層整地層のIV層である。上部のC地区平坦地を形成する整地層と下部のD地区平坦地を形成する整地層が検出されている。

C 11 トレンチは、C 10 トレンチの基本層位とほぼ同様で、表土などのI層、近世以降と考えられる自然堆積層のII層、石垣の石材及び裏込め礫の崩落による礫層のIII層を検出した。千疊敷1次調査で検出された水路 SD 1 の続きの底には、自然堆積と見られる砂が確認でき、これもIII層に含めた。IV層は平坦面 S X 54を形成する整地層などである。

4. F 地区

F地区は公園整備に伴う搅乱が多く、これまでの調査においてもIV・V層が確認できるのはあまり例がない。本報告のF 3 トレンチはこの事例である。ところが、F 4 トレンチは公園の築山状の植込みに設定したところ、良好な残存状況であった。サブトレンチを設定して、断削調査を行ったところ、I～V層の層序が基本層位どおりに確認することができた。

B地区東西



第5図 土層模式図（B地区）

北
36m C地区南北

34m

32m

30m

28m

西
36m C地区東西

36m

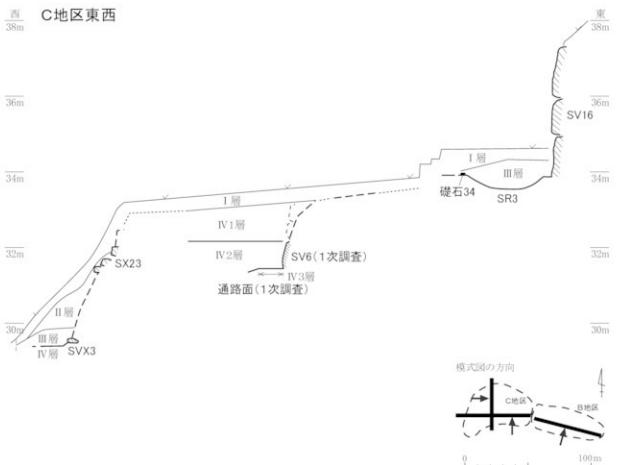
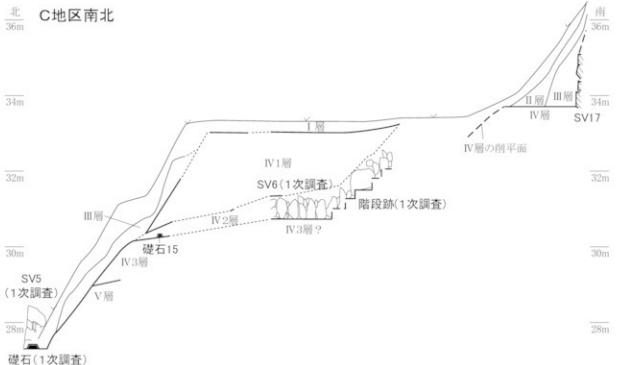
34m

32m

30m

34m

第6図 土層模式図（C地区）



第3節 検出遺構

1. B20トレンチ（平成24年度調査）

（1）トレンチの概要

B III区はB地区の中でも最上段に位置し、B II区とは石垣S V10によって区画されている。南辺は岩盤、北辺は谷川に接し、谷川との境界には巨石石組みS V28が構築されている。平成22年度の調査で検出した池泉遺構S R 2の全体及びその東側の状況を確認するため、南北12m、東西24mの調査区を設定した。その結果、S R 2は北東部分を除き、ほぼ全体の様子が判明した。またS R 2の東側は自然堆積層による斜面で、地形を改变するような人工的な遺構は見られないことがわかった。

（2）検出遺構

池泉遺構S R 2（第7～8図）

南北8.0m以上、東西4.6m以上を測る池泉遺構である。S R 2内で原位置を保つ景石2箇所、東辺の護岸施設である石組S V51、西辺に階段S X30、またS V51前で瓦集積S X56を検出した。

西辺の中央部で、岬状に東方向へ突出する部分があり、括れた平面形状を呈する。遺構内にはチャートが散乱して出土しており、東岸と西岸はこれらを石材とした護岸が施されていた可能性が高い。南岸は直立した岩盤が露出し、一体化した構造をしている。また、池西半を中心として円礫も多数出土しており、西岸は州浜が形成されていた可能性が高い。

西半の断面形状は緩やかに立ち上がる皿形、東半は石組で直立する形状を呈し、深さは約35cmである。池底には極小の円礫が混じる川砂が敷き詰められている。この砂は、周辺の谷ではなく長良川から採取したことが自然科学分析で判明しており、さらに白色のものを選別しているようである（『岐阜城跡2』）。砂層の断面調査を行っていないため明確ではないが、ピンボールで砂の厚さを計測したところ、砂を敷く前の池底には一段深く落ち込んでいる部分が推定される。さらにこの部分には瓦集積S X56が検出され、落ち水を緩衝する施設の可能性が考えられることから、底の落ち込みは、水の流入により深くなった可能性が高い。それ以外には魚溜まりとして意図的に深い部分を設置した可能性も考えられる。廃絶後の埋土の珪藻分析により、滯水ではなく流水環境の池であった可能性が高い（第5章第1節）。

出土遺物は少なく、瓦のほか、少数の大窯製品、土器師皿、景石の碎片（緑色片岩）がある。池自体被熱している様子は見られないが、瓦の製作技法より永禄10年以降のIV層に伴う遺構の可能性が高い。また、礎石とみられる石材が出土しており、池の西側の平坦部あるいは池の一部を覆うような建物が存在した可能性が高い。

S R 2に南接する岩盤は、高さ30m以上に及んで屹立するものである。S R 2は単独で鑑賞するものではなく、背後の岩盤や谷川を借景として取り入れたものと考えられる。

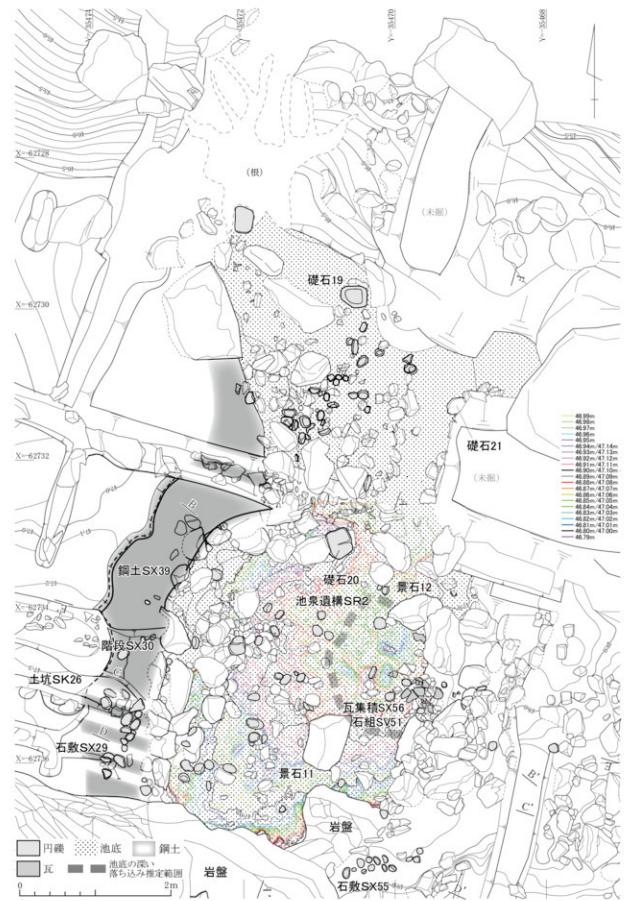
【階段S X30】（第7～8図）

S R 2西辺最南端に設置された階段状施設で、鋼土S X39と一体で造られている。幅0.9m、長さ1.2m、3段のチャートが設置され、池の中へ下りられるようになっている。

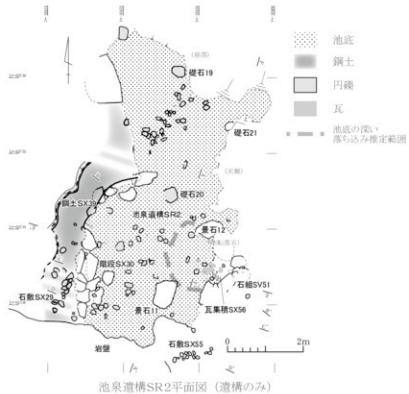
方形の平らな石が2段確認でき、レベルは1段目が46.3m、2段目46.1mで東に向かって降りる形状となる。階段の北脇には立石がある。

【景石11・12】（第7～8図）

S R 2の底に設置されたチャートの景石である。景石11はS R 3全体の南半のほぼ中央、景石12は東岸に接するように配置されている。ともに角の取れたチャートを使用しており、谷川から採取されていると推測される。



第7図 池泉遺構 SR 2 平面図



景石 11

47m

B-B'

48m

池泉遺構SR2

47m



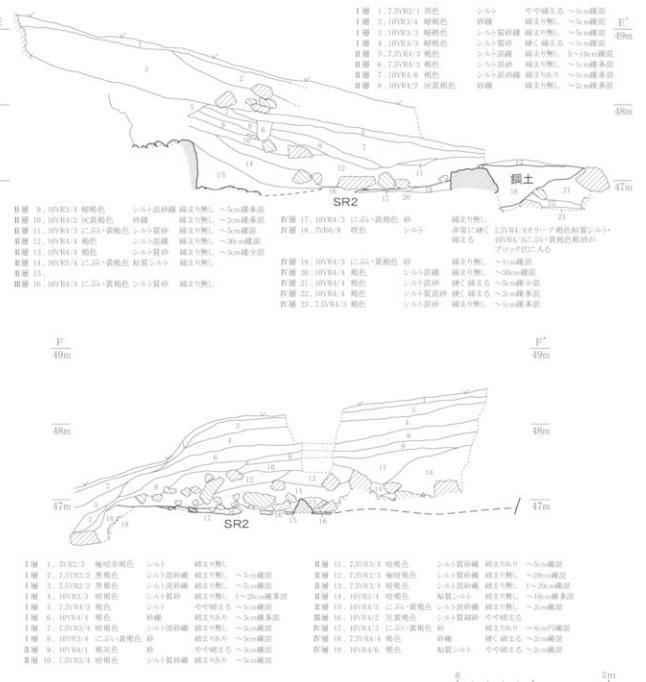
第8図 池泉遺構SR2断面図

景石11の大きさは長さ79cm、幅52cm、景石12は長さ72cm、幅46cmを測り、ともに設置された状態での断面形が三角形を呈する。景石12は、池底の砂との関係で景石と判断したが、転落石の可能性も残す。

【石組S V51】(第7~8図)

S R 2 東岸の石組遺構である。立石を中心には半円形状にチャートを配置した石組施設。石組で囲まれた池底には瓦集積 S X56がある。南側には小振りなチャートを石積状に設置されており、岩盤に至る。北側には残存状況が悪く明らかでないが、転落石と見られる石材が池底から出土したことから、石組あるいは石積状のものが構築されていた可能性が高い。

S V51は淹水の池への導水施設と推測され、砂の堆積により明らかでないが、この部分の池底は深く落ち込んでいるようである。



第9図 池泉遺構 SR 2 土層図

【瓦集積 S X56】（第7～8図）

石組 S V51の直前で検出した瓦集積である。S R 2埋土からは比較的多くの瓦が出土したが、この箇所の密集度は高い。S V51が淹状の導水施設の可能性を考えると、S X56は水受け施設の可能性も考えられる。

【石敷遺構 S X55】（第7～8図）

S R 2の南東角で検出した円礫の石敷遺構である。長径10cm前後の大きさの円礫13個が検出できた。S R 2内に張り出した岩盤の上部を平坦に整地した上に敷設されている。石組 S V51の上部が崩壊しているため、範囲は明らかでないが、直下に転落した円礫が少ないことから、残存部周辺のみの敷設であった可能性がある。

【鋼土 S X39】（第7～8図）

池の西側全体に帶状に確認できる、非常に硬く締まる橙色のシルトである。遺構面に露出している範囲は東西幅約1.0m、南北長約5.0mを測る。池の水を下へ透さない不透水層を設ける役割に入れられたと考えられる。確認はできていないが、鋼土は池底まで及んでいると思われる。周囲の整地土と同時に入れていることから、池泉遺構は造成の段階で計画的に構築されたといえる。

【石敷遺構 S X29】（第7～8図）

階段遺構の南側にある川原石の石敷遺構で、鋼土の上面に敷き詰められている。直径約10cmの扁平な川原石を敷いたものであるが、残存している石は20個程度で残存状況は悪い。石敷き上面の標高は46.5mを測る。池の周辺に石敷きが広がっていた可能性がある。

【礎石19・20・21】（第7～8図）

礎石19・20は礎石として使用されていたとみられる石材である。ともに上部が平坦な川原石であるが、原位置は保っておらず、池底から浮いた状態で出土している。礎石19はS R 2の北端で出土し、大きさは35cm×35cm、礎石20は中央部で出土し、大きさは40cm×35cmを測る。

礎石21はS R 2の北東部で確認したチャートである。池の底部に埋まった状態で検出されており、原位置を保っている可能性が高い。検出長は20cmを測る。

2. C Bトレーニング（平成24年度調査）

（1）トレーニングの概要

C 8トレーニングの位置は、C地区の最東、「明治大帝像」が立てられていた場所で、基壇状に周囲より0.7m程高くなっている。南北8m、東西9mの調査区を設定し、表層より手掘りによって掘削を行い、調査を実施した。その結果、調査区ほぼ全体を占める範囲で、池泉遺構 S R 3を検出した。S R 3の西側では礎石も検出でき、当時の地面の標高が約33.8～33.9mであることがわかった。現地表面がおよそ33.9～34.0mであることから、後世の削平がC地区半分以上の広範囲に及んでいることが判明した。

（2）検出遺構

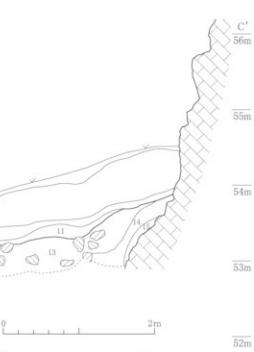
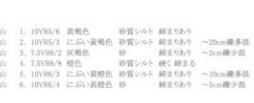
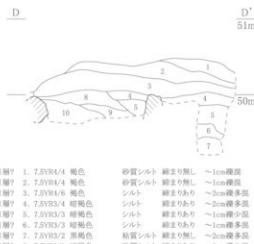
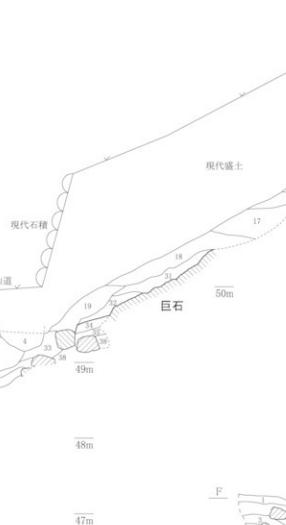
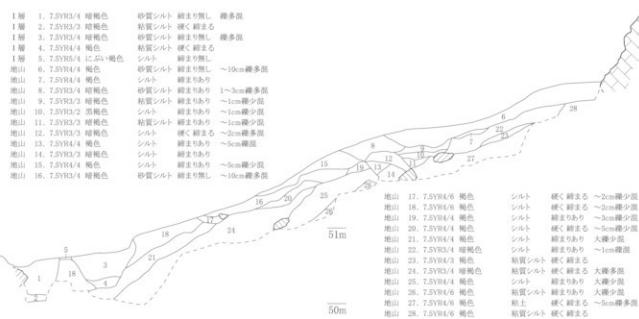
池泉遺構 S R 3（第11～12図）

池状遺構の大きさは、南北7.5m以上、東西6.1m以上を測り、北・西の端は確認できたものの、東端は一部のみ確認、南端は未確認である。平面形状は、検出範囲内において、南北に長い楕円形を呈する。S R 3の西は礎石を伴う整地面（標高33.8～33.9m）、東は巨石列 S V16の基礎（標高33.9～34.0m）を検出し、池底最深部の標高が33.5mであるため、深さ最大約50cmを測る。断面形状は緩やかに立ち上がる皿形を呈する。東のS V16の基礎にあたる整地面は、幅約1.4mのテラス状の平坦部であるが、その上面にも景石や円礫が配されており、広い意味での池の中といえる。

A

I層	1. 7.7YR2/4 黄褐色	シルト 粗砂	暗く鮮明 暗く鮮明	~1cm礫混 ~1cm礫混
I層	2. 7.7YR4/2 灰褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫混
I層	3. SYR4/2 黑褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	4. 7.7YR4/2 黑褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	5. 7.7YR4/2 黑褐色	砂質シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	6. 7.7YR4/6 黄褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	7. 7.7YR4/6 黄褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	8. 7.7YR4/3 黄褐色	粘質シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	9. 7.7YR4/3 黄褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	10. 7.7YR4/3 黄褐色	シルト質粘土 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	11. 7.7YR4/3 黄褐色	シルト質粘土 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	12. 7.7YR4/4 黄褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	13. 7.7YR4/4 黄褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	14. 7.7YR4/4 黄褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	15. 7.7YR4/4 黑褐色	シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	16. 7.7YR4/4 黑褐色	砂質シルト	暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	17. 7.7YR4/4 黑褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	18. 7.7YR4/4 黑褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~5cm礫少混
I層	19. 7.7YR5/4 黄褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	10~20cm礫少混
I層	20. 7.7YR4/4 黄褐色	シルト 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~1cm礫混
I層	21. 7.7YR4/3 黄褐色	砂 砂質シルト	暗く鮮明 暗く鮮明	~1cm礫混
I層	22. 7.7YR5/4 明褐色	砂質シルト	暗く鮮明	~5cm礫混

B



第10図 B20トレントチ土層図

S R 3 の内部では、景石抜き取り痕 5箇所、景石（既調査範囲）1箇所を確認した。底には小円礫による石敷があり、調査区北端では景石の基礎の可能性が考えられる黄色土の範囲も確認した。また北東角から中央北辺にかけて扇状に広がる炭の堆積を検出した。

埋土であるⅢ層は東（B地区）から崩落した礫層が主体で、中には石材とみられる巨大な礫も含まれる。廃城時に巨石列の一部を破壊したことによって、崩れた裏込め礫が堆積したものと考えられる。

出土遺物は、少量の大窯製品や土師器皿、花崗岩製磨盤（手水鉢）、景石の砂石（緑色片岩・泥岩）、大量の壁土（埋土中・B区から崩れ落ちたもの）がある。壁土はほとんどがⅢ層中に包含されており、B地区の建物が焼失、崩れた壁土がS R 3 内に流れ込んだものと考えられる。S R 3 の廃絶は火災を伴うこと、巨石列と一体化した構造であることから上層遺構（永禄10年以降）の可能性が高い。

【景石 1】（C 8 ドレンチ・第11図）

S R 3 の北東角、巨石列 S V15と16がクランク状に折れ曲がる入角部に位置する。石材の大きさは、長径推定53cm、短径36cmを測る。石材は緑色片岩で、石の大部分が埋め込まれているようである。池底では最高所にあたり、この部分で水を取り入れている可能性が高い。また、池底で検出した炭の範囲も、景石 1 を要として扇状に西へ広がっており、水の取り入れ施設である可能性を高める。その場合、景石 1 は、滝等上方から落水させる際の水分け石である可能性が高く、巨石列がクランクする意味づけも可能となる。

【景石 2・土坑 S K29】（第11図）

S R 3 中央西寄りで検出した緑色片岩の景石とその周囲で検出した土坑。景石の大きさは東西51cm、南北29cmを測る。高さは池底からわずかに露出する程度と見られる。割られたような痕跡も見ることができなかつたため、景石 1 と大差はない、小振りなものと考えられる。土坑は景石を設置するための据え付け穴と考えられる。

【景石の基礎？ S X51】（第11図）

S R 3 北辺で東西1.3m、南北検出長1.1mの範囲で検出した黄色土。黄色土は、池底で検出した円礫や炭層の下へ潜行することを確認しており、元来は盛り上がった部分を後に削平した痕跡と理解した。その場合、景石の基礎、池の中に設けられた中島や岬などが想定できるが、炭の範囲が黄色土の北側へ広がる可能性が高いことから、景石の基礎あるいは独立した島状の部分と考えた。島状構造の場合、黄色土自体高まりは見られず⁹。Ⅲ層が直上に堆積していることから、池構築時に設けられた中島を廃城までの期間内に改修、削平されたものと考えられる。

礫石34・35（第11図）

S R 3 の西岸に接して位置する。礫石34は長径38cm、短径29cm、礫石35は同31cm×25cm、上面のレベルは2石とも約33.9m、間隔は約1.7mを測る。C地区の現地表面（公園造成土上面）がおよそ33.9～34.0mであり、後世の削平がC地区半分以上の広範囲に及んでいることが判明した。

3. C 9 ドレンチ（平成24年度調査）

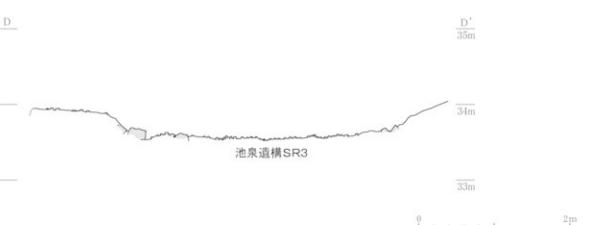
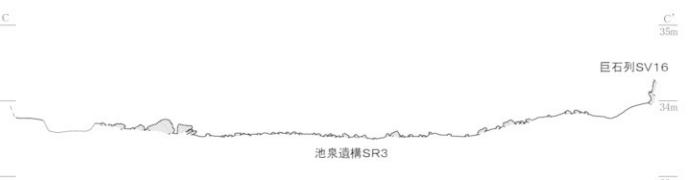
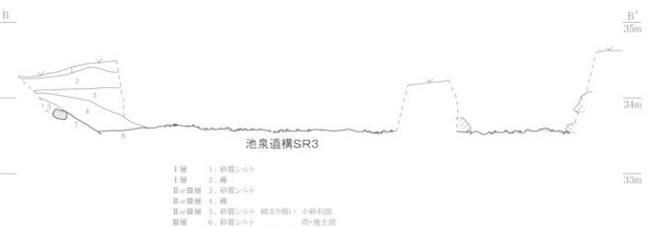
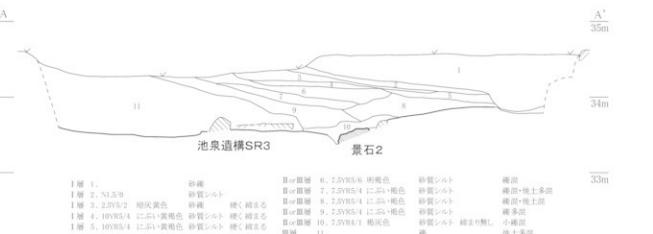
（1）ドレンチの概要

C地区的平坦部分の西半、南北15m、東西13mの範囲に7箇所の調査区を設定した。うち4箇所は1次調査範囲内で、土層観察を中心に再検討を行った。表層より手掘りによって掘削を行い、調査を実施した。

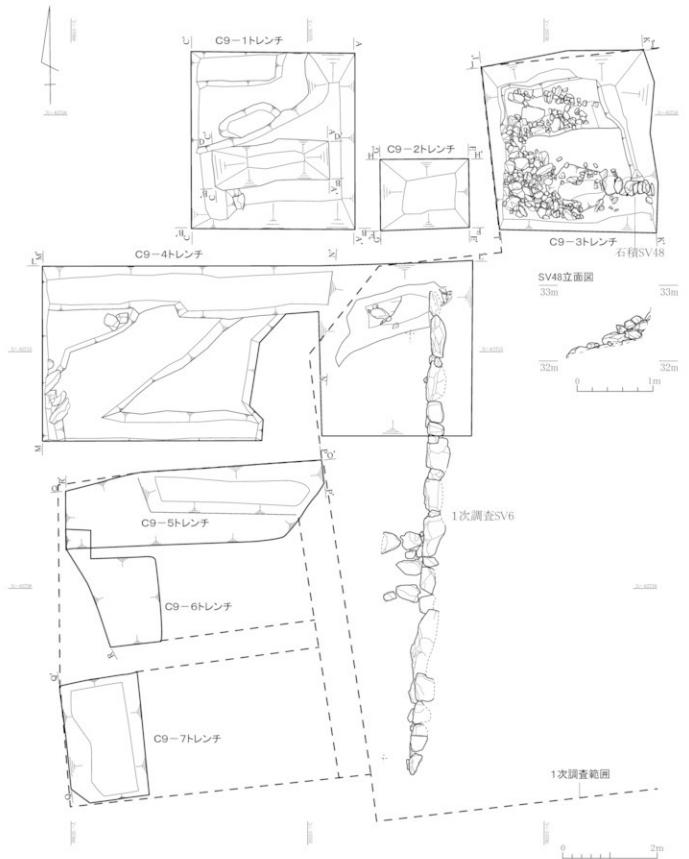
基本層位は次の I・IV 層の2層に大別でき、さらにIV層はIV 1～3層の3層に分けられる。I層は



第11図 C 8 トレンチ平面図

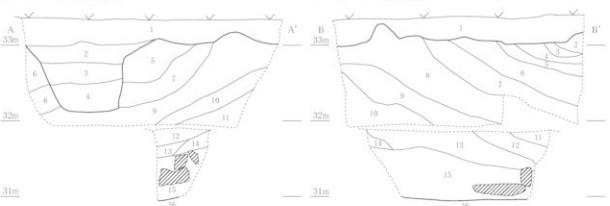


第12図 C 8 トレンチ土層・断面図



第13図 C 9 トレンチ平面図

C9-1トレンチ東壁土層図



I 层 1.	褐色	粘質土
IV1層 2.	2.5YR6/6	粘質土
IV1層 3.	2.5YR4/2	粘質土
IV1層 4.	2.5YR4/4	粘質土
IV1層 5. IVYR4/2	灰黃褐色	粘質土
IV1層 6. 2.5YR3/3	暗褐色	粘質土
IV1層 7. IVYR4/1	褐色	粘質土
IV1層 8. 2.5YR4/1	褐色	粘質土
IV1層 9. 2.5YR4/2	灰黃褐色	粘質土
IV1層 10. IVYR4/3	灰黃褐色	粘質土
IV1層 11. IVYR3/2	褐色	粘質土
IV1層 12. IVYR4/2	灰黃褐色	粘質土
IV1層 13. IVYR5/3	灰黃褐色	粘質土
IV1層 14. IVYR4/6	褐色	粘質土
IV1層 15. IVYR4/3	灰黃褐色	粘質土
IV2層 16. IVYR3/4	暗褐色	粘質土

3~5cmの大粒の礫混入

5~30cmの大粒の礫混入

5~20cmの大粒の礫混入

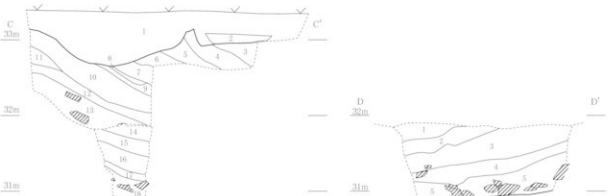
5~10cmの大粒の礫混入

5~30cmの大粒の礫混入

非常に硬く締まる 5cmの大粒の礫混入

非常に硬く締まる 5cmの大粒の礫混入

C9-1トレンチ西壁土層図



I 层 1.	褐色	粘質土
IV1層 2.	2.5YR6/6	粘質土
IV1層 3.	2.5YR4/2	粘質土
IV1層 4.	2.5YR4/4	粘質土
IV1層 5. IVYR4/2	灰褐色	粘質土
IV1層 6. 2.5YR3/3	暗褐色	粘質土
IV1層 7. IVYR4/1	褐色	粘質土
IV1層 8. 2.5YR4/1	褐色	粘質土
IV1層 9. 2.5YR4/2	灰褐色	粘質土
IV1層 10. IVYR4/3	灰褐色	粘質土
IV1層 11. IVYR3/2	褐色	粘質土
IV1層 12. IVYR4/2	灰褐色	粘質土
IV1層 13. 2.5YR3/1	暗褐色	粘質土
IV1層 14. 2.5YR3/1	灰褐色	砂質土
IV1層 15. IVYR4/2	灰褐色	砂質土
IV1層 16. IVYR4/2	灰褐色	砂質土
IV1層 17. IVYR5/3	灰褐色	砂質土
IV1層 18. IVYR4/3	灰褐色	砂質土
IV2層 19. IVYR3/4	暗褐色	粘質土

3~5cmの大粒の礫混入

5~10cmの大粒の礫混入

5~30cmの大粒の礫混入

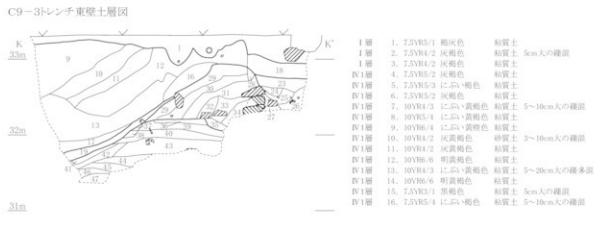
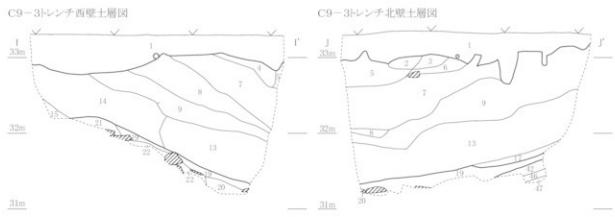
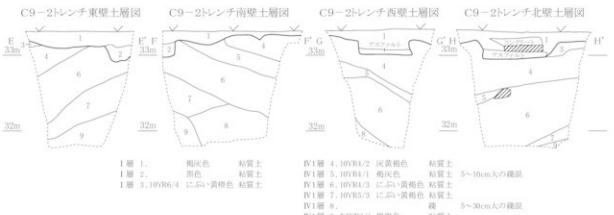
5~20cmの大粒の礫混入

5~30cmの大粒の礫混入

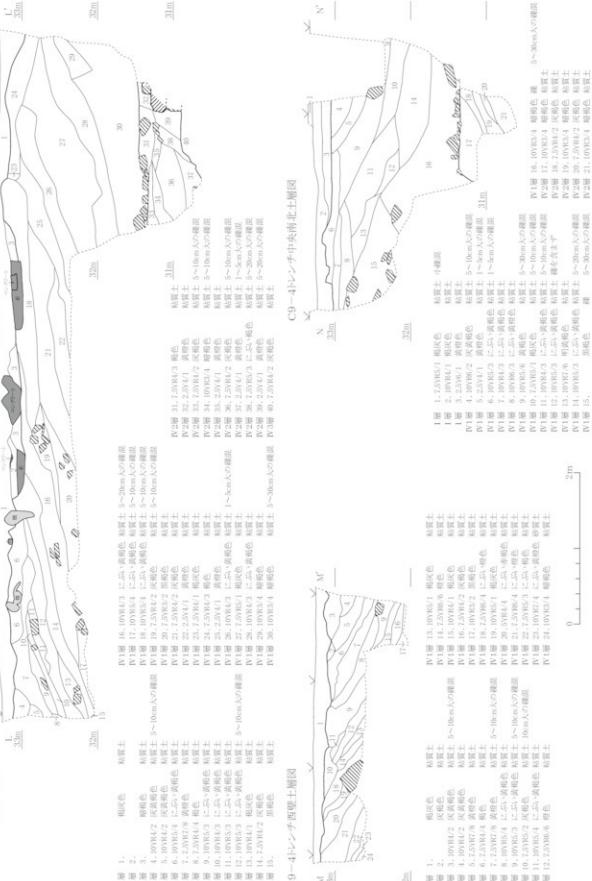
非常に硬く締まる 5cmの大粒の礫混入

0 1 1 1 1 1 1 2m

第14図 C 9-1 トレンチ土層図

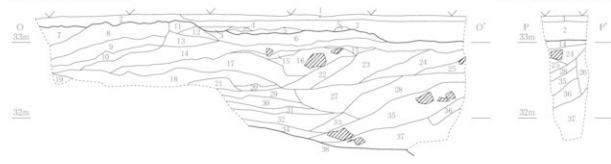


第15図 C 9-2・3 トレンチ土層図



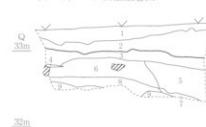
6図 C9-4上心透視図

C9-5トレント北壁土層図

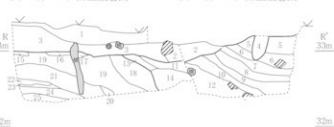


I層	1.	黄色	粘質土	P'層	20. 10YR5/6	明黄褐色	粘質土	縫まり弱い。
I層	2.	褐色	粘質土	P'層	21. 7.5YR4/1	褐灰色	粘質土	
I層	3.	灰褐色	粘質土	P'層	22. 10YR4/1	12.5-15. 黃褐色	粘質土	5cm大的縫混
I層	4. HOY5/1	褐色	粘質土	P'層	23. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	
P'層	5. 1. 10YR5/3	褐色	粘質土	P'層	24. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	5cm大的縫混
P'層	6. 1. 10YR5/3	褐色	粘質土	P'層	25. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	小縫多量
P'層	7. 1. 10YR5/3	褐色	粘質土	P'層	26. 10YR4/1	褐灰色	粘質土	
P'層	8. HOY5/4	褐色	粘質土	P'層	27. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	1~10cm大的縫混
P'層	9. HOY5/4	褐色	粘質土	P'層	28. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	
P'層	10. 1. 10YR5/3	褐色	粘質土	P'層	29. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	5~10cm大的縫混
P'層	11. 1. 10YR5/3	褐色	粘質土	P'層	30. 7.5YR3/2	黑褐色	粘質土	
P'層	12. HOY5/2	灰褐色	粘質土	P'層	31. 7.5YR3/2	黑褐色	粘質土	5~10cm大的縫混
P'層	13. HOY5/3	灰褐色	粘質土	P'層	32. 7.5YR3/2	黑褐色	粘質土	
P'層	14. HOY5/3	灰褐色	粘質土	P'層	33. 7.5YR3/2	黑褐色	粘質土	5~10cm大的縫混
P'層	15. HOY5/1	褐色	粘質土	P'層	34. 7.5YR3/2	黑褐色	粘質土	10~20cm大的縫混
P'層	16. HOY5/3	灰褐色	粘質土	P'層	35. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	10~30cm大的縫混
P'層	17. HOY5/1	黑色	粘質土	P'層	36. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	
P'層	18. HOY5/1	黑色	粘質土	P'層	37. 10YR4/3	12.5-15. 黃褐色	粘質土	10~30cm大的縫混
P'層	19. 7.5YR3/2	灰褐色	粘質土	P'層	38. 10YR5/2	褐褐色	粘質土	

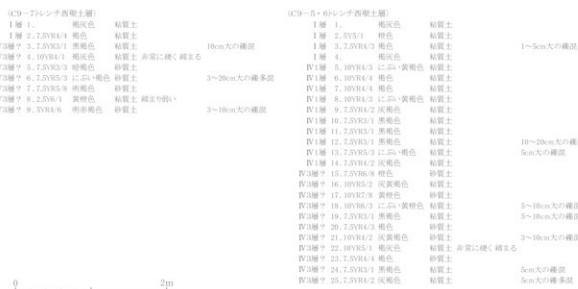
C9-7トレント西壁土層図



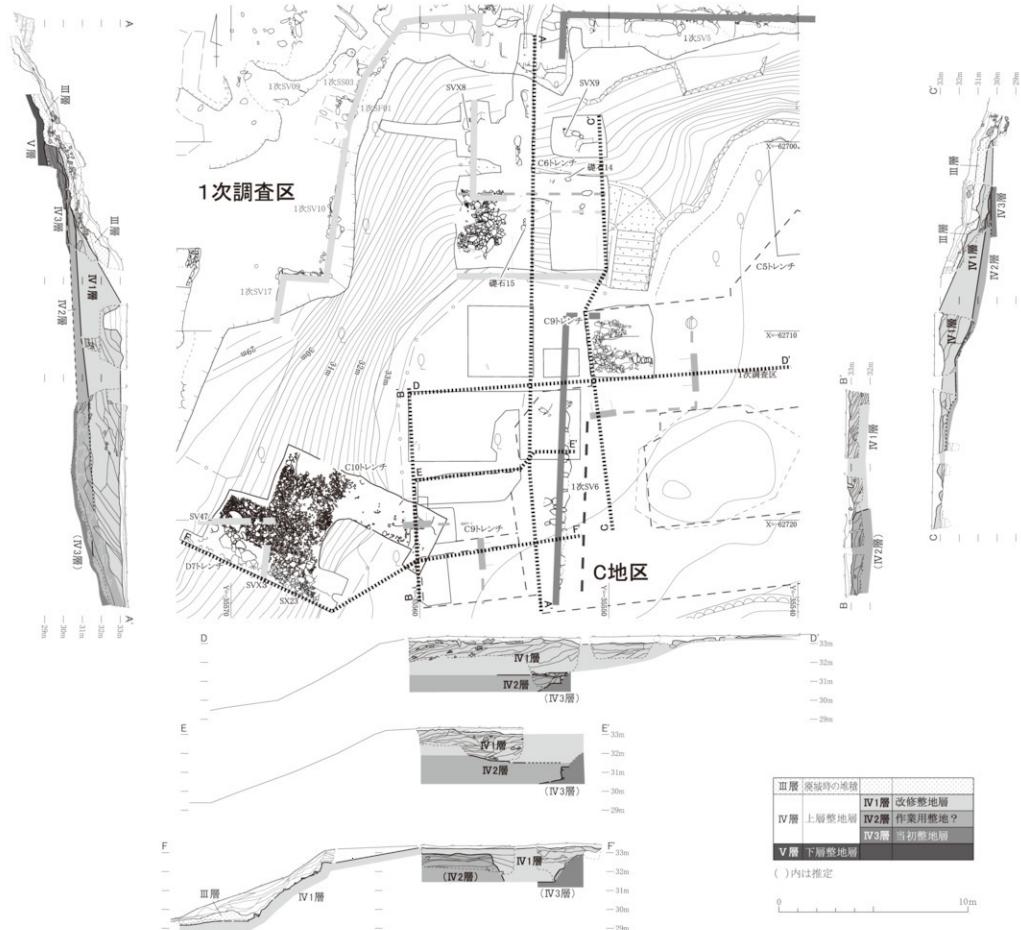
C9-6トレント西壁土層図



C9-5トレント西壁土層図



第17図 C 9-5～7トレント土層図



第18図 C地区土層解釈図

公園造成土を中心とした近現代の造成土、IV層は戦国期上層整地層である。IV層は最初の整地層であるIV3層と、改修時の整地層IV2・IV1層に分けられる。IV2層は1次調査S V6を埋める整地層で、上面が硬く締まり、その直上には石垣（S V6）の石材及び裏込めの崩落礫が堆積している。これらの状況から、改修時における一工程の作業面の可能性が高いと考えられる。IV1層は1次調査のS V10・17などに伴う整地層で、廃城時のC地区の地形を示すものである。上面は近代以降に削平されており、一部を除き残存していない。

(2) 検出遺構

石積S V48（第13図）

千疊敷1次調査で検出されていた石積みで、C9-3トレンチで確認した。周囲の整地層が削除されており、石積みのみを残した状態で埋め戻されていた。検出長は1.1m、高さ0.4m、面は南側で、埋土（第15図23～27層）には1～2cm程度の小円礫が含まれており、意図的に埋められた状況である。背後にあたる北側には、石を積むと同時に盛ったと推測される整地層（第15図28～35層）を調査区壁面に確認した。整地層の北側は、IV2層構築の際、削り取られている可能性がある。

S V48に伴う整地層は、現在のところIV層の可能性が高いと考えるが、下層のV層に伴うものである可能性も否めない。

4. C10トレンチ（平成26年度調査）（第19図）

(1) トレンチの概要

C地区的西斜面、平成20年度に調査を行ったD7トレンチの北隣に調査区を設定した。D7トレンチで検出した巨石列の根固めと考えられる石列S V X3の続きを確認することを目的とした。

調査の結果、S V X3とほぼ直交する石積S V47を検出した。石垣前面の整地面には一部で円礫が敷設されていることも確認した。

(2) 検出遺構

石積S V47

根石列S V X3の向きと、概ね直交する石積。南側で面が揃う5石の上に1石がのる。東端の石から約1m離れて、同じ向きの石がもう1石残存する。検出長は3.1m。前面には被熱した石材が多く転落していたが、全面的な調査まで除去しないでおくこととした。よって石垣に伴う面の様子ははつきり分からないが、硬く締まった硬化面と一部で円礫が敷かれている部分を確認している。

5. C11トレンチ（平成26年度調査）

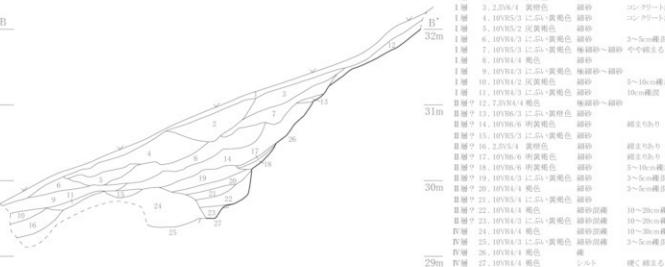
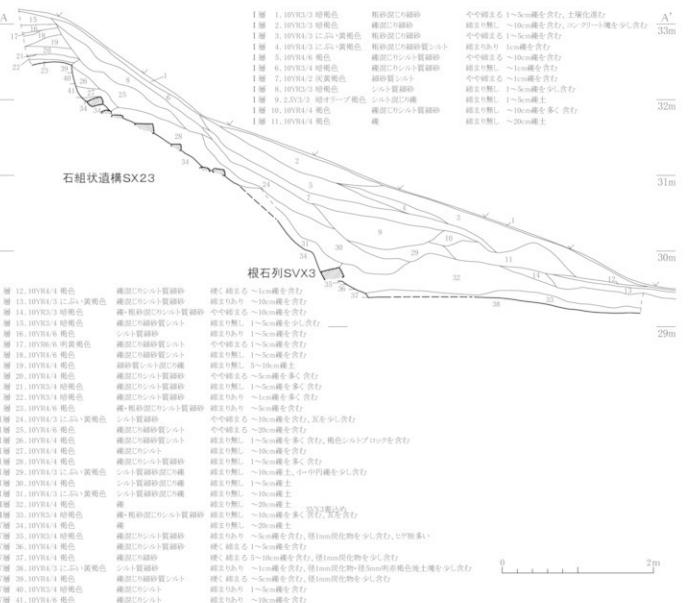
(1) トレンチの概要

C地区的北斜面に調査区を設定した。C地区的北斜面は、1次調査で石垣S V05（以下、石垣1次S V5）と水路S D01（以下、水路1次S D1）が確認されており、この続きを確認することを目的とした。また水路を挟んだ対岸のA地区で、虎口状（橋間連）遺構S X43が確認されており、対になるC地区側の状況確認も目的とした。

調査の結果、石垣1次S V5および水路1次S D1の続きを確認するとともに、A地区的虎口状（橋間連）遺構S X43と類似した平坦面をほぼ同一レベルで確認した。A地区とC地区は橋によって結ばれていた可能性が高くなつた。また、橋が想定された位置の下の石垣および水路内の石にだけ被熱赤化痕跡が見られ、焼け落ちた橋の部材によって赤化したものと推定される。

北斜面から約130度屈曲した東斜面で、石を整地土内に半分埋め込む庭風の石組み遺構を確認した（S V49）。橋から東側は庵を中心に谷川、岩盤を含めた景色を一体のものとして見せていたものと

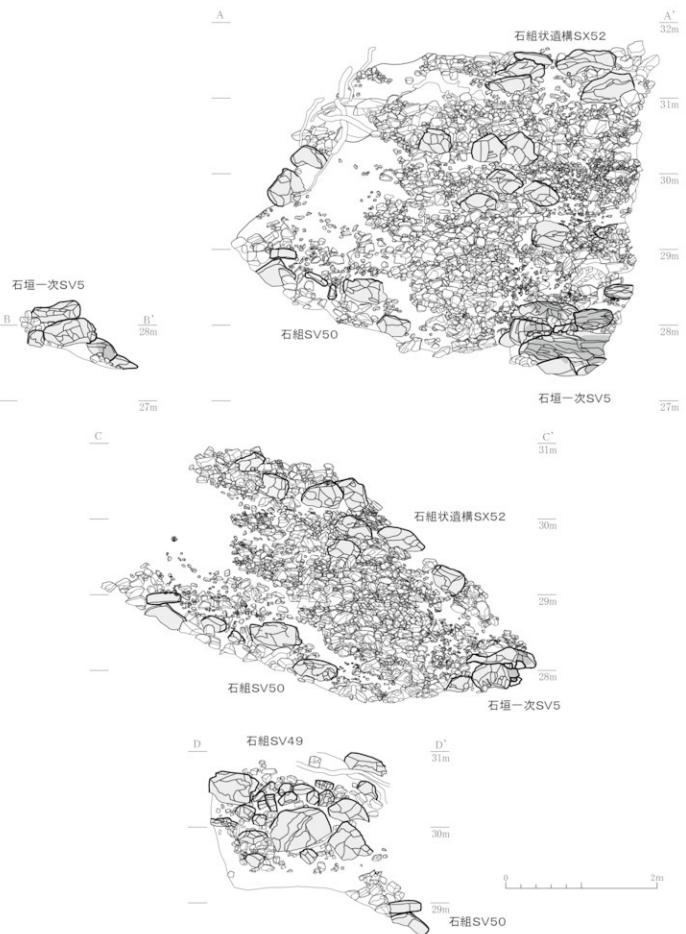




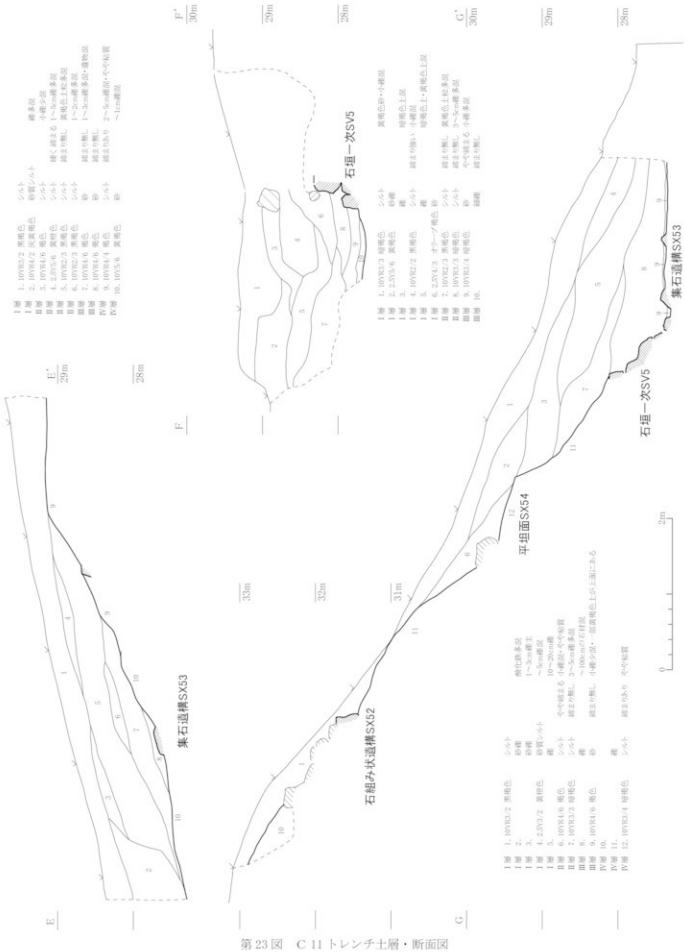
第20図 C10トレンチ土層図



第21図 C 11 トレンチ平面図



第22図 C 11 トレンチ立面図



第23図 C-II トレンチ土層・断面図

考えられる。同様に整地土に埋め込まれた石は水路 S D01の底面でも確認された（S X53）。

（2）検出遺構

石垣 1次 S V 5（第21～22図）

1次調査で出土した石垣 S V 5 の東端を検出した。検出長は1.7m、残存部分は2段で、高さ0.4mを測る。1段目は巨石を横方向に用い、確認できた部分で幅1.7m以上を測る。東に面を持つ石垣と出角を構成し、かつ東方向へは延びないことから東端といえる。S V 5 全体の長さは19.4mとなる。裏込め石は水路底部から高さ5.1mまで残存する。高さ1.9mの部分に平坦面（S X54）があり、セッタバックさせた2段築成の可能性があるが現状では不明である。平坦面から裏込め石の最高部までは3.2mで、上部には階段状の石組み（石組状遺構 S X52）が3段残存する。裏込め石の最高部から0.6mで整地土天場となる。

平坦面 S X54（第21～22図）

平坦面 S X54は、奥行1.1m、幅1.9mの範囲で確認でき、暗褐色土で構築され上面が若干硬化している。礎石は確認されていない。平成25年度の調査で、水路を挟み、北に隣接するA地区において、虎口状遺構 S X43を検出した。S X43は階段状の石組みや平坦部、礎石等から構成される遺構で、その性格について、C地区へ至る橋の基礎を想定した（『岐阜城跡3』）。今回の調査で、C地区北斜面においても同一レベルで平坦面が検出されたことによって、その可能性はより高まったと考えられる。

被熱赤化痕跡（第21～22図）

石垣 S V 5 および水路底部の石の一部に、被熱により明瞭に赤化した痕跡が確認できた。赤化した範囲は、S X54と S X43を繋ぐ橋が想定される部分に限られており、1次調査で検出したS V 5の他の部分では、これほど明瞭な赤化痕跡は認められなかった。焼け落ちた橋の構築材により火を受けたものと推定される。

石組状遺構 S X52（第21～22図）

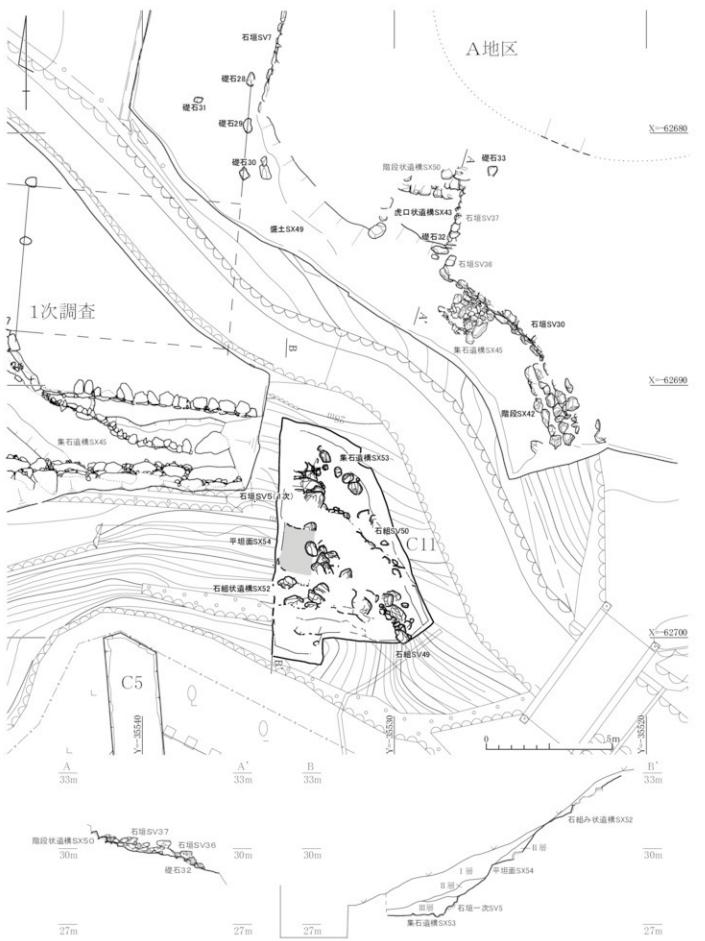
長さ0.6mほどの扁平な石を、平らな面を上に向けて階段状の石組みを構築したものである。3段3列を確認した。C地区西斜面に位置するC10（D 7）トレーナーにおいても同様な構造が見られた。C地区の外周を支える石垣もしくは巨石列は、天場まで積むのではなく、上部はこのような雁木状の構造物が造られていた可能性がある。

水路 1次 S D 1（第21～22図）

1次調査で検出した、S V 5 に沿って構築された石積みの水路で、戦国期の谷川の流路である。幅は約2.5mを測る。今調査でも確認したS V 5 の北側は、このS D 1 の底にあたるが、対岸の護岸施設は現況の水路に阻まれ確認できていない。S V 5より東は、順に石組遺構 S V50、49が南側の護岸施設に相当する。水路底部は、東斜面に屈曲する部分で約30度の傾斜で東に向かって上がっている。底は黄褐色砂で、部分的に黄褐色土が貼られている状況が確認できた。また径0.4m程度のやや丸みを帯びた石を半分露出させて埋め込んだ施設（集石遺構 S X53）も検出している。出土遺物は、奥の傾斜に近い部分で土器器皿が多数出土したほか、転落した礎石と見られる扁平な流紋岩の円礫が出土した。

石組遺構 S V49（第21～22図）

北斜面から約130度屈曲した東斜面で確認した。石垣のように石材を積んで構築するのではなく、長径0.6m程度のやや丸みを帯びた石材を整地土内に半分露出させて埋め込むものである。石材の形状や様相、構造は圓池遺構における景石と酷似する。S V 5 東端を境に谷川の上流側は、岩盤や滝を含めた一的な庭園風に構築されていた可能性が高く、水路の護岸もこのような構造を採っていた可



第24図 A・C地区遺構配置図

能性が高い。

石組造構 S V50 (第21~22図)

石垣 S V5 と石組 S V49 を繋ぐ石組造構で、長さは4.5mを測る。S V5・S V49両者とも角度が異なる。残存状況が悪く、明確ではないが、S V49の石材よりも小さい石を使用している。水路 S D 1 の護岸施設でもあるが、水流に耐えられるような構造ではなく、主たる石材が崩壊あるいは抜き取られた痕跡の可能性もある。

集石造構 S X53 (第21~22図)

S D 1 の底で検出した径0.4m程度のやや丸みを帯びた石材を半分露出させて埋め込んだ造構。石材の形状や様相、構造は園池造構における景石と酷似する。S V5 の東端より東の護岸施設は、石垣というより見栄えを重視した石組造構となっている。谷川の約30m上流には、滝があつたと推測されており、この周辺は全体的に庭園風な様相を呈していた可能性が高い。その中で、S X53も景石として配石されていた可能性が考えられる。

6. F 3 トレンチ (平成24年度調査) (第25図)

(1) トレンチの概要

長さ10m、幅1mの南北方向のトレンチを設定した。最大深さ1.5mまで掘削を行ったが、全て近代以降の造成土であることが判明した。

(2) 検出造構

造構は検出されなかった。

7. F 4 トレンチ (平成24年度調査)

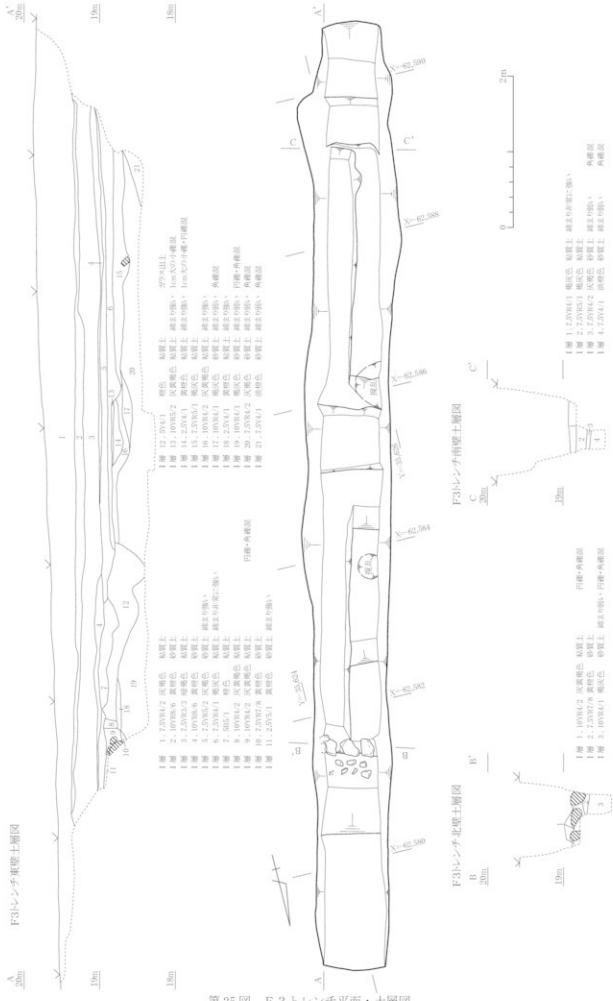
(1) トレンチの概要

長さ5m、幅2mの南北方向のトレンチを設定し、掘削した結果、現地表面から深さ1.3m、標高19.0mで戦国期の整地層（IV層・第26図29層以下）を確認した。さらにサブトレンチを設定し、断割を実施したところ、標高18.9mで下層の整地層（V層・第26図46層以下）を確認した。上面からは造構の可能性がある掘り込みも確認している。V層に伴う下層造構として、ピットと石組みの溝？と見られる造構が確認できたのみである。

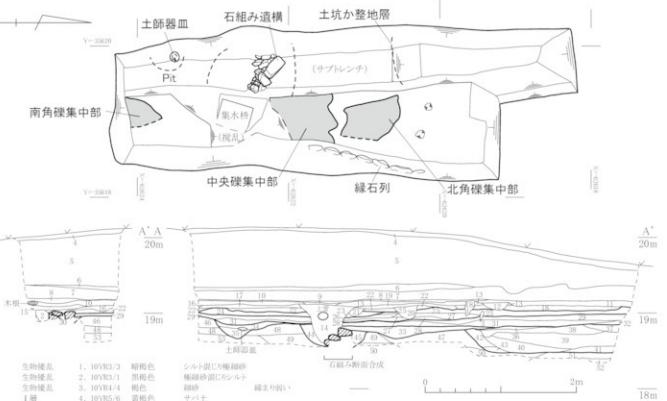
(2) 検出造構

土坑？ (第26図)

下層（V層）に伴う掘り込み。サブトレンチ北端で検出した。断面形状は皿形の底が平坦なものである。明治の地籍図を見ると、F 4 トレンチ北端をかすめるように水路が通っている。これは、千畳敷1次調査で検出した水路 S D 1 の下流にあたるものと推測されている。それに関わる掘方のような造構の可能性もある。



第25図 F 3 トレンチ平面・土層図



生け垣段。
1. 10Y3C3 黄褐色 シトゲ泥引繊維
2. 10Y3C3 黄褐色 磨研砂利(シルト)
3. 10Y3C3 黄褐色 破片
4. 10Y3C3 黄褐色 パバット
5. 10Y4A1 黄褐色 磨研泥引シルト
6. 10Y3C3 黒褐色
7. 10Y3C3 黒褐色 磨研泥引シルト
8. 10Y4A1 にひく黄褐色 泥
9. 10Y3C3 黄褐色 磨研泥引繊維
10. 10Y3C3 黄褐色 磨研泥引シルト
11. 10Y3C3 黄褐色 磨研泥引シルト
12. 10Y3C3 にひく黄褐色 泥
13. 10Y3C3 黄褐色 磨研砂利(シルト)
14. 10Y3C3 黄褐色 磨研砂利(シルト)
15. 10Y3C3 黄褐色 磨研泥引シルト
16. 10Y4A6 黄褐色 磨研泥引繊維
17. 7.5W3C4 黄褐色 磨研泥引繊維
18. 10Y4A7 黄褐色 磨研泥引シルト
19. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
20. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
21. 10Y3C4 黄褐色 磨研砂利(シルト)
22. 7.5W3C3 黑褐色 シトゲ泥引繊維
23. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
1-Ⅲ層
24. 10Y4A6 黄褐色 磨研泥引シルト
25. 7.5W3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
26. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
27. 7.5W3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
28. 7.5W3C3 黄褐色 磨研泥引シルト
29. 2.5W4.6 オリーブ色 磨研泥引シルト
30. 10Y3C2 黑褐色 磨研泥引シルト
31. 10Y3C2 黑褐色 磨研泥引シルト
32. 7.5W3A4 黄褐色
33. 10Y4A4 黄褐色 磨研泥引シルト
34. 2.5W4.6 オリーブ色 磨研砂利(シルト)
35. 10Y3C2 黑褐色 磨研泥引シルト
36. 7.5W3C6 黄褐色 磨研泥引シルト
37. 10Y3C2 黄褐色 磨研泥引繊維
38. 7.5W3C2 黑褐色 シルト
39. 10W4A6 黄褐色 磨研泥引シルト
40. 7.5T3C2 黑褐色 磨研泥引繊維
41. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
42. 10Y3C4 黄褐色 磨研泥引シルト
43. 10Y3C4 黑褐色 磨研泥引シルト
44. 10Y3C2 黑褐色 磨研泥引シルト
石組み構築上
45. 10Y3C2 黑褐色 磨研泥引シルト
46. 10Y3C2 にひく黄褐色 シトゲ泥引繊維
47. 10Y3C3 黄褐色 泥
48. 2.5W4.6 黄褐色 磨研泥引シルト
49. 2.5W4.6 黄褐色 磨研泥引シルト
50. 10Y4A4 黄褐色 磨研泥引シルト
51. 10Y4A4 黄褐色 磨研泥引シルト
52. 2.5W4.6 黄褐色 磨研泥引シルト
53. 10Y3C3 黄褐色 磨研砂利(シルト)

1~2cm角繊維多層、炭化物多層
~2cm角繊維多層
~3cm角繊維多層
~4cm角繊維多層
~5cm角繊維多層
~6cm角繊維や多層
~7cm角繊維や多層
土質合計
~8cm角繊維多層
~9cm角繊維多層
~10cm角繊維多層
~11cm角繊維多層
~12cm角繊維多層
~13cm角繊維多層
~14cm角繊維多層
~15cm角繊維多層
~16cm角繊維多層
~17cm角繊維多層
~18cm角繊維多層

第26図 F-4トレンチ平面・土層図

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

陶磁器類や土師器皿の分類や年代観については、岐阜市が従来用いている基準に従った（註）。

1. 濱戸美濃産陶器

戦国期の焼き物のうち、濱戸美濃産陶器（大窯製品）が占める割合は約13%（2,451点中308点）である。これは『岐阜城跡』の15.7%、『岐阜城跡2』の約14%と比べてほぼ同じである。トレンチ毎に見るとC 9 トレンチとC 11 トレンチが多い。

2. 輸入陶磁器

戦国期の遺物のうち、輸入陶磁器が占める割合は約4%（108点）で、その内訳は染付59%（64点）、青磁9%（10点）、白磁29%（31点）、中国製陶器2点、朝鮮製陶器1点である。

中国製陶器は天目茶碗（117）と小皿（118）で、いずれもC 9-4 トレンチ I 層からの出土である。朝鮮製陶器の可能性があるもの（42）はC 8 トレンチ III 層からの出土である。

3. 土師器皿

出土遺物のうち最も多いのが土師器皿で、2,035点、全体の83%を占める。この割合はこれまでの調査とほぼ同様な数値である。

土師器皿は内面のナデ調整を観点として、底部と体部をナデ分け、体部は横方向にナデる（ヨコナデ）B類と、ナデ分けをしない（一方向ナデ）C類に大別でき、さらに細分されるが、岐阜城千畳敷遺跡で大多数を占めるのがB2類とC2類である。B2類はさらに細分されており（註6）、今回判別可能なものは極力分類したが、破片で判断できないものはB2類という分類に留めている。

4. 瓦

瓦の出土は512点と比較的多い。うち76%（388点）はC 10 トレンチからの出土である。近接するC 7 トレンチからは7,000点を超える瓦の出土があり、これに関連しての出土量といえる。軒平瓦は『岐阜城跡』、軒丸瓦は『千疋敷』、各報告書の分類を使用した。

5. 壁土

今回の調査ではおよそ1,400点の壁土が出土した。うち94%（1,345点）はC 8 トレンチからの出土である。C 8 トレンチは、ほぼ全域が池泉造構S R 3に占められるが、その埋土は上方のB地区からの流れ込みと判断できる。壁土もこの埋土中に多く含まれられており、元となる建物はB地区にあったと考えられる。

6. その他

これまでの岐阜城千疋敷遺跡の調査では、須恵器・灰釉陶器の出土が一定量認められたが、今回の調査では、須恵器が6点、灰釉陶器0点と極めて少ない。また、山茶碗においても尾張型8点、東濃型29点と、これまでの調査と比較すると少量である。

（註）（1）渡辺博人 1984 「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

（2）藤澤良祐 2008 「第2章 東濃型山茶碗の形式編年」『中世濱戸窯の研究』

（3）小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2

（4）上田秀夫 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2

（5）藤澤良祐 1993 「濱戸・美濃大窯の編年」『濱戸市史陶磁史篇四』

（6）井川洋子 2006 「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』

第2節 出土遺物

1. B20トレチ

1・2はVI層から出土した。1はC2類の土師器皿、2はクロ成形の土師器であるが、器種は不明である。

3～11はIII層から出土した。3は大窯第3～4段階の擂鉢、4はC2類の土師器皿、5・6は常滑産陶器の甕、7～10は瓦である。7は吊紐痕が見られる丸瓦、8・9は平瓦、10は輪邊瓦である。11は灰釉の丸皿で近世と考えられ、混入の可能性もある。

12～15はII層もしくはIII層から出土したものである。12は外面に銷釉が施された焼締の祖母懐壺で、肩部に把手がある。13は染付碗、14は白磁皿、15は土鍾である。

16～41はI層から出土した。16～22は大窯製品で、16は第3段階の丸皿、17は鉄釉と薄い銷釉が施された第1～2段階の耳付水注、18は外面に鉄釉、内面に銷釉が施された第3～4段階の壺、19は外面に濃い銷釉、内面に鉄釉が施された第3～4段階の小壺もしくは小瓶、20・21は第3段階前半の擂鉢、22は灰釉が施された第1段階の筒形香炉である。16は二次被熱している。23は染付小杯である。24～34は土師器皿で、24・25はB2類、26はヨコナダが不明瞭であるが、器形からB類と考えられるものの、27～33はC2類に分類される。34はクロ成形の土師器皿である。35は丸瓦である。36は古瀬戸後IV期の鉄釉の四耳壺である。37～40は近世瀬戸美濃産陶器で、37は鉄釉の碗、38・39は灰釉の皿、40は連房第11小期の擂鉢である。41は產地不明の陶器で鉄釉の壺である。

2. C8トレチ

42～49はIII層から出土した。42は二次被熱が激しい碗で、朝鮮製陶器と見られる。43は花崗岩製の蹲踞（手水鉢）である。平面形が方形を呈するもので、底面と直立する側面2面の一部が残存する。側面の一方は、上端が山形に弧を描いている。高さは20.0～22.5cm、側面の厚さは約6～8cm、底の厚さは約6cmを測る。側面の上部を中心に赤化した被熱痕が見られる。44・45は鉄製の釘であるが、銷が著しく、頭部の形状は不明瞭であるが、頭巻釘と見られる。46～48は被熱して硬化した壁土である。46は板材もしくは太い竹を細かく割った小舞痕と、直交する板材の小舞痕が見られる。47は布目痕が見られるもので、塗り足しの痕跡と見られる。48は厚さ約6cmを測るもので、当時表面に表れていた両面と、塗り重ねの痕跡が観察できる。49は尾張型山茶碗5型式の皿である。

50～52はII層から出土したと見られるものである。50は大窯第1段階の端反皿、51・52はC2類の土師器皿である。

53～67はI層から出土した。53・54は大窯製品で、53が第3段階の内反高台の天目茶碗、54は第2～3段階の丸皿で強く二次被熱している。55～58は中国製染付で、55は二次被熱した碗、56は小杯、57はC群の皿、58は大皿である。59～61は土師器皿で、59はB2-b類、60・61はC2類である。62は鉄釘、63は平瓦、64～66は壁土である。64は片面に布目痕、もう片面には小舞痕が見られる。小舞は幅の狭い板もしくは竹を2～3枚を並べて縦に固定しているようである。65は厚いブロック状のもの、66は微かに小舞痕が見られる。67は古瀬戸後IV期新段階の腰折皿である。

3. C9トレチ

68はC9-1トレチIII層から出土したB2類の土師器皿、69は同I層から出土した大窯第1段階の端反皿である。

70～83はC9-2トレチから出土したもので、70～76はIII層からである。70・71は大窯製品の擂鉢で、70が第2段階、71が第3段階前半である。72～74は土師器皿で、72がB2-c類、73・74がC2類である。75は鉄釘、76は尾張型山茶碗6型式の碗である。77～83はI層から出土した。77～83は土師

器皿で、77・78はB 2-b類、79はB 2類、80はC 2類、81・82はC 2類と見られるものである。83は寛永通寶である。

84～94はC9-3トレンチから出土したもので、84は石積S V48に伴う盛土中(IV層)からである。土師器皿であるが、分類はできなかった。85～91はIII層から出土した。85・87・89・90は土師器皿で、87と90はB 2-c類であるが、他は分類が難しい。86は染付皿E群、88は白磁皿、91は元豊通寶である。92～94は同I層から出土した。92は大窯第3段階前半の播鉢、93は尾張型山茶碗で6型式の鉢、94は東濃型山茶碗で白土原窯式の碗である。

95～122はC9-4トレンチから出土し、95～99はIII層からのものである。95は染付皿C群、96～98はC 2類の土師器皿、99は土師器で茶釜である。100～122はI層から出土した。100～105は大窯製品で、100は外面腰部に薄い銷釉を施した第3段階の天目茶碗、101は第2段階の丸皿、102は第3段階の反り皿、103は第2段階の鉄釉稜皿、104は第2段階の灯明皿、105は鉄釉の祖母懐壺である。106～110は染付で、106は碗C群、107・108は皿C群、109・110は皿E群である。111～113は青磁、111・112は龍泉窯系で、111は盤、112はその口縁部の可能性がある。113は稜花皿の底部である。114～116は端反の白磁皿である。117・118は中国製陶器で、117は鉄釉の天目茶碗である。腰部の釉を削り取っており、連弁風に搔き取られた箇所には、黒色のものが塗布されているように見える。118はスカイブルーを呈する鉄釉の小皿である。胎土は軟質で、口縁部外周は面取りが施されており、平面形は多角形を呈する。119は軒丸瓦I類、120は棟飾り瓦と見られる。121・122は古瀬戸後IV期新段階の天目茶碗である。

123はC9-6もしくは-7トレンチI層から出土した瓦で、棟飾り瓦と見られる。124はC9-7トレンチIII層から出土した土師器皿C 2類である。125～127はC 9トレンチから出土したもので、125・126はIII層の可能性が高いもの、127はI層のものである。125は染付碗、126は瓦器の火鉢、127は寛永通寶である。

4. C 10トレンチ

128～133はIII層から出土した。128・129は大窯製品で、128は口縁部のみ鉄釉を施す第3段階の丸皿、129は鉄釉を施す第2～3段階の徳利である。130～133は瓦で、130は軒平瓦C類、131は軒丸瓦I類、132はコビキB技法が見られる丸瓦、133は棟飾り瓦である。

134～139はII～III層から出土した。134・135は大窯製品で、134は第4段階前半の灰釉の折縁皿、135は銷釉が施された第3段階の盃である。136は白磁皿である。137は軒平瓦A類、138は丸瓦、139は古瀬戸中I～II期の灰釉が施された瓶子である。

140～155はI層から出土した。140は灰釉が施された大窯第3～4段階の筒形容器、141は染付皿E群である。142～151は瓦で、142・143は軒平瓦A類、144は軒平瓦C類、145・146は軒丸瓦I類、147・148は平瓦、149・150は丸瓦、151は飾り瓦と見られるものである。143・145・146は二次被熱している。152は寛永通寶、153は古瀬戸後期の鉄釉の祖母懐壺、154・155は近世後期の瀬戸美濃産陶器で、154は灰釉の徳利、155は鉄釉の壺である。

5. C 11トレンチ

156・157はIV層から出土した。両者とも土師器皿B 2-c類である。

158～183はIII層から出土した。158～160は大窯製品で、158は第1段階の天目茶碗、159は第1段階の反り皿、160は第2段階の灯明皿である。158は二次被熱している。161～178は土師器皿で、161～163はB 2-b類、164～167はB 2-c類、169～178はC 2類に分類される。168はB 2類とみられるものである。179・180は鉄鉢、181は銭貨で、明瞭ではないが祥符通寶とみられる。182は古瀬戸後IV期新段階の天目茶碗、183は产地不明の陶器である。

184～196はI層もしくはIV層から出土した。184～186は大窯製品の擂鉢で、184は第3段階前半、185は第3段階、186は第3～4段階に比定される。187～195は土師器皿で、187～189はB2-c類、190・191はB2類、192～195はC2類である。196は東濃型山茶碗の皿で、明和窓式である。

197～232はI層もしくはII層から出土した。197～210は大窯製品で、197は第3段階後半の天目茶碗、198・199は第1段階の端反皿、200は端反皿か丸皿の底部、201は第2～3段階の反り皿、202は鉛釉が施された第4段階の大皿である。200は二次被熱している。203は大窯製品である可能性が高いもので、鉄釉が施された筒形容器である。204～206は第2段階の擂鉢である。207は鉄釉の第1～2段階の小壺もしくは小瓶、208は鉄釉の第2～3段階の徳利、209は鉄釉の祖母懐壺である。210～214は染付皿で、210はB1群、211はB2群、212はC群、213はE群に分類される。210・214は二次被熱している。215は龍泉窯系青磁の盤、216・217は白磁皿である。215はC9トレンドルから出土した111と同一個体の可能性が高い。218～222は土師器皿で、218・219はB2-b類、220～222はC2類である。223は鉄釘、224は銭貨で皇宋通寶である。225は軒丸風の瓦であるが、瓦当面の接合面の角度が通常ではない。226は須恵器の長頸瓶、227は美濃須恵産の山茶碗で片口鉢、5型式併行のものである。228～231は古瀬戸製品で、228は中I～II期の四耳壺、229は後IV期新段階の天目茶碗、230・231は後IV期の口広有耳壺である。鉄釉が施される。

232～236はI層から出土した。232・233は大窯製品で、232は第2～3段階の丸皿、233は第3段階前半の擂鉢である。234は染付皿B2群、235は土師器の羽釜、236は尾張型山茶碗10型式の片口鉢である。

6. F3トレンドル

237～241はI層から出土した。237・238は大窯製品で、237は第1段階の端反皿、238は第3段階後半の擂鉢である。239は土師器皿C2類、240は連房第8～9小期の鉄釉の灯明皿、241は鉄釉の瀬戸美濃産陶器であるが、器種、時期は不明である。

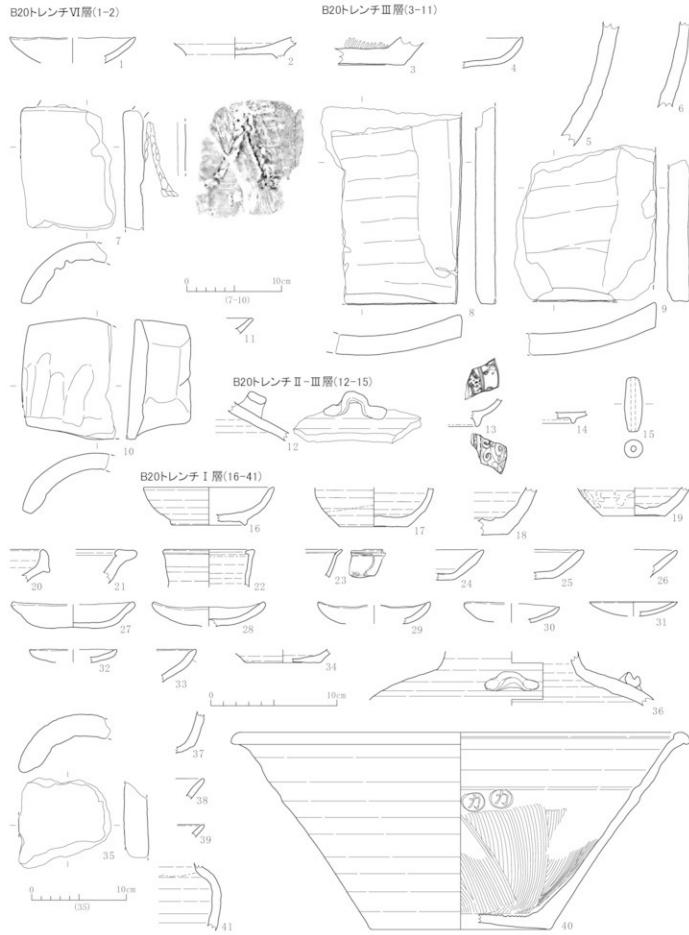
7. F4トレンドル

242～246はV層から出土した。242・243は大窯製品で、242は第1段階の端反皿、243は第1～2段階の端反皿もしくは丸皿の底部である。244～246は土師器皿で、244はB2-c類、245はB2類、246はC2類である。247はV層上面から掘り込まれるピットから出土した土師器皿で、分類は難しい。

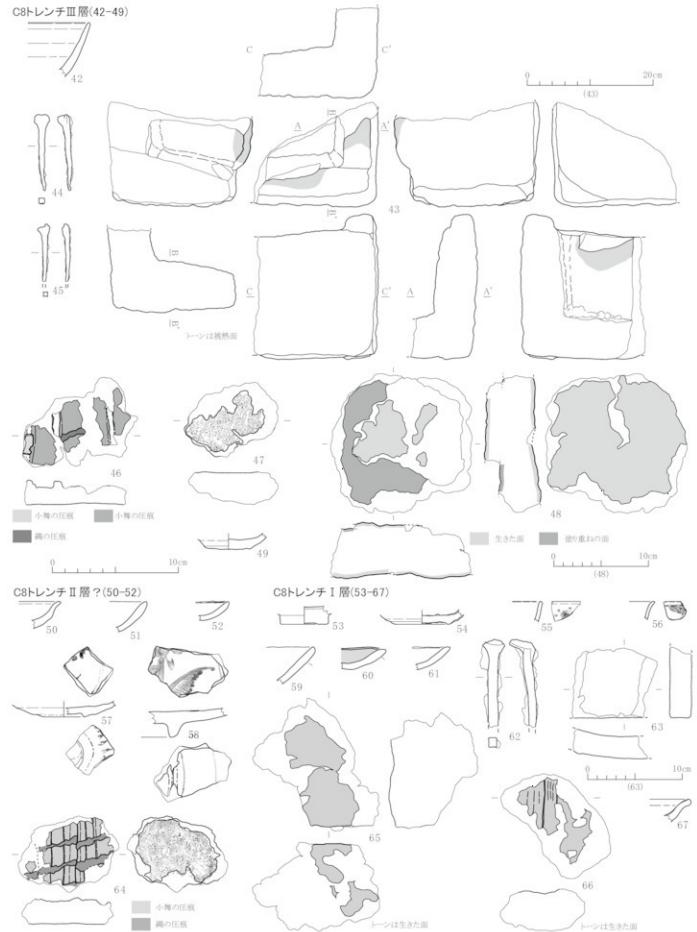
248～254はIV層から出土した。248・249は大窯製品で、248は第3段階前半の天目茶碗、249は第2段階の鉄釉の稜皿である。250～253は土師器皿で、250はB1類とみられるもの、251はB2-a類、252・253はC2類である。254は碁石（黒）とみられる。

255～271はIII層から出土した。255～259は大窯製品で、255～257は第2段階の丸皿、258は第3～4段階の擂鉢、259は祖母懐壺とみられる。260は染付皿C群、261・262は白磁皿、263～267は土師器皿で、263はB2-c類、264～267はC2類に分類される。261は二次被熱している。268は鉄釘、269は銭貨であるが、字款は判読できない。270は古瀬戸後IV期の鉄釉の仏龕具、271は近世と見られる灰釉の丸皿である。

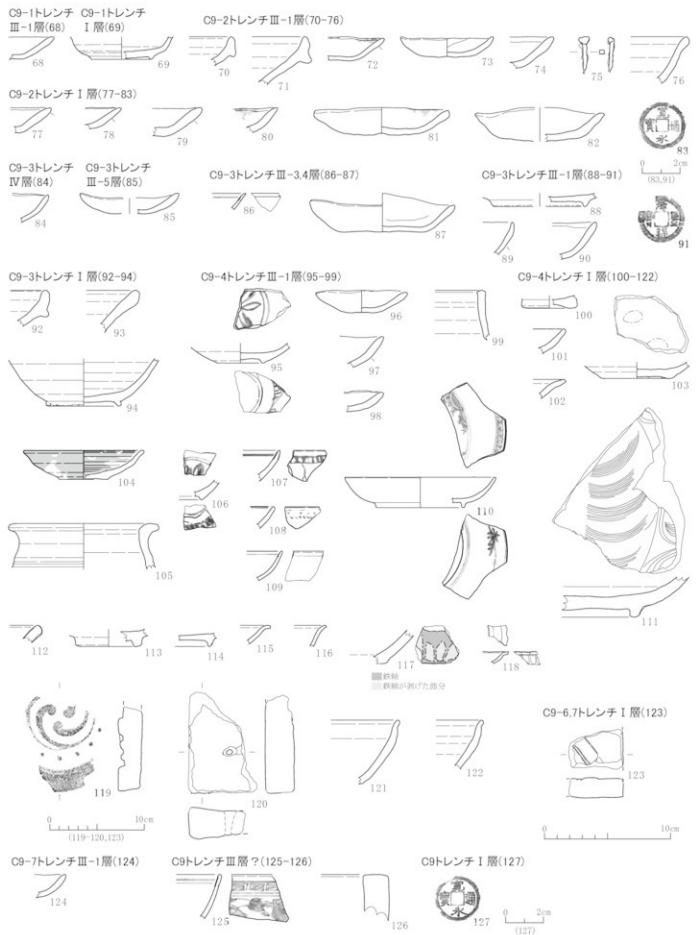
272～288はI層から出土した。272～280は大窯製品で、272は第3段階前半の天目茶碗、273は第3段階の天目茶碗、274・275は第2段階の丸皿、276は第3段階前半の丸皿、277は第2段階の灯明皿、278・279は第1～3段階の灰釉の筒形容器、280は鉛釉が施された第3段階前半の建水である。273は二次被熱している。281は染付碗、282は染付皿C群、283は白磁皿、284～287は土師器皿で、284～286はC2類、287はB2-c類に分類される。283は二次被熱している。288は尾張型山茶碗の皿で5型式（古）である。



第27図 遺物実測図(1)



第28図 遺物実測図(2)

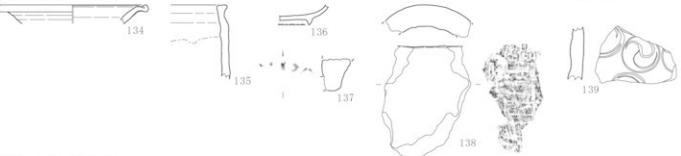


第29図 遺物実測図(3)

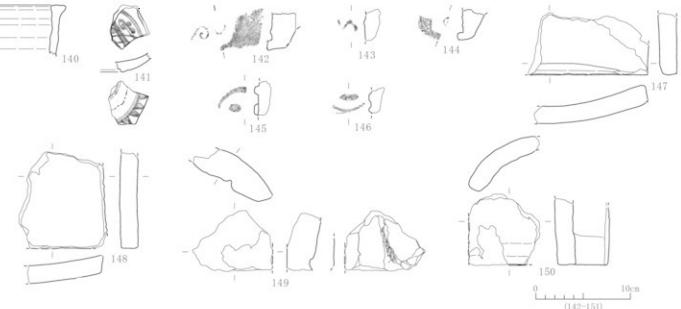
C10トレンチⅢ層(128-133)



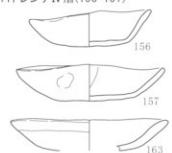
C10トレンチⅡ・Ⅲ層(134-139)



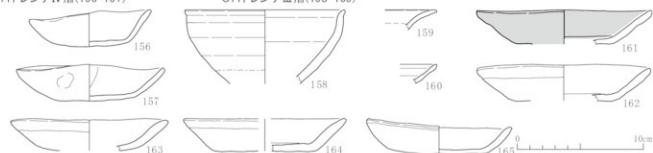
C10トレンチⅠ層(140-155)



C11トレンチⅣ層(156-157)

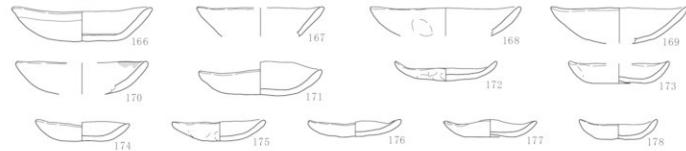


C11トレンチⅢ層(158-165)

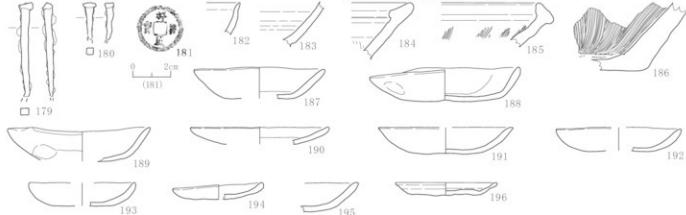


第30図 遺物実測図(4)

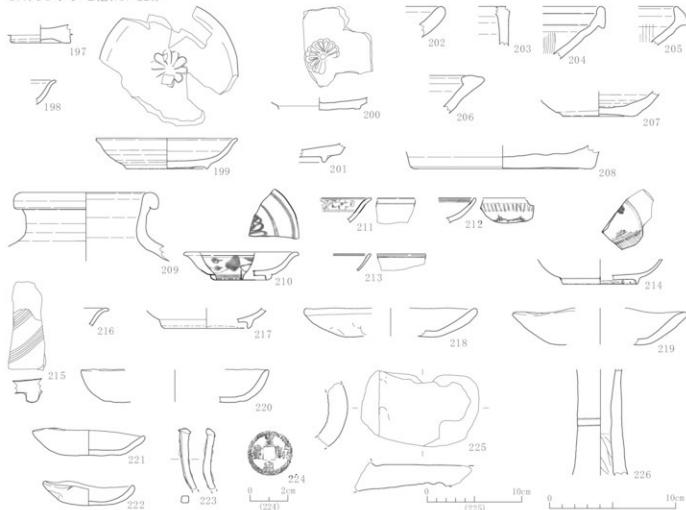
C11トレンチⅢ層(166-183)



C11トレンチ I or IV層(184-196)

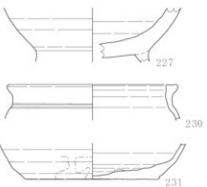


C11トレンチ I・II層(197-226)

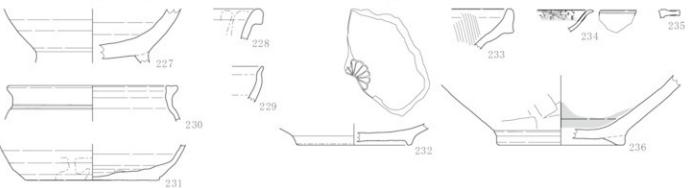


第31図 遺物実測図(5)

C11トレンチ I・II層(227-231)



C11トレンチ I 層(232-236)



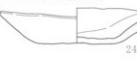
F3トレンチ I 層(237-241)



F4トレンチ V 層(242-246)



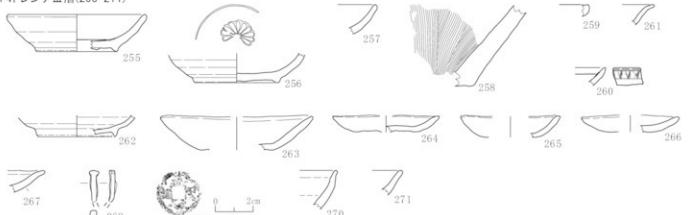
F4トレンチ Pit層(247)



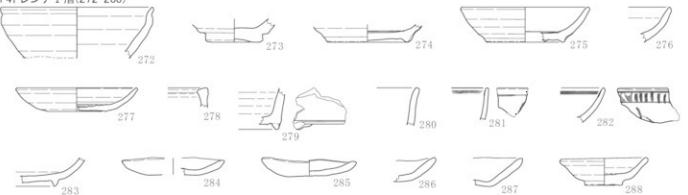
F4トレンチ IV 層(248-254)



F4トレンチ III層(255-271)



F4トレンチ I 層(272-288)



第32図 遺物実測図(6)

規格番号	トレンチ	被覆	種類	2種	分類	1種	部品	直径	その他法量	内面	外面	備考
1 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	(9.6)	-	-	-	-	方向ナジ	-	-
2 B3D	VI	土側鉄板	無	-	-	-	-	-	-	高台付付バッフルアクリロ	-	-
3 B3D	IV	土側鉄板	無	-	-	-	-	-	-	鏡面	鏡面	内面使用鏡
4 B3D	III	土側鉄板	無	C2類	第3~4段階	-	-	-	-	鏡面	鏡面	-
5 B3D	III	土側鉄板	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6 B3D	III	陶器(普通)	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7 B3D	III	瓦	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8 B3D	III	瓦	瓦	-	-	-	-	-	-	厚S2.1	-	-
9 B3D	III	瓦	瓦	-	-	-	-	-	-	厚S2.1	-	-
10 B3D	III	瓦	瓦	-	-	-	-	-	-	厚S2.1	-	-
11 B3D	III	陶器(通常)	無	-	-	-	-	-	-	厚S2.1	-	-
12 B3D	H-III	陶器(大屋根)	瓦	-	-	-	-	-	-	無地	鏡面	地鏡
13 B3D	H-III	陶器(中屋根)	瓦	-	-	-	-	-	-	無地	鏡面	地鏡
14 B3D	H-III	陶器(中屋根)	瓦	C群	-	-	-	-	-	無地	鏡面	地鏡
15 B3D	H-III	陶器(中屋根)	瓦	-	-	-	-	-	-	無地	鏡面	地鏡
16 B3D	I	陶器(人型)	無	B2類	第3段階	10.2	3.0	5.6	灰釉	灰釉	灰釉	一次被熱
17 B3D	I	陶器(人型)	無	B2類	第1~2段階	-	-	5.0	灰釉	灰釉+薄い鏡面	鏡面	-
18 B3D	I	陶器(人型)	無	C2類	第3~4段階	-	-	-	鏡面	鏡面	-	-
19 B3D	I	陶器(人型)	無	C2類	第3~4段階	-	-	14.0	灰釉	濃い鏡面	-	-
20 B3D	I	陶器(人型)	無	C2類	第3段階	-	-	-	鏡面	鏡面	-	-
21 B3D	I	陶器(人型)	無	C2類	第3段階	-	-	-	鏡面	鏡面	-	-
22 B3D	I	陶器(人型)	瓦	瓦	第1段階	(7.0)	-	-	灰釉	灰釉	灰釉	-
23 B3D	I	陶器(中屋)	瓦	瓦	小柄	-	-	-	灰釉	灰釉	灰釉	-
24 B3D	I	土側鉄板	無	B2類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
25 B3D	I	土側鉄板	無	B2類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
26 B3D	I	土側鉄板	無	B2類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
27 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	(0.4)	2.6	-	-	方向ナジ	-	-	-
28 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	(0.6)	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
29 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	(0.6)	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
30 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	7.4	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
31 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	6.8	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
32 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	6.6	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
33 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	-	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
34 B3D	I	土側鉄板	無	C2類	(5.0)	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
35 B3D	I	瓦	瓦	-	-	-	-	-	厚S2.5	-	-	-
36 B3D	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	第IV期	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
37 B3D	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	第V期	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
38 B3D	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	第VI期	-	-	-	灰釉	灰釉	灰釉	-
39 B3D	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	第VII期	-	-	-	灰釉	灰釉	灰釉	-
40 B3D	I	陶器(通常)	瓦	瓦	第1~2期	(5.0)	15.6	(14.2)	鏡面	鏡面	鏡面	-
41 B3D	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	人窓口	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
42 C8B	III	陶器(倒壁?)	瓦	-	-	-	-	-	不明	不明	不明	一次被熱
43 C8B	I	土側鉄板	手水鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	瓦冠装
44 C8B	I	陶器品	瓦	-	-	-	-	-	長S6.0~幅6.5	-	-	-
45 C8B	I	陶器品	瓦	-	-	-	-	-	長S6.3~幅6.4	-	-	-
46 C8B	I	土	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	小窓2面に現存・焼け跡
47 C8B	I	土	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	希日既存
48 C8B	I	土	瓦	-	-	-	-	-	厚S6.0	-	-	2015年分けて使ひ
49 C8B	I	土側鉄板(倒壁形)	瓦	瓦	第VII期	-	-	3.4	-	-	-	-
50 C8B	H?	陶器(人型)	瓦	瓦	第1段階	-	-	-	灰釉	灰釉	灰釉	-
51 C8B	H?	土側鉄板	瓦	C2類	-	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
52 C8B	H?	土側鉄板	瓦	C2類	-	-	-	-	方向ナジ	-	-	タール痕
53 C8B	I	陶器(人型)	瓦	瓦	第3段階	-	-	3.5	鏡面	鏡面+鏡面	内反高台	-
54 C8B	I	陶器(人型)	瓦	瓦	第2~3段階	-	-	(1.0)	灰釉	灰釉	灰釉	強い・次被熱
55 C8B	I	土側鉄板	手水鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	次被熱
56 C8B	I	組合(中屋)	瓦	瓦	小柄	-	-	-	-	-	-	-
57 C8B	I	組合(中屋)	瓦	瓦	C群	-	-	(3.2)	-	-	-	-
58 C8B	I	組合(中屋)	瓦	瓦	大皿	-	-	-	-	-	-	-
59 C8B	I	土側鉄板	手水鉢	B2~4類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
60 C8B	I	土側鉄板	手水鉢	C2類	-	-	-	-	方向ナジ	-	-	タール痕
61 C8B	I	土側鉄板	手水鉢	C2類	-	-	-	-	方向ナジ	-	-	-
62 C8B	I	陶器品	瓦	-	-	-	-	-	長S7.0~幅6.7	-	-	-
63 C8B	I	瓦	手瓦	-	-	-	-	-	厚S2.3	-	-	-
64 C8B	I	壁土	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	希日既存・陶を巻いた板材・痕既存
65 C8B	I	壁土	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-
66 C8B	I	壁土	瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	板の既存
67 C8B	I	陶器(立彫り)	瓦	瓦	第VII期	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
68 C9B-1	H-III	土側鉄板	瓦	B2類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
69 C9B-1	I	陶器(人型)	瓦	瓦	第1段階	-	-	4.2	灰釉	灰釉	灰釉	-
70 C9B-2	H-III	陶器(人型)	瓦	瓦	第2段階	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
71 C9B-2	H-III	陶器(人型)	瓦	瓦	第3段階	-	-	-	鏡面	鏡面	鏡面	-
72 C9B-2	H-III	陶器(人型)	瓦	瓦	第4段階	-	-	-	ヨコナジ	-	-	タール痕
73 C9B-2	H-III	土側鉄板	瓦	C2類	(7.2)	1.6	-	-	ヨコナジ	-	-	-
74 C9B-2	H-III	土側鉄板	瓦	C2類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
75 C9B-2	H-III	陶器品	瓦	-	-	-	-	-	長S2.8~幅0.4	-	-	-
76 C9B-2	H-III	山側鉄板(倒壁形)	瓦	E型式	-	-	-	-	-	-	-	-
77 C9B-2	I	土側鉄板	瓦	B2~4類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-
78 C9B-2	I	土側鉄板	瓦	B2~4類	-	-	-	-	ヨコナジ	-	-	-

第3表 遺物観察表(1)

遺物番号	トレンチ	層位	種類	計種	分類	T1付	認高	直径	その他法量	内面	外曲	備考
79 (C9-2	I	土師器地	瓶	B2類	—	—	—	—	ヨコナダ	—	—	
80 (C9-2	I	土師器地	瓶	C2類	—	—	—	—	方向ナダ	—	—	
81 (C9-2	I	土師器地	瓶	C2類	—	—	—	—	方向ナダ	—	—	
82 (C9-2	I	土師器地	瓶	C2類?	0.60	2.4	—	—	方向ナダ?	—	—	
83 (C9-2	I	陶製品	瓦質	東水道質	—	—	—	—	—	—	—	
84 (C9-3	IV	土師器地	瓶	?	—	—	—	—	不明	—	—	
85 (C9-3	III?~5	土師器地	瓶	B2類?	(7.6)	1.6	—	—	ヨコナダ?	—	—	
86 (C9-3	III?~5	土師器地	瓶	?	—	—	—	—	—	—	—	
87 (C9-3	III?~5	土師器地	瓶	?	—	—	—	—	ヨコナダ?	—	—	
88 (C9-3	III?~5	土師器(中国)	白磁瓶	C群	—	—	—	—	ヨコナダ	—	—	
89 (C9-3	III?~5	土師器地	瓶	B2類?M類?	—	—	—	—	ヨコナダ	—	—	
90 (C9-3	III?~5	土師器地	瓶	B2~3類	—	—	—	—	ヨコナダ	—	—	
91 (C9-3	III?~5	土師器地	陶製品	瓦質	—	—	—	—	ヨコナダ?	—	—	
92 (C9-3	III?~5	土師器地	陶製品	瓦質	—	—	—	—	—	—	—	
93 (C9-3	III?~5	土師器地	陶製品	瓦質	—	—	—	—	—	—	—	
94 (C9-3	III?~5	土師器地	陶製品	瓦質	—	—	—	—	—	—	—	
95 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白土器	—	—	5.5	—	—	—	—	
96 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C群	—	—	3.6	—	—	—	—	
97 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C2類	(7.2)	1.8	—	—	方向ナダ	—	—	
98 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C2類	—	—	—	—	方向ナダ	—	—	
99 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C2類	—	—	—	—	方向ナダ	—	—	
100 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	茶葉	—	—	—	—	—	—	—	
101 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	大日茶碗	第3回輪	—	—	—	鉢輪	鉢輪+薄い鉢輪	内反高台	
102 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	A類	第2回輪	—	—	—	灰輪	—	—	
103 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	第3回輪	—	—	—	灰輪	—	—	
104 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	第2回輪	—	—	—	鉢輪	—	—	
105 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	第2回輪	0.60	2.3	0.60	無輪	—	—	
106 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	(0.60)	—	—	—	鉢輪	—	—	
107 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C群	—	—	—	—	—	—	—	
108 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	C群	—	—	—	—	—	—	
109 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	C群	—	—	—	—	—	—	—	
110 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	瓦り皿	—	—	—	—	—	—	—	
111 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白磁盤	10世紀代	11.9	2.4	6.0	—	—	瓶見事・216と同一体?	
112 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白磁盤	10世紀代	—	—	—	—	—	瓶見事	
113 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	青磁接着盤	10世紀代	—	—	(5.0)	—	—	—	
114 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白磁盤	C群	—	—	—	—	—	—	
115 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白磁盤	C群	—	—	—	—	—	—	
116 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	白磁盤	C群	—	—	—	—	—	—	
117 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	大日茶碗	—	—	—	—	鉢輪	鉢輪+脚立型の		
118 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	小皿	10世紀代	—	—	—	鉢輪	鉢輪+脚立		
119 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	脚丸瓦	1類	—	—	—	—	—	—	
120 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	脚丸瓦	—	—	—	—	鉢輪	—		
121 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	脚丸瓦	—	—	—	—	鉢輪	—		
122 (C9-4	I	山茶碗(束口型)	碗	大日茶碗	第3回輪	—	—	—	鉢輪	鉢輪+薄い鉢輪		
123 (C9-62	I	瓦	瓦	瓦	—	—	—	—	鉢輪	—	—	
124 (C9-7	III?~5	土師器地	瓶	C類?	—	—	—	—	方向ナダ	—	—	
125 (C9-7	III?~5	土師器地	瓶	瓦付瓶	—	—	—	—	—	—	—	
126 (C9-7	III?~5	土師器地	瓶	C類	—	—	—	—	—	—	—	
127 (C9-7	III?~5	土師器地	瓶	瓦付瓶	—	—	—	—	—	—	—	
128 (C9-7	III?~5	土師器地	瓶	瓦付瓶	—	—	—	—	—	—	—	
129 (C10	I	山茶碗(束口型)	碗	利	第2~3回輪	—	—	—	鉢輪	—	—	
130 (C10	I	山茶碗(束口型)	碗	利	—	—	—	—	鉢輪	—	—	
131 (C10	I	山茶碗(束口型)	碗	利	—	—	—	—	鉢輪	—	—	
132 (C10	I	山茶碗(束口型)	碗	利	—	—	—	—	鉢輪	鉢輪+脚立型の		
133 (C10	I	山茶碗(束口型)	碗	利	—	—	—	—	鉢輪	—	—	
134 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	縁盤	第4回輪	(11.2)	—	—	灰輪	—	—	—
135 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	縁盤	第3回輪	—	—	—	上半輪	—	—	
136 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	白磁盤	C群	—	—	—	—	—	—	
137 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	平瓦	A類	—	—	—	—	—	—	
138 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	—	—	—	—	—	—	—	
139 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	中1~2回	—	—	—	—	—	—	
140 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	第3~4回輪	—	—	—	灰輪	—	—	
141 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	瓦付	E群	—	—	灰輪	—	—	
142 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
143 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
144 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
145 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
146 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
147 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
148 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
149 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
150 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
151 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦	利	—	—	—	—	—	—	
152 (C10	H~III	陶製品	瓦質	瓦質	東水道質	—	—	—	—	—	—	
153 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦質	瓦質	—	—	—	鉢輪	—	—	
154 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦質	瓦質	—	—	—	灰輪	—	—	
155 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦質	瓦質	—	—	—	鉢輪	—	—	
156 (C10	H~III	陶器(人頭)	盆	瓦質	瓦質	—	—	—	灰輪	—	—	

第4表 遺物観察表 (2)

規範番号	トレンチ	層位	種類	計種	分類	1往復	踏高	踏幅	その他法量	内面	外面	備考	
157 C11	IV	土師瓦瓶	瓶	B2+類	11.6	2.8	-	-	ヨコナラブ	-	-		
158 C11	III	陶器(火薬)	火薬系罐	1往復	(12.6)	-	-	-	鉄輪	鉄輪+濃い緑釉	-	一次焼熱	
159 C11	III	陶器(火薬)	火薬系罐	1往復	(12.6)	-	-	-	火薬	火薬	-		
160 C11	III	陶器(火薬)	火薬系罐	2往復	-	-	-	-	無輪	無輪	-		
161 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(13.7)	2.7	-	-	ヨコナラブ	-	-	内外面全面ターナー	
162 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(13.6)	2.8	-	-	ヨコナラブ	-	-		
163 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(12.2)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
164 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(12.2)	2.6	-	-	ヨコナラブ	-	-		
165 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(12.2)	2.5	-	-	ヨコナラブ	-	-		
166 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	10.8	2.5	-	-	ヨコナラブ	-	-		
167 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(10.6)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
168 C11	III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(11.6)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
169 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	10.8	-	-	-	カタナラブ	-	-		
170 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	(10.6)	-	-	-	カタナラブ	-	-		
171 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	10.6	3.3	-	-	カタナラブ	-	-		
172 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	(7.8)	1.3	-	-	カタナラブ	-	-		
173 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	(7.8)	-	-	-	カタナラブ	-	-		
174 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	7.4	1.6	-	-	カタナラブ	-	-		
175 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	7.2	1.5	-	-	カタナラブ	-	-		
176 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	7.0	1.5	-	-	カタナラブ	-	-		
177 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	(7.2)	1.2	-	-	カタナラブ	-	-		
178 C11	III	土師瓦瓶	瓶	C2類	(6.0)	1.4	-	-	カタナラブ	-	-		
179 C11	III	鉢製品	鉢	-	-	-	-	長径7.4-幅0.6	-	-	-		
180 C11	III	鉢製品	鉢	-	-	-	-	長径2.5-幅0.6	-	-	-		
181 C11	III	陶器	瓶	-	-	-	幅2.5	-	-	-	-		
182 C11	III	陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-		
183 C11	III	陶器(火薬)	火薬系罐	1往復	-	-	-	-	鉄輪	鉄輪	-	表面戸輪か?	
184 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	第3往復後半	-	-	-	-	鉄輪	鉄輪	-		
185 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	第3往復	-	-	-	-	鉄輪	鉄輪	-		
186 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	第3-4往復	-	-	-	-	鉄輪	鉄輪	-		
187 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	B2+類	(0.6)	2.5	-	-	ヨコナラブ	-	-		
188 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	B2+類	11.8	2.4	-	-	ヨコナラブ	-	-		
189 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	B2+類	(11.2)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
190 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	B2類	10.8	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
191 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薬系罐	B2類	(10.4)	2.3	-	-	ヨコナラブ	-	-		
192 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薌	C2類	(9.8)	1.8	-	-	カタナラブ	-	-		
193 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薌	C2類	(8.5)	1.9	-	-	カタナラブ	-	-		
194 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薌	C2類	7.9	1.3	-	-	カタナラブ	-	-		
195 C11	I or IV	陶器(火薬)	火薌	C2類	-	-	-	-	カタナラブ	-	-		
196 C11	II or IV	山形罐(朱漆型)	瓶	明和	7.9	1.3	5.2	-	-	-	-		
197 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	第3往復後半	-	-	4.5	-	鉄輪	鉄輪+濃い緑釉	-	内反高台	
198 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	第1往復	-	-	-	-	火輪	火輪	-		
199 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	第1往復	11.1	2.4	6.4	-	火輪	火輪	-	一次焼熱	
200 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	1-2往復	-	-	-	火輪	火輪	-	一次焼熱	
201 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	2-3往復	-	-	-	火輪	火輪	-		
202 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	3往復	-	-	-	火輪	火輪	-		
203 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	-		
204 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	-		
205 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	-		
206 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	-		
207 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	第1-2往復	-	-	5.6	鉄輪	鉄輪	-		
208 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	第2-3往復	-	-	(14.0)	鉄輪	鉄輪	-		
209 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐丸瓶	火薬系罐	(10.2)	-	-	鉄輪	鉄輪	-		
210 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	(6.6)	2.2	(4.2)	-	-	-	一次焼熱	
211 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-		
212 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-		
213 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-		
214 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	(5.8)	-	-	-	一次焼熱	
215 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-	瓶見型(11)と同一個体?	
216 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-		
217 C11	I - III	陶器(中型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	-	-	-		
218 C11	I - III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	-	-	0.6	-	ヨコナラブ	-	-		
219 C11	I - III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(13.4)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
220 C11	I - III	土師瓦瓶	瓶	B2+類	(14.6)	-	-	-	ヨコナラブ	-	-		
221 C11	I - III	土師瓦瓶	瓶	C2類	8.7	1.9	-	-	カタナラブ	-	-		
222 C11	I - III	土師瓦瓶	瓶	C2類	7.0	1.6	-	-	カタナラブ	-	-		
223 C11	I - III	陶器品	瓶	-	-	-	-	長径14-幅0.6	-	-	-		
224 C11	I - III	陶器品	瓶	瓶	朱漆硝	-	-	0.4	-	-	-		
225 C11	I - III	瓦	瓦	瓦	瓦	-	-	-	厚さ2.0	-	-	-	
226 C11	I - III	重油器	重油器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
227 C11	I - III	山形罐(朱漆型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	無輪	無輪	-		
228 C11	I - III	山形罐(朱漆型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	火輪(火輪灰)	火輪	-		
229 C11	I - III	山形罐(朱漆型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	-		
230 C11	I - III	山形罐(朱漆型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	(13.0)	-	-	火輪	火輪	-		
231 C11	I - III	山形罐(朱漆型)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	10.6	火輪	火輪	火輪(火輪灰)以下加熱		
232 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	0.6	火輪	火輪	火輪(火輪灰)以下加熱		
233 C11	I - III	陶器(火薬)	火薬系罐	火薬系罐	火薬系罐	-	-	-	火輪	火輪	火輪		
234 C11	I - III	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	-	-	-		

第5表 遺物観察表(3)

図版番号	トレンチ	層位	種類	計種	分類	T(性)	認高	直径	その他法量	内面	外曲	備考
235 C11	I	上断部	羽垂	-	-	-	-	-	-	-	-	-
236 C11	I	上断部(左側)	右1棘	1095点	-	-	9.8	-	-	-	-	-
237 F3	I	陶器(人型)	白磁	811個	-	-	-	-	-	灰釉	灰釉	-
238 F3	I	陶器(人型)	埴輪	第3D前後半	-	-	-	-	-	埴輪	埴輪	-
239 F3	I	土断部	瓶	C2類	-	-	-	-	-	方向ナダ	-	-
240 F3	I	陶器(人型)	打削風	第8~9-1期	-	-	-	-	-	鉄錐	口縁部鉄錐	-
241 F3	I	陶器(人型)	木柄	近世?	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
242 F3	I	陶器(人型)	陶灰瓦	打削風	-	-	-	-	-	灰釉	灰釉	-
243 F4	V	土断部	瓶	第1~2D前後	0.29	-	-	-	-	灰釉	灰釉(高台内無輪)	-
244 F4	V	土断部	瓶	B2~類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ
245 F4	V	土断部	瓶	B2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
246 F4	V	土断部	瓶	C2類	(7.8)	-	-	-	-	ヨコナダ	-	-
247 F4	F4	土断部	瓶	B2~類(C類)	12.0	2.6	-	-	-	不規	-	-
248 F4	V	陶器(人型)	白磁	第3D前後半	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐+薄い鉄錐	-
249 F4	V	陶器(人型)	白磁	打削?	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
250 F4	IV	土断部	瓶	B2類?	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ
251 F4	IV	土断部	瓶	B2~類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	口縁部ヨコナダ	-
252 F4	IV	土断部	瓶	C2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
253 F4	IV	土断部	瓶	C2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
254 F4	IV	土断部	瓶	C2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ
255 F4	III	陶器(人型)	白磁	第2D前	(10.8)	2.0	0.0	-	-	灰釉	灰釉	-
256 F4	III	陶器(人型)	白磁	第2D前	-	-	6.5	-	-	灰釉	灰釉	-
257 F4	III	陶器(人型)	白磁	第2D前	-	-	-	-	-	灰釉	灰釉	-
258 F4	III	陶器(人型)	埴輪	第3~4D前	-	-	-	-	-	埴輪	埴輪	-
259 F4	III	陶器(人型)	白磁	近世?	-	-	-	-	-	無輪	無輪	-
260 F4	III	陶器(人型)	白磁	打削?	-	-	-	-	-	無輪	無輪	-
261 F4	III	細部(中段)	白磁	C類	-	-	-	-	-	-	-	一次被燃
262 F4	III	細部(中段)	白磁	C類	-	-	0.0	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
263 F4	III	土断部	白磁	B2~類	(11.8)	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
264 F4	III	土断部	白磁	C2類	(0.2)	1.3	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
265 F4	III	土断部	白磁	C2類	(7.8)	2.0	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
266 F4	III	土断部	白磁	C2類	(0.6)	1.3	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
267 F4	III	土断部	白磁	C2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
268 F4	III	紡製品	糸	-	-	-	-	-	糸長2.5~4m(0.5	-	-	-
269 F4	III	紡製品	糸質	糸質	木柄	-	-	-	糸長2.4	-	-	-
270 F4	III	陶器(小窓)	C類	陶IV層	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
271 F4	III	陶器(小窓)	C類	陶V層	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
272 F4	I	陶器(人型)	大口茶碗	第3D前後半	12.0	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐+薄い鉄錐	-
273 F4	I	陶器(人型)	大口茶碗	第3D前	-	(4.2)	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
274 F4	I	陶器(人型)	大口茶碗	第2D前	-	-	6.3	-	-	鉄錐	鉄錐	-
275 F4	I	陶器(人型)	大口茶碗	第2D前	(10.0)	2.0	0.0	-	-	鉄錐	鉄錐	-
276 F4	I	陶器(人型)	大口茶碗	第3D前後半	12.0	2.0	0.0	-	-	鉄錐	鉄錐	-
277 F4	I	陶器(人型)	白磁	打削?	(0.4)	1.9	0.0	-	-	無輪	無輪	-
278 F4	I	陶器(人型)	発形骨付	第1~3D前	-	-	-	-	-	灰釉	灰釉	-
279 F4	I	陶器(人型)	発形骨付	第1~3D前	-	-	-	-	-	灰釉	灰釉	-
280 F4	I	陶器(人型)	建水	第3D前後半	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	鉄錐
281 F4	I	細部(中段)	金付瓶	打削?	-	-	-	-	-	鉄錐	鉄錐	-
282 F4	I	細部(中段)	金付瓶	C類	-	-	-	-	-	-	-	二次被燃
283 F4	I	土断部	白磁	打削?	-	-	-	-	-	-	-	-
284 F4	I	土断部	白磁	C2類	(7.8)	1.3	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
285 F4	I	土断部	白磁	C2類	7.1	1.4	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
286 F4	I	土断部	白磁	C2類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
287 F4	I	土断部	白磁	B2~類	-	-	-	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	-
288 F4	I	山茶窓(左側)	瓶	595点(5)	6.6	2.5	2.9	-	-	-	-	-

第6表 遺物観察表(4)

トピック 遺物分類 遺物名	大 陶 器 製 品	染 付	青 白 磁	白 磁 陶 器	中 國 制 陶 器	胡 人 制 陶 器	土 器 皿	黑 陶 器	灰 陶 器	山 系 陶 器 (灰陶 型)	古 陶 器 製 品	土 器 器	瓦 器	鐵 製 品	銅 製 品	石 器 製 品	土 器 製 品	瓦 器	雙 土	不明 器	合 計		
B20 I		19	1				62				1	3	1	13			31	10	6	147			
B20 II・III	1	1		3			5				1				1			4		14			
B20 III		2					4				4				24			1		35			
B20 IV							1												1	2			
C8 I	12	4					22			1	1		2	1	1	1	1,100	1	2	1,148			
C8 II?	2						4						5				18	1		30			
C8 III		1					1	1					11	1	2		227			244			
C9 I	10		1				20				3	5		1		1	13	3	1	58			
C9 III-1							1												1				
C9 III?		2										1								3			
C9-1 I	5	1	2	1			19	1			2					1	7	4		43			
C9-1 III-1	I						5													6			
C9-2 I							87					12	1			32				132			
C9-2 III-1	3						20	1	4			4								32			
C9-3 I	6	1					116	2	3	10					5	6	2		151				
C9-3 III-1	1		2				27					1	2							33			
C9-3 III-3,4	1						11													12			
C9-3 III-5							2													2			
C9-3 IV							4													4			
C9-4 I	47	10	3	7	2		130				4	2	15			34	6	10		270			
C9-4 III-1	1	1	1				18				1		1		1	1	1			26			
C9-5 I							10					1		13						24			
C9-5 I-II							1													1			
C9-5 III-1																				0			
C9-6,7 I	1		1				9			1				1						13			
C9-7 I							5													5			
C9-7 III-1							2													2			
C10 I	23	12	4	1			29		1	3			1		338	2	24		438				
C10 II・III	3	1	1				2			2			17	2	1					29			
C10 III		9					2			1			33							45			
C11 I	6	2					33	1	3	1	2	1				10			59				
C11 I-II	70	16	2	6			373	1	7	11	2	5	2	8	3	26	1		733				
C11 I-IV	4						58		1										63				
C11 III	12		1				565		1	2		31	1	1		5			559				
C11 IV							8												8				
F3 I	9						45	1	1	2	1	4	6	3	1	14			87				
F4 I	26	6	2				72	1	3			1			2	7	2		122				
F4 III	24	2	2	4			66				2	1	2		1	3			107				
F4 IV	8	1					29			7	1	1							47				
F4 V	4						26	1	1	1	3								36				
F4 Ptr							1												1				
合計	308	64	10	31	2	1	2,035	6	0	8	29	35	17	39	1	96	12	3	2,512	1,431	122	8	4,772

第7表 遺物集計表

第5章 自然科学分析

第1節 池泉遺構 S R 2・S R 3 の珪藻化石群集

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

B地区の池泉遺構 S R 2 およびC地区の池泉遺構 S R 3 の堆積物中の珪藻化石を調べ、堆積環境について検討した。なお、一部の試料については花粉分析も行われている（花粉分析の項を参照）。また、S R 3 から検出された炭化材については樹種同定が行われている（炭化材樹種同定の項を参照）。

2. 試料と方法

試料は、S R 2 の堆積物2点と S R 3 の堆積物31点である（第8表）。

分類No.	トレンチ	遺構	堆積物の特徴			分類No.	トレンチ	遺構	堆積物の特徴		
			C 8	S R 3	C 8				S R 3	C 8	S R 3
1	C 8	黒褐色 (2, 5V3/1) 糜混じり砂質粘土	18			オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	18	C 8	オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	18	
2		オリーブ褐色 (2, 5V4/6) 糜混じり砂質粘土	19			糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	19		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	19	
3		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	20			オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	20		オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	20	
4		黒褐色 (2, 5V3/2) 糜混じり砂質粘土	21			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	21		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	21	
5		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/2) 糜混じり砂質粘土	22			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	22		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	22	
6		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	23			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	23		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	23	
7		オリーブ褐色 (2, 5V4/4) 糜混じり砂質粘土	24			糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 粘土質砂	24		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 粘土質砂	24	
8		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	25			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	25		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	25	
9		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/4) 糜混じり砂質粘土	26			糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 粘土質砂	26		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質砂	26	
10		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土	27			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	27		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	27	
11		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/2) 粘土質細砂	28			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	28		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	28	
12		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり砂質粘土	29			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	29		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	29	
13		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/2) 糜混じり砂質粘土	30			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質砂	30		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質砂	30	
14		糊灰黄色 (2, 5V4/4) 糜混じり砂質粘土	31			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質砂	31		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質砂	31	
15		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 糜混じり粘土	32			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質粘土	32		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/3) 粘土質粘土	32	
16		糊褐色 (2, 5V3/2) 糜混じり砂質粘土	33			糊オリーブ褐色 (2, 5V4/4) 粘土質粘土	33		糊オリーブ褐色 (2, 5V4/4) 粘土質粘土	33	
17		糊オリーブ褐色 (2, 5V3/3) 糜混じり砂質粘土									

第8表 硅藻分析一覧

試料に対して以下の処理を行い、珪藻分析用ブレバートを作製した。

(1) 各試料をビーカーに移しで30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程度してから上澄み液を除去し、細胞のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 淀漏残渣を遠心管に回収し、マイクロビットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入してブレバートを作製した。ブレバートは生物顕微鏡を用いて600~1200倍で観察し、珪藻化石を同定・計数した。なお、珪藻化石が200個に達しない試料は、ブレバート全面を観察した。

3. 硅藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

【上流性河川指標種群（J）】：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことが多い。

【中～下流性河川指標種群（K）】：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種に

は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

〔最下流性河川指標種群（L）〕：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊の種でも生育できるようになるためである。

〔湖沼浮遊生指標種群（M）〕：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

〔湖沼沼澤湿地指標種群（N）〕：湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼沢湿地付着生指標種群（O）〕：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群（P）〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群（Q）〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4. 硅藻化石の特徴と堆積環境

33試料から検出された珪藻化石は、海水種2分類群2属1種、淡水種116分類群28属97種3変種であった。これらの珪藻化石から、海水種においてI環境指標種群（外洋指標種群（A））、淡水種において5環境指標種群（中～下流性河川指標種群（K）、湖沼浮遊生指標種群（M）、湖沼沼澤湿地指標種群（N）、沼澤湿地付着生指標種群（O）、陸域指標種群（Q））が認められた（第9～11表、第34図）。

以下に、各遺構堆積物中の珪藻化石群集の特徴について述べる。

〔池泉遺構S R 3〕

検出された珪藻化石の完形殻の出現率は1.5～47.9%であるが、小型からなる陸域指標種群（Q）以外は、完形殻の半分以下の破片が多い。また、堆積物1g中の珪藻殻数が少ない試料が多く、 $2.6 \times 103 \sim 1.4 \times 105$ 個である。なお、No. 4とNo. 5では、珪藻化石が50個未満であった。

環境指標種群は、主に陸域指標種群（Q）が多く出現し、沼澤湿地付着生指標種群（O）を作り。その他に、中～下流性河川指標種群（K）が検出された。

出現傾向は、分析No. 1、No. 3、No. 6、No. 16において陸域指標種群（Q）が50%を超えて検出され、No. 2、No. 8、No. 11、No. 13、No. 20、No. 23、No. 24、No. 30においても30%以上検出されている。これらの試料の多くは、遺構の縁辺部から採取されており（第33図）、遺構周辺部はジメジメとした陸域環境であったと推定される。

一方、No. 20やNo. 21およびNo. 30では、中～下流性河川指標種群（K）がやや多く検出され、河川の流れ込みを伴う場所であったと考えられる。調査地区は西に開いた谷部であるが、遺構の南西側から流れ込みがあったと推定される。

全体的に、ジメジメとした陸域環境が優勢で、部分的に水域であったと考えられる。なお、池泉遺構S R 2の説明で述べるように、陸域指標種群（Q）以外の珪藻化石は、B20トレンドの池泉遺構S R 2から流入した珪藻化石と考えられ、当時の堆積環境としてはジメジメとした陸域環境がより優勢であった可能性が高い。

〔池泉遺構S R 2〕

検出された珪藻化石の完形殻の出現率は15.7%および22.7%であるが、珪藻化石の遺存状態是非常に良い。また、堆積物1g中の珪藻殻数は、 2.2×105 および 8.3×105 個が多い。

環境指標種群は、沼沢湿地付着生指標種群 (O) が多く出現し、陸域指標種群 (Q) を僅かに伴う。こうした特徴から、沼沢湿地環境であったと推定される。

このSR 2は、SR 3の東側の石垣の一段上の平坦面に位置する遺構である。SR 3で検出された陸域指標種群 (Q) 以外の珪藻化石は、属レベルにおいて共通しており、半分以下の珪藻が大半を占める点からも、SR 2から流入した珪藻化石と考えられる。

5. おわりに

池泉遺構SR 3およびSR 2の堆積物中の珪藻化石を調べた。その結果、SR 3では、全体的にジメジメとした陸域環境が優勢で、部分的に水域であったと推定された。一方、東側の一段上の平坦面に位置するSR 2は、沼沢湿地環境であったと推定された。

なお、SR 3で検出された陸域指標種群 (Q) 以外の珪藻化石は、SR 2から流入した珪藻化石と考えられ、SR 3は、ジメジメとした陸域環境がより優勢であった可能性が高い。

参考・引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

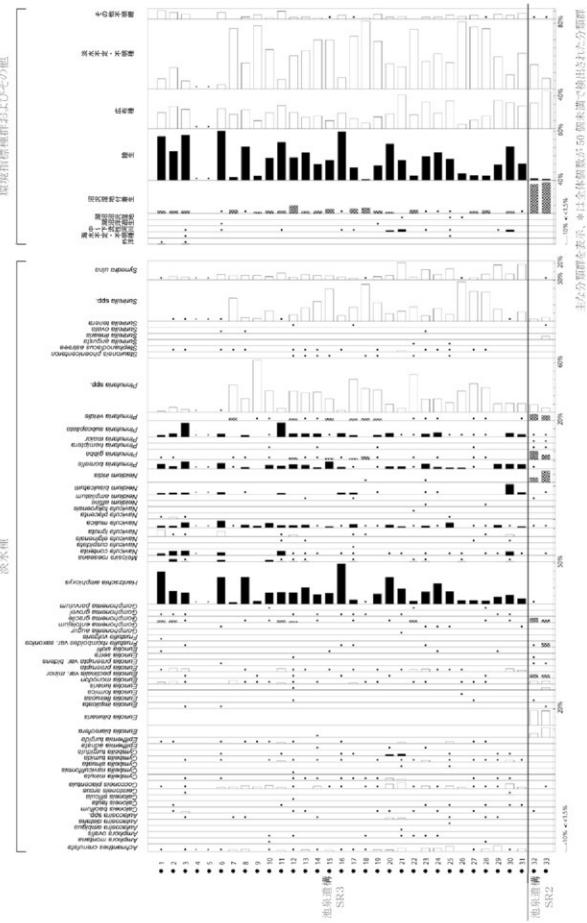


第33図 分析土壤サンプル採取位置図

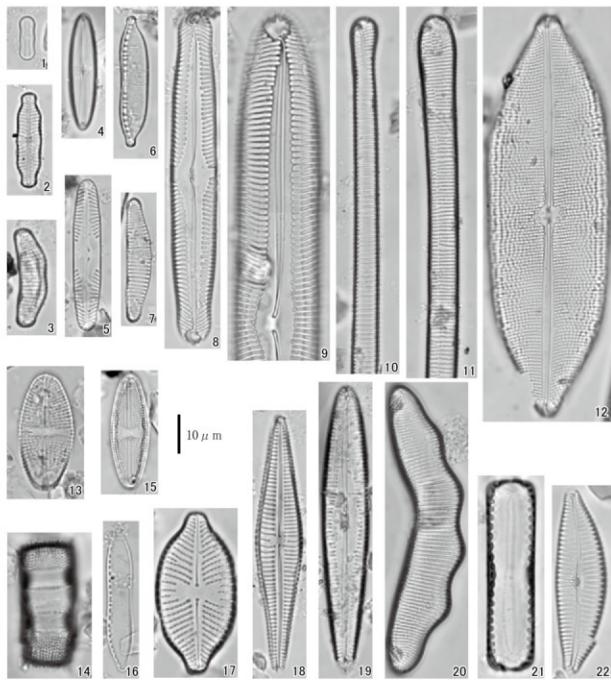
第9表 珊瑚化石產出表(1)

第10表 珊瑚化石產出表(2)

第11表 珊瑚化石產出率(2)



第34図 珪藻化石分布図



堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

- 1.*Navicula contenta* (No.11)
- 2.*Navicula ignota* (No.1)
- 3.*Eunotia praerupta* (No.1)
- 4.*Neidium bisulcatum* (No.2)
- 5.*Pinnularia subcapitata* (No.11)
- 6.*Hantzschia amphioxys* (No.1)
- 7.*Eunotia pectinalis* var. *minor* (No.33)
- 8.*Pinnularia gibba* (No.33)
- 9.*Pinnularia viridis* (No.33)
- 10.*Eunotia bilunaris* (No.33)
- 11.*Eunotia biareofera* (No.33)
- 12.*Neidium iridis* (No.33)
- 13.*Navicula plausibilis* (No.8)
- 14.*Melosira roesiana* (No.6)
- 15.*Navicula mutica* (No.3)
- 16.*Nitzschia parvula* (No.6)
- 17.*Navicula placenta* (No.5)
- 18.*Gomphonema gracile* (No.33)
- 19.*Gomphonema entolejum* (No.6)
- 20.*Eunotia monodon* (No.33)
- 21.*Pinnularia borealis* (No.3)
- 22.*Cymbella turgida* (No.20)

写真図版 1 珪藻化石の顕微鏡写真

第2節 池泉遺構 S R 2・S R 3 の花粉分析

森 将志（パレオ・ラボ）

1.はじめに

C 8 トレンチの池泉遺構 S R 3 および B 20 トレンチの池泉遺構 S R 2 において、花粉分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料の花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている（珪藻分析の項参照）。

2. 試料と方法

分析試料は、計 5 点である（第12表）。No. 13 と No. 14, No. 18, No. 19 が S R 3 の同一層準から、No. 33 は S R 2 で採取された試料であるが、堆積時期はほぼ同時期と考えられている。これらの試料から、次の手順で花粉分析を行った。

試料（湿重量約 3 g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した氯化鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣よりプレラートを作製して行った。プレラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、No. 13 と No. 18 については、試料に含まれる花粉が少なく、複数枚のプレラートを検鏡しても分布図作成に足る樹木花粉数 200 を得るのは難しいと判断されたため、1 枚のプレラートを全面を検鏡するに留めた。また、保存状態の良好な花粉を選んで、単体標本を作製した。図版に載せた分類群ごとの単体標本（PLC. 900～907）は、パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

分析試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 23、草本花粉 15、形態分類のシダ植物胞子 2 の総計 40 である。これらの花粉・胞子の一覧を第13表に、花粉分布図を第35図に示した。分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉および胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、No. 13 と No. 18 については、試料に十分な量の花粉化石が含まれていなかったため、分布図には産出した分類群を*で表示するにとどめた。図および表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源の両方が含まれるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に括して入れてある。

今回の分析試料は、全体的に花粉化石の保存状態が良好ではなく、十分な量の花粉化石が産出したのは No. 14 と No. 19, No. 33 の 3 試料である。No. 14 と No. 19 は同様な花粉組成を示しており、クリ属の産出が最も多く、それぞれ 43% と 63% の産出率である。その他の樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、シノキ属-マテバシイ属などの産出が目立ち、産出率はそれぞれ 11% と 9%、11% と 3%、20% と 10% である。なお、No. 13 と No. 18 もクリ属の産出が最も多く、シノキ属-マテバシイ属とマツ属複維管束亜属がそれに続き、No. 14 と No. 19 と同じような産出傾向がみられる。

No. 33 では、No. 14 と No. 19 に比べるとクリ属の産出が少なく、12% の産出率を示す。一方、マツ属複維管束亜属とニレ属-ケヤキ属の産出が多く、それぞれ 35% と 26% の産出率である。

また、いずれの試料においても草本花粉の産出が少ないが、No. 13とNo. 14、No. 18ではソバ属が、No. 33ではベニバナ属がわずかに産出している。さらに、いずれの試料においてもシダ植物胞子の産出が多い。

4. 考察

まず、同一層準とされるNo. 14とNo. 19の花粉組成を見ると、両試料ともにクリ属が多く産出している。クリ花粉については広域に散布され難く、クリ林の林床に多く堆積する事例が報告されている（吉川、2011）。よって、SR 3におけるクリ属花粉の多産は、試料採取地点のすぐそばにクリの木かクリ林が存在している可能性を示唆していると考えられる。または、二次林要素のマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属の産出が見られるため、池周辺の山斜面や山麓は比較的明るい場所であり、クリやニヨウマツ類、コナラといった陽樹からなる二次林が広がっていたと考えられる。そうした二次林の林内や林縁部にウコギ科の植物が生育していたであろう。さらには、コナラ属アカガシ亜属やシノキ属-マテバシイ属などからなる照葉樹も山の斜面の一部に存在していたと思われる。草本花粉ではソバ属の産出が見られるため、池周辺においてソバ栽培が行われていた可能性があるが、居館内での栽培は考え難く、居館の外部で栽培していたのであろうか。

No. 33では、No. 14とNo. 19と同じくクリ属やマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などの産出が見られるものの、クリ花粉の産出量はNo. 14とNo. 19ほど多くはなく、マツ属複維管束亜属の産出が多い。またNo. 33では、No. 14とNo. 19では産出がほとんど見られなかつたニレ属-ケヤキ属やサワグルミ属-クルミ属などが多く産出している。No. 14やNo. 19、No. 33は同時期の堆積物と考えられているため、No. 33とNo. 14やNo. 19に見られる花粉組成の相違は池周辺のごく近辺の植生の相違を反映している可能性がある。すなわち、SR 2周辺の山斜面にもクリやニヨウマツ類、コナラなどからなる二次林が広がっていたが、クリはSR 3周辺に多く生育しており、SR 2周辺にはニヨウマツ類が優占する二次林が広がっていたと思われる。また、SR 2周辺には、ニレ属-ケヤキ属やサワグルミ属-クルミ属などからなる落葉広葉樹も存在していたと思われる。さらに、栽培植物のベニバナ属の産出が見られるため、SR 2周辺ではベニバナ栽培が行われていた可能性が考えられるが、ソバと同様に居館内での栽培よりも、居館外での栽培が考えられる。

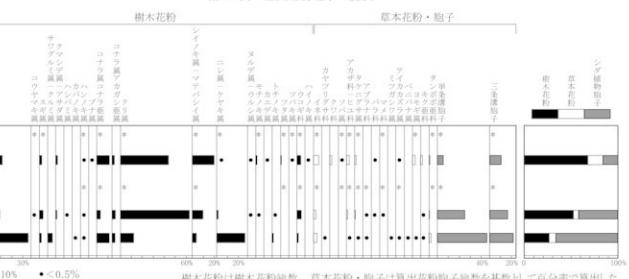
最後にシダ植物胞子について触れておきたい。今回の分析試料は、いずれもシダ植物胞子が多く産出する傾向がある。シダ植物胞子が多産する原因としては、当時の池周辺にシダ植物が多く生育していた可能性が考えられるが、別の見方もある。すなわち、今回の分析試料は全体的に花粉化石の保存状態が良好ではないため、堆積時やその後に風化作用を受けた可能性があり、多くの花粉は分解消失したが、一般的に腐食に対する抵抗力が強いとされる胞子は残存する数が多かった、という可能性である。このように、シダ植物胞子の多産については2つの可能性が考えられるが、可能性を絞り込むのは難しいため、ここではシダ植物胞子が多産したと指摘するに留めておく。

引用文献

吉川昌伸（2011）クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況。植生史研究、18、65-76。

学名	和名	No.13	No.14	No.18	No.19	No.33
樹木						
<i>Pinus</i>	ツガ属	-	-	-	-	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複管束亞属	8	23	5	18	75
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	-	-	1	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	1	5	-	7	4
<i>Pterocarya</i> — <i>Juglans</i>	サワグルミ属—クルミ属	-	-	-	-	9
<i>Carpinus</i> — <i>Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	-	3	-	2	-
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	-	-	-	1	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	-	-	1
<i>Populus</i>	ノコノキ属	1	1	1	1	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	1	-	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ属	10	23	4	6	24
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属カガシ属	-	4	-	6	6
<i>Castanea</i>	クリ属	30	89	13	129	26
<i>Castanopsis</i> — <i>Passiflora</i>	サイノキ属—マテバシイ属	27	40	9	20	8
<i>Ulmus</i> — <i>Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	1	1	-	3	55
<i>Tilia</i> — <i>Toxicodendron</i>	ヌリ属—ウルン属	-	1	-	1	-
<i>Acer</i>	モチノキ属	1	2	-	1	-
<i>Aesculus</i>	ガエデ属	-	1	-	-	-
<i>Parthenocissus</i>	トチノキ属	-	-	-	1	2
<i>Camellia</i>	ツタ属	1	2	2	-	-
<i>Araliaceae</i>	ツバキ属	1	1	-	-	-
<i>Symplocos</i>	ウコギ科	6	7	8	8	2
	ハイノキ属	-	1	-	-	-
Gramineae	イネ科	12	14	4	9	25
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	-	-	-	2
Moraceae	クワ科	-	5	-	-	-
<i>Fagopyrum</i>	シバ科	1	1	1	-	-
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	4	8	3	5	1
Brassicaceae	タブガサ属	7	4	2	2	3
Rosaceae	アブラナ科	-	-	-	1	2
Leguminosae	マメ科	1	-	1	1	-
Menyanthes	ミツガシワ属	-	-	-	-	2
<i>Trachelospermum</i>	ディカカラ属	-	1	1	-	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	-	-	-	-	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	7	-	-	4
<i>Abutilon</i> sp.	キク科	-	5	-	1	1
<i>Lippia</i> florae	タンボボ科	2	3	3	2	16
シダ植物						
monolate type spore	単条溝胞子	67	17	308	99	368
trilate type spore	三条溝胞子	24	32	82	66	177
Arboreal pollen	樹木花粉	88	205	42	205	214
Nonarboreal pollen	草木花粉	29	49	16	22	58
Spores	シダ植物胞子	51	69	390	165	545
Total Pollen&Spores	花粉・孢子総数	208	303	448	352	617
Unknown pollen	不明花粉	-	10	-	-	-

第13表 産出花粉胞子一覧表



樹木花粉は樹木花粉総数、草木花粉・胞子は算出花粉胞子総数を基準として百分率で算出した

＊は樹木花粉 200 個未満の試料について、検出した分類群を示す

第35図 花粉分布図



産出した花粉化石

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| a. コナラ属コナラ亜属 (No.14 PLC.900) | b. ニレ属 - ケヤキ属 (No.33 PLC.901) |
| c. ツク属 (No.18 PLC.902) | d. クリ属 (No.14 PLC.903) |
| e. シノキ属 - マテバシイ属 (No.14 PLC.904) | f. ソバ属 (No.14 PLC.905) |
| g. バラ科 (No.14 PLC.906) | h. ベニバナ属 (No.33 PLC.907) |

写真図版2 産出した花粉化石

第3節 池泉遺構 S R 3出土の炭化材樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. 試料と方法

試料は、S R 3から出土した炭化材5点である。S R 3の時期は、出土遺物より戦国時代である。炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（征目）について、カミソリと手で削断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスッパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

2. 結果

同定の結果、針葉樹のスギが3点と、サワラが2点産出した（第14表・写真図版3）。

(1) スギ *Cryptomeria japonica*(L.f.)D.Don

ギ科 写真図版3 1a-1c(No. 2), 2a-2c(No. 3), 3a-3c(No. 4)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~10列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2) サワラ *Chamaecyparis pisifera*(Siebold et Zucc.)Endl.

ヒノキ科 写真図版3 4a-4c(No. 1), 5a-5c(No. 5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや厚く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1~8列となる。分野壁孔は中型のトウヒ~ヒノキ型で、1分野に普通2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

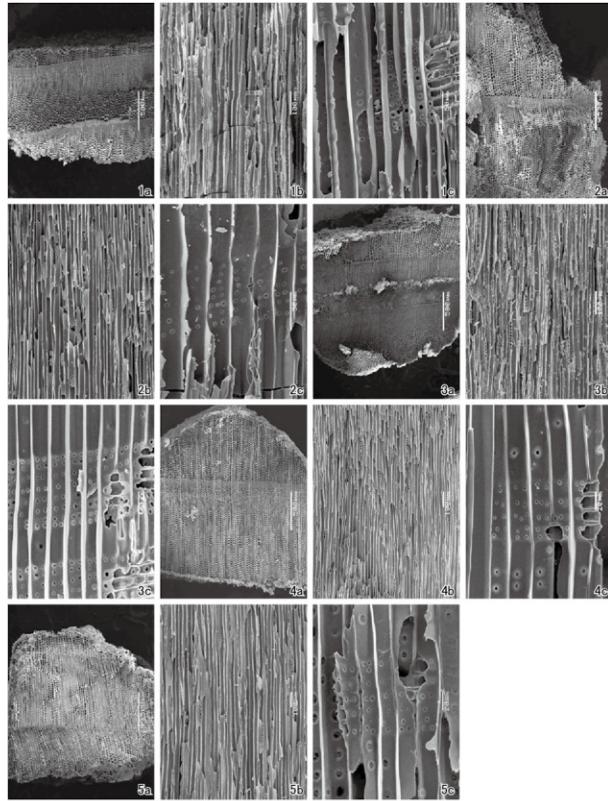
3. 考察

試料はスギが3点とサワラが2点で、肉眼観察によれば、試料No. 5のサワラは材の一部が未炭化であった。スギとサワラは木理通直で真っすぐに生育しやすく、加工性が良い樹種である（伊東ほか, 2011）。なお、岐阜城千畳敷遺跡の3次調査で同時期の井戸遺構の底から出土した桶部材では、サワラやヒノキ属などの針葉樹が最も多くみられた（植田, 2000）。また、鷲山仙道遺跡でも16世紀前葉の井戸遺構から出土した箸や桶部材などにサワラが多くみられ（植田, 2002）、木製品や建築材などにはサワラを主体とした針葉樹が用いされていた。

今回同定を行なった木材の用途はいずれも不明であるが、池遺構から出土した炭化材で、一部未炭化的木材もみられるため、試料は廃棄された焼けた建築材や木製品の残渣の可能性がある。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p、青海社。
植田弥生（2000）岐阜城千畳敷遺跡井戸遺構の樹種同定、岐阜市教育文化振興事業団編「千畳敷III」：189~193、岐阜市教育文化振興事業団。
植田弥生（2002）木製品の樹種同定、岐阜市教育文化振興事業団編「鷲山仙道遺跡」：135~141、岐阜市教育文化振興事業団。



SR3出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. スギ (No.2)、2a-2c. スギ (No.3)、3a-3c. スギ (No.4)、4a-4c. サワラ (No.1)、5a-5c. サワラ (No.5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

写真図版3 炭化材の走査型顕微鏡写真

第4節 池泉遺構 S R 2・S R 3 出土の岩石同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1.はじめに

C 8 トレンチ池泉遺構 S R 3 および B20 トレンチ池泉遺構 S R 2 から出土した緑色系岩石について、偏光顕微鏡観察を行い、岩石同定を行った。

2. 試料と方法

分析No.	トレンチ	遺構	特徴	岩名
1	C8	SR3	暗オリーブ灰色～暗緑色～黒色、片理有	緑簾石/クチノ閃石片岩
2			暗緑色～黒色、片理有	角閃石片岩
3			暗オリーブ灰色～暗緑色、やや片理の有る塊状、石英脈有	緑簾石/クチノ閃石片岩
4	B20	SR2	緑色～緑灰色、片理が頗著(斜面性高)	緑簾石片岩

第15表 岩石同定結果一覧

の特徴について調べた。

試料は、岩石カッターを用いて一部を採取した。岩石試料は、精密岩石薄片作製機を用いて、厚さ0.02mm前後の薄片に整形した。

3. 岩石の偏光顕微鏡観察と岩石同定

[分析No. 1 : 緑簾石/クチノ閃石片岩 (写真図版4-1a・1b)]

暗オリーブ灰色～暗緑色～黒色の片理のある岩石である。薄片では、クチノ閃石と柱状の角閃石または緑簾石が集合し、曹長石や石英とともに脈状に分布する。

[分析No. 2 : 角閃石片岩 (写真図版4-2a・2b)]

暗緑色～黒色のやや片理のある岩石である。薄片では、細かい柱状ないし針状の角閃石（開放ニコルにおいて淡緑色、直交ニコルにおいて黄色～赤色）およびクチノ閃石（開放ニコルにおいて淡緑色、直交ニコルにおいて無色）の集合層が粗粒部と細粒部の互層状に分布する。その他の鉱物では、無色の曹長石や石英、緑色～無色の緑泥石、黒色の磁鉄鉱などを伴う。

[分析No. 3 : 緑簾石/クチノ閃石片岩 (写真図版4-3a・3b)]

暗オリーブ灰色～暗緑色のやや片理のある塊状岩石である。薄片では、クチノ閃石と柱状の角閃石または緑簾石が集合し、曹長石や石英とともに部分的に脈状に分布する。

[分析No. 4 : 緑簾石片岩 (写真図版4-4a・4b)]

緑色～緑灰色の著しく片理のある岩石である。薄片では、針状のクチノ閃石や粒状の曹長石や石英が織状に分布し、緑色粒状の緑簾石が散在する。

4. 考察

庭園から出土した緑色系岩石について岩石薄片を作製し、偏光顕微鏡で観察・同定した。

その結果、緑簾石/クチノ閃石片岩2点、角閃石片岩1点、緑簾石片岩1点であった。

これらの片岩は、広域変成帯に属する変成岩であり、主に中央構造線沿いに帶状に分布する三波川変成帯に見られる岩石である。三波川変成帯は、中央構造線沿いに九州～和歌山～伊勢～新城～伊那東側、そして群馬県下仁田～埼玉県越生に至る。

S R 2 及び S R 3 から出土した緑色系片岩は、地理的に近い伊勢地域から運ばれてきた可能性が考えられる。

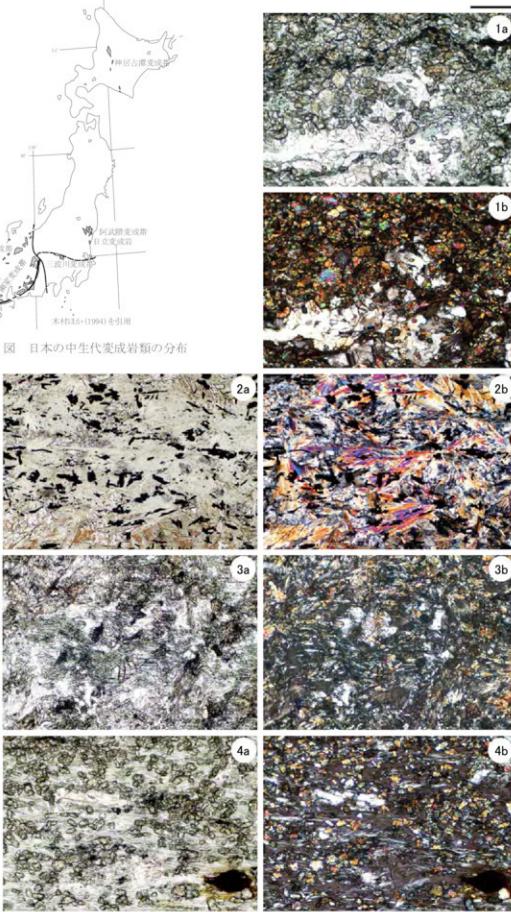
引用・参考文献

日本の地質「中部地方II」編集委員会編 (1988) 日本の地質5「中部地方II」、共立出版、310p.

木村敏雄・連水格・吉田鎮男 (1994) 日本の地質、東京大学出版会、362p.

黒田吉益・諫訪兼位 (1989) 偏光顕微鏡と岩石鉱物 [第2版]、共立出版、343p

都城秋穂・久城育夫 (1972) 岩石学 I. 偏光顕微鏡と造岩鉱物、共立出版、219p.



写真図版4 岩石の顕微鏡写真

第5節 C地区出土瓦の蛍光X線分析

竹原弘展・藤根 久 (パレオ・ラボ)

1.はじめに

岐阜城千畳敷遺跡C 7トレレンチより出土した飾り瓦について、元素マッピング分析を行い、金箔の分布状況を調査した。一部飾り瓦（分析No. 1, No. 6, No. 7）については、黒色付着物の観察、分析を行っている（第6節参照）。

2.試料と方法

分析対象は、飾り瓦9点である（第16表）。

元素マッピング分析は、エネルギー分散型の蛍光X線分析

顕微鏡XGT-5000Type II（（株）堀場製作所製）を使用した。

装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）

ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は

高純度Si検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム

（Na）～ウラン（U）である。また本装置は、試料ステージ 第16表 元素マッピング分析試料一覧

の走査により元素マッピング分析が可能となる。

測定は、瓦表面の元素マッピング分析を行った。なお、瓦の中には、サイズが大きく通常の試料台では測定不可能な試料もあり、その場合通常の試料台を外して自作の試料台をセットして測定した。また、面積が大きい瓦は、2～3分割（A、B、C面）した。元素マッピング分析後、金のマッピング図を基に輝度が相対的に高い箇所を2ヶ所（a、b）選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間10000s、ポイント分析が50kV、0.10～1.00mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間1000sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。値は、金などの金属元素は単体で、それ以外の瓦胎土に由来すると考えられる元素は酸化物の形で算出した。

3.結果および考察

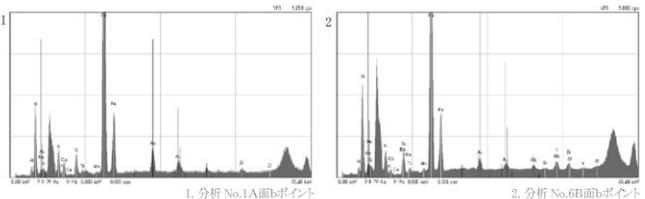
金（Au）とバックグラウンド（BG、金やケイ素などの蛍光X線を除いた散乱X線のこと）のマッピング図を写真図版5～10に、マッピング図中に示したa、bポイントの半定量分析結果を第17表に示す。分析No. 1のA面bポイント、分析No. 6のB面bポイントのポイント分析では、少量ではあるが金が検出された。金が検出された2ヶ所のポイント分析で得られた蛍光X線スペクトルを、第37図1～2に示す。マッピング図で輝度が高いだけでは、回折線などの金由来ではない妨害ピークが偶然一致している可能性も考えられるが、両スペクトルとも金マッピング図の測定に使用されている最も高く検出されるピーク以外の金のピークも確認されており、金由来のピークといえる。分析No. 6については、実体顕微鏡観察においても金箔が観察された（写真図版10-2）。

4.おわりに

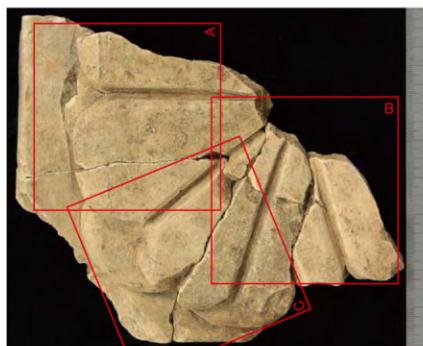
飾り瓦の元素マッピング分析の結果、分析No. 1と分析No. 6から金の存在が確認された。金箔が使用されていたとみられる。いずれも金が少量しか残存していないかったため、金箔中の銀や銅の含有については不明であった。その他7点の飾り瓦からは、金は検出されなかった。

分析 No.	報告 No.	位置	Au	Ag	Cu	Zn	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO		
1 919	919	A b 2.25	—	—	—	—	—	50.41	7.68	5.34	—	4.55	—	29.75	—	—	2.27	—			
		B a b	—	—	—	—	13.51	60.12	1.26	4.31	1.52	1.84	0.14	14.81	—	—	0.13	—			
		C a b	—	—	—	—	20.03	59.13	0.91	4.81	0.60	2.72	—	10.94	0.15	0.08	—	0.06	0.53		
		—	—	—	—	10.47	48.50	1.32	4.04	0.43	3.31	—	29.84	0.13	0.10	—	0.48	1.34			
2 920-1	920-1	a b	—	—	—	—	14.85	71.37	0.91	3.31	0.33	1.24	0.07	7.72	0.04	—	—	0.13	—		
		—	—	—	—	16.33	73.53	0.79	3.18	0.21	1.35	—	4.57	—	—	—	0.04	—			
3 920-2	920-2	a b	—	—	—	—	0.04	23.43	62.44	0.74	3.34	0.35	1.46	0.49	7.59	0.05	—	0.08	—		
		—	—	—	—	17.29	52.11	1.38	5.28	0.55	2.67	—	18.53	0.17	0.12	—	0.37	1.54			
4 920-3	920-3	A b 0.08	—	—	—	—	45.04	6.99	1.45	4.12	—	—	—	34.11	0.35	0.19	—	1.01	6.32		
		B a b	—	—	—	—	22.53	67.73	—	2.85	0.31	1.13	—	5.40	—	—	0.04	—			
		C a b	—	—	—	—	10.57	50.16	1.85	5.51	0.60	5.12	0.29	25.24	0.16	—	—	0.50	—		
		—	—	—	—	16.24	61.56	0.61	7.08	0.56	2.94	0.09	10.62	0.07	0.04	—	0.19	—			
5 921	921	A b 0.08	—	—	—	—	42.82	4.25	4.60	—	6.23	0.57	39.70	0.36	—	—	1.47	—			
		B a b	—	—	—	—	22.64	67.81	0.70	2.74	0.20	1.22	—	4.56	—	—	0.04	—			
		C a b	—	—	—	—	14.38	66.47	0.85	2.14	1.28	2.29	—	11.32	0.11	0.06	—	0.18	0.95		
		—	—	—	—	19.31	64.41	—	3.80	0.36	2.18	—	9.75	0.04	0.03	—	0.10	—			
6 922	922	A b 0.08	—	—	—	—	45.94	4.18	8.18	0.95	6.32	—	32.83	0.34	0.26	—	1.01	—			
		B a b	—	—	—	—	21.12	63.32	0.69	3.50	0.40	1.99	—	8.93	0.05	—	—	0.09	—		
		C a b	—	—	—	—	18.00	60.09	1.14	5.15	0.58	2.42	0.15	11.85	0.07	0.03	—	0.20	0.35		
		—	—	—	—	19.37	60.59	0.36	2.48	0.22	1.53	—	6.40	—	—	—	0.05	—			
7 923	923	A b 0.088	—	—	—	—	24.11	60.83	0.34	4.74	0.32	1.58	—	7.96	0.04	0.02	—	0.06	—		
		B a b	—	—	—	—	16.87	77.06	—	1.24	0.18	1.13	—	3.48	—	—	—	0.04	—		
8 924	924	A b 0.08	—	—	—	—	6.97	78.14	2.01	3.52	0.44	2.21	—	6.60	—	—	—	0.11	—		
		B a b	—	—	—	—	0.08	13.72	57.14	1.37	4.65	0.54	3.32	0.13	17.60	0.13	0.09	—	0.25	0.98	
9 929	929	A b 0.088	—	—	—	—	0.03	0.03	17.33	75.37	0.39	2.30	0.55	0.63	0.61	2.46	0.03	0.05	—	0.06	0.19
		B a b	—	—	—	—	—	12.38	66.36	1.57	2.92	0.49	1.94	0.17	12.13	0.09	0.04	0.19	0.16	0.68	
		C a b	—	—	—	—	—	14.19	67.20	—	3.44	—	2.56	0.25	12.20	—	—	—	0.22	—	
		—	—	—	—	—	14.95	72.33	0.29	2.95	0.44	1.41	0.05	7.46	0.03	—	—	0.09	—		
10 929	929	A b 0.02	—	—	—	—	0.02	16.06	77.21	0.27	1.42	0.21	0.73	0.52	3.38	0.02	—	—	0.04	0.14	
		B a b	—	—	—	—	—	12.77	66.48	0.49	5.37	0.54	2.13	0.10	11.25	0.08	0.05	—	0.17	0.57	
11 929	929	A b 0.02	—	—	—	—	—	14.81	62.19	0.55	4.24	0.40	2.74	0.21	14.09	0.07	0.05	—	0.66	—	
		B a b	—	—	—	—	—	0.02	14.15	80.32	—	1.67	0.13	0.59	—	2.99	—	—	—	0.02	0.10
12 929	929	A b 0.02	—	—	—	—	—	20.53	62.41	—	3.24	0.28	1.74	0.08	10.90	0.08	0.04	—	0.14	0.56	

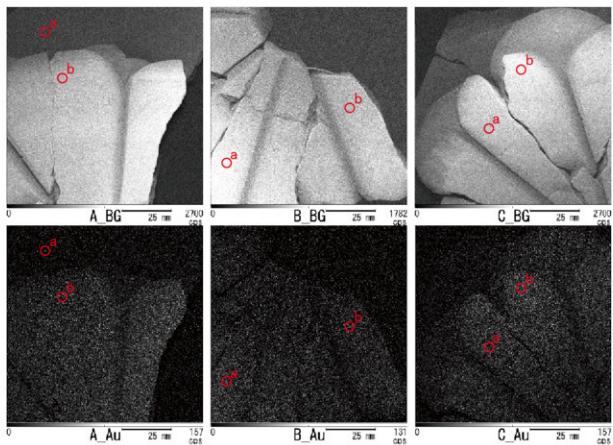
第17表 半定量分析結果



第37図 飾り瓦金検出箇所の蛍光X線スペクトル図

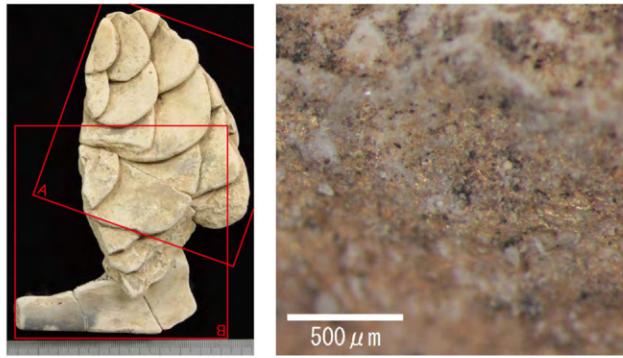


分析 No.1 のマッピング範囲



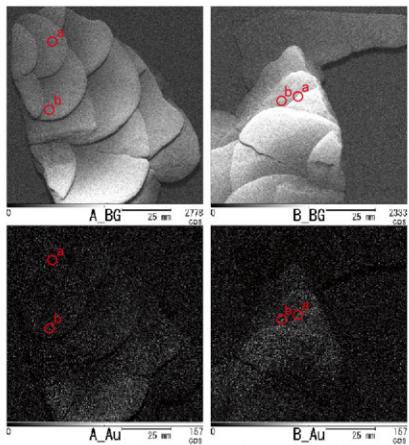
元素マッピング図 (BG : バックグラウンド、Au : 金)

写真図版5 元素マッピング分析結果（1）



分析 No.6 のマッピング範囲

金箔の実体顕微鏡写真 (B面 b ポイント周辺)

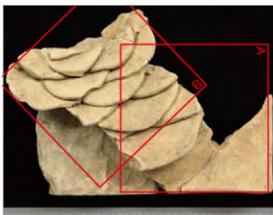
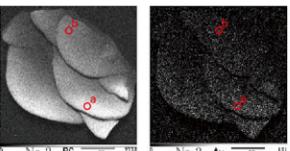


元素マッピング図 (BG: バックグラウンド、Au: 金)

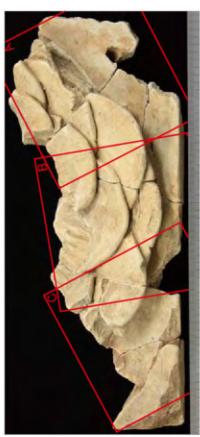
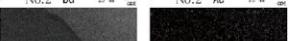
写真図版6 元素マッピング分析結果 (2)



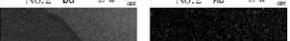
分析 No.2 のマッピング範囲



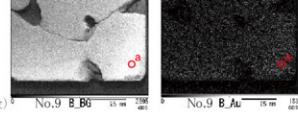
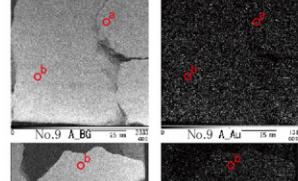
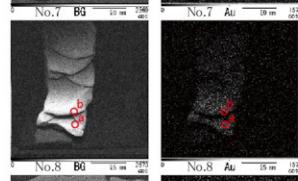
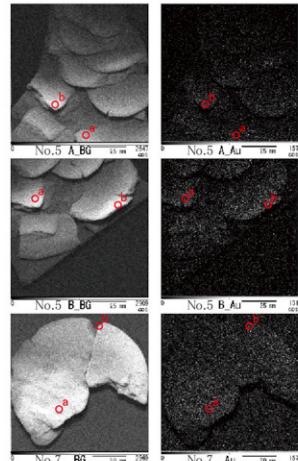
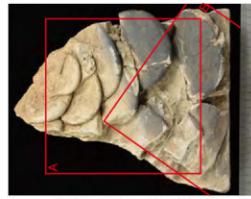
分析 No.3 のマッピング範囲



分析 No.4 のマッピング範囲



右；元素マッピング図 (BG : バックグラウンド, Au : 金)
写真図版7 元素マッピング分析結果（3）



右；元素マッピング図（BG：バックグラウンド、Au：金）
写真図版8 元素マッピング分析結果（4）

第6節 C地区出土瓦の漆分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1.はじめに

岐阜城千畳敷遺跡C 7 トレチより金箔が見られる飾り瓦が出土した。ここでは、金箔が見られない飾り瓦について金箔の漆塗りの痕跡を調べるために赤外分光分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、飾り瓦3点である(第18表)。なお、金箔が見られた分析No.1は、漆質物が見られなかつたことから、実体顕微鏡観察のみ行った。

赤外分光分析は、付着物から手術用メスを用いて少量削り取り、厚さ1mm程度に截断した臭化カリウム(KBr)結晶板に押しつぶして、油圧プレス器を用いて約7トンで加压整形した。

測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆やアスファルトなどの吸収スペクトルと比較・検討した。

3. 結果および考察

以下に、各付着物の赤外分光分析および蛍光X線分析結果について述べる。なお、赤外吸収スペクトル図は、縦軸が透過率(%)、横軸が波数(Wavenumber(cm⁻¹);カイザー)を示す。また、各スペクトル図はノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は生漆の主な赤外吸収位置(第19表)を示す。
【分析No.1(試料No.922)】

この飾り瓦は、金箔が残存する瓦であるが、漆特有の光沢のある淡褐色等の漆質物は見られなかった(写真図版11-1)。

【分析No.2(試料No.919)】

この飾り瓦には金箔は見られなかった。付着物は、一定の幅をもつ黒色の光沢物であり、鉛筆で書いたような付着物である(写真図版11-2a)。

赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収(吸収No.1およびNo.2)が僅かに見られたが、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(No.6~8)は確認されなかった(第38図-2b)。

【分析No.3(試料No.923)】

この飾り瓦には金箔は見られなかった。付着物は、試料No.919と同様、一定の幅をもつ黒色の光沢物であり、鉛筆で書いたような付着物である(写真図版11-3a)。

赤外分光分析では、漆などの有機物に見られる炭化水素の吸収(吸収No.1およびNo.2)が明瞭に見られたが、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(No.6~8)は確認されなかった(第38図-3b)。

4. おわりに

C 7 トレチ出土の金箔が見られる飾り瓦について、金箔の漆塗りの痕跡を調べるために赤外分光分析を行った。

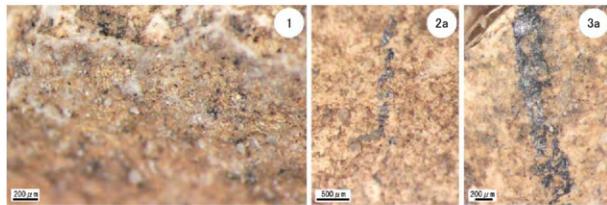
その結果、鉛筆書きのような黒色光沢部分について測定したところ、生漆の吸収は見られなかつた。なお、金箔が見られた飾り瓦では、漆様物は見られなかった。

分析No.	遺物	報告No.	付着物の特徴	備考
1	瓦	922	漆質物未検出 実体顕微鏡観察のみ	
2		919	黒色光沢 鉛筆書き跡様	
3		923	黒色光沢 鉛筆書き跡様	

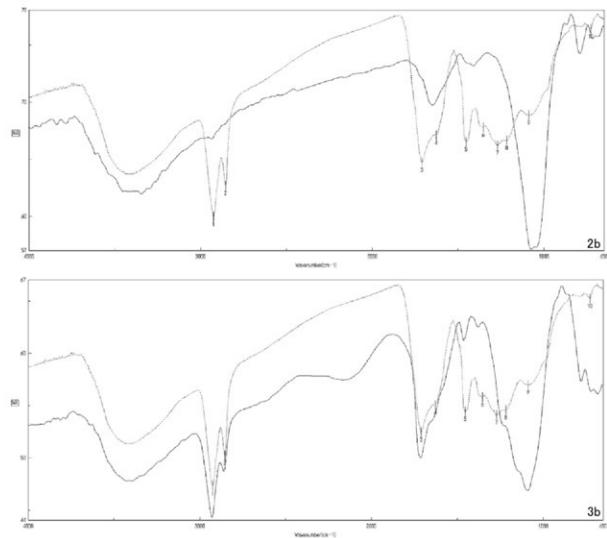
第18表 赤外分光分析試料一覧

分析No.	位置	生漆	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8237	
5	1454.06	47.1946	
6	1373.79	45.9939	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

第19表 生漆の赤外吸収位置とその強度



写真図版 9 付着物の写真



実線：付着物、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置

1. 試料No.922 2a-2b. 試料No.919 3a-3b. 試料No.923

第38図 赤外分光スペクトル図



池泉遺構SR2上岩壁(北西かん)



池泉遺構SR2全景(北西かん)



池泉遺構SR2全景(北西かん)



池泉遺構SR2全景(北かん)



池泉遺構SR2全景(北東かん)



池泉遺構SR2全景(東かん)





石組SV51・瓦集積SX56検出状況(北から)



石組SV51・瓦集積SX56検出状況(北西から)



石組SV51・瓦集積SX56検出状況(西から)



石組SV51・瓦集積SX56検出状況(南西から)



階段SX30検出状況(南東から)



階段SX30検出状況(東から)



階段SX30検出状況(北東から)



階段SX30・瓦石11検出状況(東から)



階段SX30検出状況(西から)



階段SX30検出状況(西から)



石敷SX55検出状況(北西から)



B20トレンチ東半完掘状況(南から)



B20トレンチ東半完掘状況(南から)

B20トレンチ土層堆積状況(北西から)



登山道検出状況(北西から)



池泉遺構SR3全景(西から)



池泉遺構SR3埋没状況(西から)



池泉遺構SR3土層堆積状況(北から)



池泉遺構SR3炭検出状況(北東から)



池泉遺構SR3炭検出状況(南西から)



池泉遺構SR3北半完成状況(南西から)



池泉遺構SR3北半完成状況(東から)



池泉遺構SR3南半完成状況(北西から)



池泉遺構SR3南半完成状況(西から)



池泉遺構SR3池底検出状況(南東から)



池泉遺構SR3池底検出状況(南から)



池泉遺構SR3池底検出状況(南西から)



池泉遺構SR3池底検出状況(北から)



池泉遺構SR3手水跡出土状況(北東から)



池泉遺構SR3景石2検出状況(北から)



池泉遺構SR3手水跡・転落石出土状況(南東から)



池泉遺構SR3転落石出土状況(南西から)



池泉遺構SR3景石1・炭堆積状況(西から)



池泉遺構SR3景石1・炭堆積状況(北西から)



池泉遺構SR3景石1・炭堆積状況(南西から)



池泉遺構SR3全景(西から)



C8トレンチ作業風景



C9-1, 2, 3トレンチ発掘状況(東から)



C9-1トレンチ南壁土層堆積状況(北から)



C9-1トレンチ深掘南壁土層堆積状況(北から)



C9-1トレンチ西壁土層堆積状況(東から)



C9-2トレンチ南壁土層堆積状況(北から)



C9-2トレンチ東壁土層堆積状況(西から)



C9-2トレンチ西壁土層堆積状況(東から)



C9-3トレンチ底盤状況(北から)



C9-3トレンチ底盤状況(南から)



C9-3トレンチ東壁土層堆積状況(西から)



C9-3トレンチ西壁土層堆積状況(東から)



C9-4トレンチ東半北壁土層堆積状況(南から)



C9-6トレンチ南壁土層堆積状況(北から)



C9-6トレンチ西壁土層堆積状況(東から)



C9-6トレンチ西壁土層堆積状況(西から)



C10トレーンチ全景(南西から)



C10トレーンチ堆層検出状況(西から)



石積SV47検出状況(南西から)



石積SV47検出状況(西から)



石積SV47検出状況(北から)



石積SV47検出状況(東から)



石積SV47検出状況(南から)



C.11 h. シンチ全景(北から)



石垣(1次SV5・石組SV50検出状況(北西から))



石垣(1次SV5・石組共置構SX52検出状況(北から))



石垣(1次SV5・石組SV50検出状況(北から))



石垣(1次SV5検出状況(東から))



石組SV49検出状況(北から)



石組SV49検出状況(東から)



石組SV50・集石遺構SX53検出状況(北西から)



石組SV50・集石遺構SX53検出状況(南東から)



石組状遺構SX52検出状況(北東から)



平成26年度現地説明会風景(C11)トレンチ



F3トレンチ全景(南から)



F3トレンチ東壁土層堆積状況(南西から)



F4トレンチ全景(北東から)

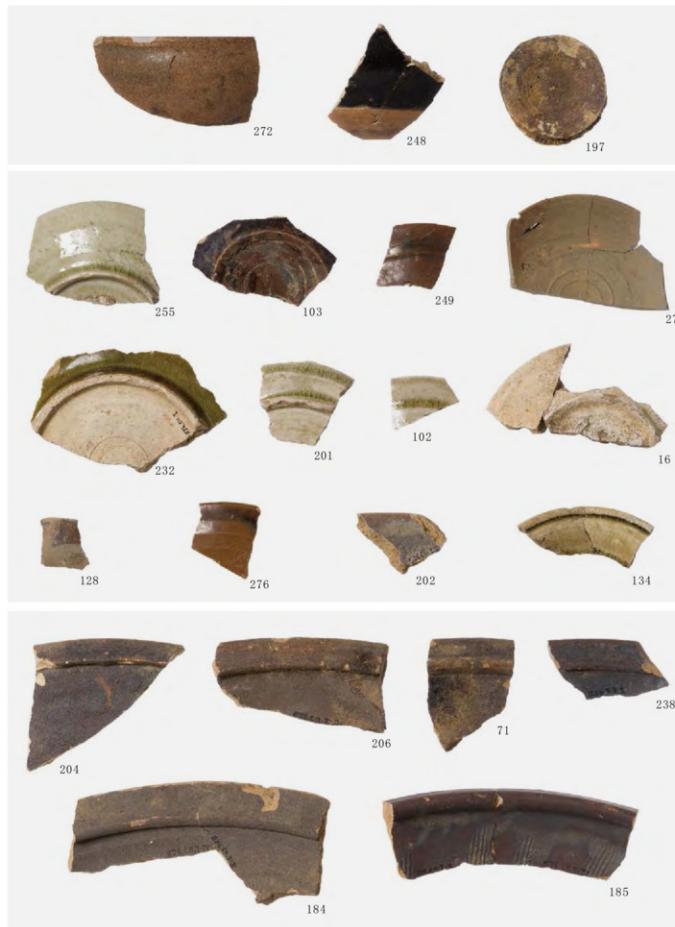


F4トレンチ西壁土層堆積状況(東から)













報告書抄録

フリガナ	ギフジョウアト
書名	岐阜城跡
副書名	織田信長居館伝承地の確認調査
巻次	4
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	恩田裕之・高橋方紀・天下 永・(株)バレオ・ラボ
編集機関 所在地	岐阜市教育委員会 (〒500-8720 岐阜市神田町1-11 058-214-2365) (公財)岐阜市教育文化振興事業団 (〒500-8245 岐阜市上川手735-2 058-259-4646)
発行年月日	2016年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岐阜城千豈敷遺跡	岐阜市千豈敷	21201	7195	35° 26' 5"	136° 46' 30"	20120604～ 20130314 20140718～ 20150130	407m ²	遺跡の内容確認

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岐阜城千豈敷遺跡 (国史跡岐阜城跡)	戦国時代	池泉遺構 石積遺構 礎石 階段 石組遺構 石敷遺構 集石遺構	瀬戸美濃産陶器 輸入陶磁器 土師器皿 瓦 石製品 金属製品	2箇所で池泉遺構を検出 1つは岩盤を背後にしたもので、石積による護岸、階段が設けられる もう1つは巨石列を背後にしたもので、緑色片岩の景石や円礫敷が伴う

岐 阜 城 跡 4

—織田信長居館伝承地の確認調査—

平成 28 年 3 月

発行 岐阜市神田町 1-11

岐阜市教育委員会
